



# 危険な上司

第6話 北風は太陽に恋をする Ver1.0

石田 累 *ruishiida*

プロローグ……1

あと10分で、最終列車が停車する。

進藤栄一（しんどう えいいち）は生あくびをすると、錆びついた椅子を軋ませて立ち上がった。

どうせ、列車待ちの客は1人もいない。

そう思いつつも、念のため、駅舎構内を見回してみる。

猫の額ほどの狭い待合。線路をまたぐ広告だらけの跨線橋。

案の定、客の気配は1人としてない。

なにしろ、この線路の先にあるのは路線バスすらろくに通ら

ない山間の集落だ。

当然のことながら人口もぐつと減り、人の行き来も少なくなる。観光地もなければ宿もない。ただ田畑があるだけの農村地なのだから。

いずれは市町村合併とやらで町名も代わるだろうが、その前にこの赤字路線自体廃止になるのかもしれない、と、進藤は密かに危惧している。少なくとも近い将来には本数と車両は減らされるだろうし、夜は機械警備に切り代わるだろう。

やがて定刻どおりに最終列車が到着し、市人の客を吐き出すやいなや即座に発車していった。

その客が、ホームと駅舎を繋ぐ階段から背を丸めるようにして駆け下りてくる。

「おつかれさん」

進藤がいつものように声をかけると、平日の大半はこの最終便で帰ってくる男は、気のいい笑顔を返してくれた

地元農家の一人息子で、名前は吉田。ここから一駅離れた場所にある町役場で事務員をしている。もう年は40前だが、地元青年団の団長をしている陽気な男だ。

「寒いねエ。夕方はチラホラだったが、もう吹雪くほど降ってるよ。電車がいつ停まるかわかんねえから、乗ってるこっちは

ヒヤヒヤでさ」

マフラーを首に巻き直しながら吉田は言った。

その様を、出札口のプラスチック越しに見ながら、進藤は金庫の現金を数え始める。

「電車は、案外雪には強いんです。この程度の雪じゃ、停まる心配はありませんよ」

「いや、進藤さんは知らねエだろうけど、このあたり、数年に一度、なアんの前触れもなくドカ雪が降るんだよ。そういや、あなた、結局一回も経験できずじまいだったよなア」

「この冬、そんな事態にならなければ、そうなりますね」

進藤が微笑むと、吉田は赤らんだ顔をくしやりと歪めて笑った。

「寂しくなるよ。進藤さんがいなくなると」

「こちらこそ、随分よくしていただいて」

「せっかく独身なんだから、この辺りで嫁もらって、ずっとこの駅にいてくれたらいいのにさア。いや、本当にいい子がいるんだよ」

「さすがにこの年で、結婚は」

「残念だなア」

まだ吉田は未練がましそうだったが、表に家族が迎えに来て

いるらしく、結局は急ぎ足で駅舎を出ていった。が、即座に舞い戻ってきて、扉から顔だけのぞかせる。

「進藤さん、気をつけて。外、相当降ってるよ」

「お気遣いなく。アパートは歩いてすぐそこですから」

「そうじゃない。この辺り、出るんだよ」

出る………？

「雪女」

吹きだした進藤は、「気をつけて」と言っつて、吉田の丸い背中を見送った。

——さて、これで今日も終わりだ。

手提げ金庫を大金庫の中に収めた進藤は、次に自分の机を片づけてから駅員室の外に出た。

今日も何事もなく、いつもと同じ1日が終わった。

ここから先の手順もいつも通りだ。危険物の確認と簡単な片付けをしてから戸締りをする。夜間は警備会社にセキュリティを任せているから、出入口の発信装置もオンに切り替えておかねばならない。

もう3年も進藤は、この小さな駅の、実質ひとりきりの駅員だった。

定年が近いとはいえ、正直、ひどく孤独な3年だった。島流



し。会社の口さがない連中が、この辺りの駅に飛ばされた者を  
揶揄して言うのもうなずける。

2時間に1本の電車だけが、唯一の公共交通機関である陸の  
孤島。一応この辺りは住宅や企業が集中した『街』にあたるが、  
進藤の生まれでもある灰谷市とは比べるべくもない。

地の人間でもなければ、誰だってこんな町には飛ばされたく  
ないだろう。実際、大抵は地元の間人がその任につくが、稀に  
進藤のように、地元とはなんの関係もない人間が辞令を受ける  
時もある。

ただし、長くてもその任期は3年で、あと2ヶ月で、ようや

く進藤の任期は終わろうとしていた。まだ辞令は出ないが、残留希望を出さない限り、まず異動は間違いない。

「まあ、いいこともあったさ」

ゴミ箱のゴミを袋に移し替えながら、進藤はひとりごちた。

地元の人にはよくしてもらった。色んな寄り合いに呼ばれたし、沢山の人と知り合いになれた。先ほどの吉田もその1人だ。

——それに人身事故も、滅多にないしな。

大きな町の駅にいと、事故に出くわす率はかなり高い。幸い進藤には一度しか経験がないが、中には十数回人身事故を経験した不幸な同僚もいる。

猛進してくる鉄の塊に跳ね飛ばされた轢断死体は、言葉では言い表せないほど無残なものだ。

四肢は車輪に巻き込まれ、内蔵は飛び出し、粉碎された肉片はところかまわず飛散する。まず、原型はとどまらない。生きているか死んでいるかのレベルの話ではなく、人間かそうではないか、そんなレベルまで破壊されてしまつのである。

その後始末には、大なり小なり当直駅員が駆け出される。むろん、すみやかに次の電車を走らせるために、である。

電車に張り付いたり、線路に飛散してしまつた肉片を、ひとつひとつビニール手袋をしただけの手でひろい集める。車輪の

隙間に入り込んだものはほじくりだす。かきあつめて袋に入れる。手の指一本がないと言われれば、出てくるまで這いつくばってそれを探す。

たった一度の事故処理任務は進藤が30歳の時だったが、今でも夢に出てくるほど、それは強烈な体験だった。

人身事故は、その始末に駆り出された駅員にとっては、自身の精神を壊しかねないほどの大事件なのだ。

が、こののどかな田舎町の駅で、人身事故があったのはたった一度。

それも今から13、4年くらい前の出来事だ。

当然、進藤は簡単な記録でしかそれを知らない。夫婦の心中だというから、交じり合った遺体の回収作業は、想像を絶する難作業だったろうが……。

想像し、進藤はおぞけを振った。

——そういう意味じゃ、いい勤め先だった。まあ、それでも長くいるには退屈にすぎるが。

コンコンと、微かな音がしたのはその時だった。

顔をあげると駅舎のガラス扉の向こうに、白い人影が立っている。

女だと判ったのは、その影が華奢で、夜目にも長い髪をして

いるのが見えたからだ。

駅舎の中には薄い灯りがついているが、逆に外は真っ暗だ。

向こうからこちらは見えても、進藤には外の光景は殆んど見えない。

吉田さんの奥さんかな、と一瞬思ったが、立ち姿の印象がまるで違うとすぐに思い直した。

「すみません」

進藤は声を張り上げた。

もう扉は施錠してしまっている。今の状態で外してしまえば、今度は警備会社に通報がいく。

「もう電車終わっちゃったんですよ。今日はもう、ここ閉める  
とこですから」

沈黙。ただし、女がそこを立ち去る気配はない。

少し不気味になって、進藤は眉を寄せながら、ポケットにし  
まった鍵の束を取り出した。

——聞こえなかつたかな。

いや、そんなはずはない。しかし耳が不自由な方だという可  
能性もある。

仕方なく、入り口の警備会社の通報装置をオフにしてから、  
扉を開けた。

「あの」

言葉はそこで、喉につかえたように止まった。

外は、吉田が告げたように雪が間断なく舞い散っていた。全ての店が灯りを消した商店街。雪だけが生き物のように舞う闇の中に、白いコートに白いブーツ。白い肌をした女が立っている。

言葉がそこで止まってしまったのは、その女が——進藤が今まで見たどの人間よりも、比喻する言葉が思いつかないほど、美しかったからだ。

もはや、生身の人間とは思えないほどに。



透き通るように白い肌は、冷えているのか人の温度というものが全く感じられない。まるで白い陶器のようだ。

筆で刷いたような優雅な眉に、つくりもののように整った長いまつげ。

なにより印象的なのは黒黒と濡れた瞳だ。見ているだけで吸い込まれそうだ。深淵で、謎にみちた、夜の果てに――

雪女。

ぞくり、とした。

魔に魅入られた時というのは、こういう瞬間をいうのかしれない。

「遅くに、申し訳ありません」

しかし、現実の女の吐く息は白く、声は寒さに凍えていた。

そのかじかんだ声は、たおやかな楽器が奏でる音色のように美しかった。

「いえ、何か——いや、電車はもう出てしまったのですが」

片や、進藤の口からは、びっくりするほどひっくりかえった裏声が出た。うわ、と思った。50過ぎのオヤジが、20そこそこの美女を前に動揺しているのがバレバレだ。

みるみる顔が赤らんでくるのを咳き込みで誤魔化しながら、進藤は続けた。

「夕、タクシーならまだやっていいると思うので、なんだつたら私が声をかけてきましようか。隣に、タクシーの待ち合いが、ありますんで」

女は微かに微笑してから、ゆつくりと首を横に振った。

寒さには慣れていない風ではあつたが、女の眼差しも態度もさざめきひとつない水のように落ち着きはらつたままである。

「えつと……あの……では一体、なんの御用で？」

女は答えない。不可解な沈黙。その目は最初から進藤をじつと見据えている。今も、見ている。言い方は悪いが無遠慮なほどに。

恐ろしいほど整った顔に見えるのは、左右がほぼ均一に对照だからだ。どこにも歪みやひずみがない、完璧な容貌、完璧な美貌。本当に人間か？ いや、ロボットでもこうも精巧に作れるものだろうか？

「……私の顔に、何か？」

と、思わず聞き返したくなる衝動を、進藤はかろうじてこらえた。

間違つても一目惚れされる顔ではないという自信はある。そしてこんな美女には、誓つてもいいが面識はない。

——なんだろう、田舎者の顔が珍しいとか。それとも知り合

いに似ているとか？

しかしすぐに進藤は気がついた。人間観察という意味なら、もう30年以上の経験がある。この女は今、値定めをしているのだ。目の前の男が、信用できる人間か、どうか。

女が、ようやく形の良い唇を開いた。白い歯が真珠の粒のように美しかった。

「実は駅の中を、少し見せていただきたいのです」

「え？」

「よろしいでしょうか。私、明日にはもう、東京に戻らなければなりません。今夜しか時間がないものですから」

淡々とした口調ではあったが、その声に進藤は、真実女に切迫した事情があることを読み取った。

——まあ、長い駅員生活だ。こういうこともあるだろう。

「いいですよ」

あえてなんでもないように答えて、進藤は扉を大きく開き、駅舎に女を招き入れた。

「もしかして取材ですか。それだったら本社に一報いれないとまずいんで、ご名刺と目的を教えてくださいただきたいんですけどね。そうじゃないんなら」

ふわり、と花が舞い上がるような香りがして、女が進藤の側

を横切った。

香水、フローラル、残念なことに女に縁のない進藤には、洗剤の香りしか思い出せない。しかしその華やかな香りの中に、ふと別の、よく知っている匂いの残滓を嗅いだ気がして、進藤は眉を寄せていた。……病の匂いだ。

女は言葉もないまま、薄暗い待ち合いをぐるりと見回し、そのまま歩いてベンチにそつと腰掛けた。手で木製の手摺にふれる。天上を見上げる。

それきり、5分はそのままの姿勢でいただろうか。

「ホームを、見せていただいても？」

その時には進藤は、女に気をきかせて駅員室の中に戻っていた。

女の目的が、半ば判ったからである。

「電車はもう、きませんよ」

冗談めかして進藤は言った。

「始発の6時まで、まとうつていうんなら別ですけどね」

そのジョークの意を察したのか、女は初めて感情を見せて微笑した。

「安心してください」

返された言葉に、進藤は少し不安をいだきながらも、頷きだ



けを返した。

自殺なんてしませんから、安心してください。

つまりは、そういうことである。

10分たったなら様子を見に行こうとだけ決めて、進藤は日誌を開いた。もう書き終えていたが、少しばかり小説家になった気分で加筆してもいいだろう。

ゆうに30分たった頃、女が跨線橋を渡って戻ってきた。その間、進藤は二度ほど様子を見に行つたが、そのことは女には言わないでおいた。

駅は別れの場所でもある。

人はそこに、様々な思い出や忘れ物を残しているのだ。

「もう、よろしいんですか」

あえて、快活に進藤は訊いた。

「ええ、ありがとうございます」

微笑した女が会釈する。寒さのせいかな顔色はますます白く儂く、今にも消えそうなほど透き通って見える。

しかし女は立ち去らず、そのまま静かに駅員室と待ち合いを繋ぐプラスチックの出札口の方に歩み寄ってきた。

「ひとつ、お願いしてもよろしいですか」

「……なんでしょう」

進藤はためらいながら顔を上げた。面倒な頼まれ事をされる予感がしたが、それがいかに無理難題でも、何故か聞いてしまうような、そんな不安が胸をよぎる。

「お礼は、します。不躰で失礼ですが、お金であれば、いくらでも」

「いいですよ、お金なんて。……あ、でも、できないことはできないですけど」

進藤は慌てていい添えたが、女はもう、進藤が断らないことを確信しているようだった。人を自分の意のままに動かすことに慣れている——そんな嫌な印象をふと感じた。

しかし今、進藤を動かしているのは、女の美貌ではなく、その態度や口調から見え隠れする切迫した何かの感情である。

「預かっていただきたいものがあるんです」

静かな決意を思わせる声で、女は言った。

「なんでしょう」

「手紙です」

「……いつまで」

「ある人が、受け取りにくるまで」

「いつのことです」

あと2ヶ月で、進藤はこの駅を去る。

「あと半年……いえ、もしかするとまだ先になるかもしれないませ  
ん」

「……………」

そんな約束は——私には、無理です。

しかし進藤は、黙って手を差し伸べていた。

あと半年の意味が、直感的に判ったような気がしたからだ。

「ありがとう」

女は微笑んで、シヨルダーバックの中から白い封筒を取り出した。

バックにはその女の雰囲気似合わないキーホルダーがいく

つもついていた。

漫画かアニメのキャラクターのようだ。バイクに乗った正義の味方——なんだったつけ。

思い出す前に、進藤の目の前に雪のように白い封筒が差し出される。差出人も宛名もない。

ああ、子どもがいるんだ。

進藤はようやく気がついた。この女性には、バイクに乗った正義の味方に夢中になる程度の小さな子どもがいる。そういうことだ。

もう1年、残留決定だな。

「……それで、ある人というのは、どのような人物なんですよ」

進藤はそう訊きながら、封筒をそつと取り上げる。

「目印を残します」

静かな声で女は言った。

「その人にしか判らない目印を、ここに」

プロローグ………2

雪が、すごく降っていたっけ。

——君の手は温かいね

（大事にしなさい。それは、人を幸せにする手だ）

吐く息も景色も、何もかもが白かった。

あんな大切な日のことを、どうして何年も忘れていたんだろう

う。——



「どうしました」

「え」

ぼんやりとしていた成美は顔をあげた。

そしてすぐに我に返る。

カーテンを締め、振り返ると、今夜この部屋で一緒に泊まる予定になっている人は、長椅子で脚を組み、くつろいだ風に食後のコーヒーを飲んでいた。

片方の手には新聞、こんな時間にどこから取り寄せたものか、英字である。

カップをソーサに置いた氷室は、唇だけで微かに笑った。

「早く飲まないよ、冷めてしまいますよ」

「ごめんなさい。雪が……すごいと思ったから」

成美は急いで氷室の正面のソファに腰を下ろした。

まるで工芸品みたいな、華奢な作りのコーヒーターブル。沈むほどに柔らかな緋色のソファ。

広々とした室内に置かれた家具は、全て海外のブランド物だ。正直言えばコーヒーひとつ飲むのにも緊張する。

「ホテルのスイートなんて初めてで」

この部屋に入ってからの落ち着かない気持ち、成美は正直

に打ち明けた。

今日はクリスマス・イブである。

夏前に恋人同士になった2人にとっては、初めてのクリスマスだ。

「僕はキリスト教ではないので……」

と、最初はあまり（というか、全く）乗り気ではない氷室だったが、結局は、隣市にある海沿いのホテルで一泊しようと提案してくれた。灰谷市内を離れたのは、むろん、人の目を避けてのことである。

一も二もなく賛成した成美だったが、まさかこんな——高級

ホテルのスイートに部屋を取ってもらうだなんて、想像しても  
いなかった。

僕は女性に物を贈るのが苦手なのでこれで勘弁してください  
つて、むしろ何倍も値が張ったような気がするのだが、いいの  
だろうか？

「嬉しいですけど、ちよつともつたいなくないですか？ クリ  
スマスだからつて、こんなに奮発してくれなくてもいいのに」

「奮発」

氷室は少し心外そうに眉をあげた。

「まあ、奮発といえはそうかもしれないですけどね。ただサー

ビスその他を考えると、ホテルはいい部屋を取った方が間違いない。快適ですよ」

そりゃ、氷室さんにはそうかもしれないけど、人には分相応というものがあるんですよ。

と、ちよつと膨れた成美だったが、結局は氷室も同じ公務員なのだど気がついた。

もちろん私より相当上のお給料だろうけど、それでもたかが知れている。

ここは、全国的にも有名なリゾートホテルで、海外のVIPやセレブも利用していると聞く。

一泊あたり、どれだけ安い部屋に泊まったって三万から五万。そのスイートなんて……いつたいいくらするんだろう。

しかも、さっきまでこのホテルのフランス料理店でフルコースをご馳走になったばかりだというのに。

成美は、くつろいでいる氷室をちらつと見た。

コートは脱いでいるが、シックなスーツを着たままだ。成美もむろん一張羅のワンピースで来たが、正直氷室のそれとは雲泥の差かな、とは思う。

多分、海外ブランドもののオーダーメイド。質感から光沢までが、よく目にする既成品とは全く違う。衣服に限らず彼が身

につけているものは全てがそうだ。

ハンカチ、財布、キーケース。一見して地味で目立たないデザインのもの揃えているが、手触りや質感が、その辺りの衣料量販店で売っているものとは全然違う。

今にして思えば、よくぞあんな——お笑いみたいな「北風」のキーホルダーをあげようという気になったものだ。自分の勇氣と無知に拍手したい。

——てか、氷室さんの財源つてそもそもなんだろう。

実家が超お金持ちとか。だとしたら少し嫌だな。

身分が公務員である以上、自分で得た収入以上の浪費癖はち

よつと困る。とはいえ青山とか春山のスーツを着た氷室さんもまた、想像の範疇外なただけだ。

聞こうかな、でもこれ多分、NGコードに入るんだろうな。

彼は自分の家族や生活については一切話したからないから――

「聞いてもいいですか」

それでもカットを手にもつたまま、成美は立ち上がっていた。

このタイミングなら、少し――ほんの少しだけ、彼のバックグラウンドに踏み込んでもいいかもしれない。ご実家は何をされているんですか。たった一言そう聞くだけなのだから。

「ちよつと、……お聞きしたいことがあつて」



カップを持ったまま、成美は氷室の隣に移動した。

万が一質問を拒絶された場合、2人の距離が開いていると気まずさが倍増するような気がしたからだ。

「どうぞ」

と言った氷室は、少し意外そうに片眉をあげた。

「……なんですか、その目は」

「いや、君は常々、僕に不用意に近づかない方がいいと言っているんで、どういう心境の変化かと」

それは——と、たちまち成美は頬を赤く染めていた。

相手が氷室のような人の場合、軽いスキンシップは、たちま

ちデイープな展開を呼び寄せる。これはもう何度も失敗して学習済みだ。

成美はいつだつて氷室の側にいたいし、彼の、どこでもいいから触れていきたいのだが、そうすると氷室はすぐに目に薄い笑いを滲ませて——後は成美の意思なんてお構いなしに、彼の意のままにされてしまうのだ。

「ここまできて……いや、そういうことじゃなくて。2人で同じ部屋に泊まっているのに、離れる必要もないじゃないですか」「ま、そうなんですけどね」

氷室は読んでいた新聞をテーブルに置いた。

「——で？」

う、また例の、危険な笑いになっている。

本能的な恐れから、成美は少しばかり彼から身体を離していた。

「おや？ 離れる必要がないと言ったのに、何故逃げ腰なのか」

「別に——氷室さんがこつちに詰めてくるからですよ」

「今夜の君は、いつにも増して可愛いな」

「そ、そんなお世辞を言ったって、これ以上何もできませんから」

「君こそ、奮発してくれなくてもよかつたのに。プレゼントなら今から——存分にもらうんですから」

「ちよつ、氷室さつ、あのですね、私は話を」

おつかなびつくりの手から、そつとコーヒーカップから奪われてテーブルの上に置かれる。

「もう……」

「ここまで冷静に振舞つた僕を、むしろ褒めてほしいな」

成美をソファに組み敷きながら、氷室は上着を脱ぎ、ネクタイを緩めた。

「君に、少なくともあと30分程度は、クリスマススイブの夜とや

らを楽しんで欲しかったんですけどね」

「な、なんですか、それ」

「さあ」

氷室は肩をすくめ、少し皮肉に笑ってから成美の額の髪を指でわけた。

「夜景が綺麗と言ってみたり、今日は素敵だったと言ってみたり、君が言うところの精神的な幸福を語る時間ですよ」

う……、と再び成美は詰まっていた。

それは、成美が常々氷室に求めているものである。

そりや、身体のコミュニケーションも大切だと思いますよ。

でも、でもですね。その前にもっと話すことがあるでしょう。

今日みた景色のこととか、今日一日の感想とか——いわゆる精神的な幸福を2人で語り合っただけですよ。と。

「そのために、おとなしく新聞なんか読んでたんですか」

「まあ、君も、いつになく静かだったですけどね」

その言葉には、成美は虚を突かれたように瞬きをしていた。

「雪が、そんなに珍しい？」

「いえ……」

「随分長い間、空を見上げていたようですが」

それは……。

どう説明すればいいんだろう。

成美は言葉に迷い、氷室から視線を逸らした。

確かに成美は、降りしきる雪に、過去の、ある思い出を見ていた。

ただ、それは、思い出というにはあまりにも曖昧で、おぼろすぎる情景なのだ。

灯りの消えた商店街。雪で埋もれたロータリー。みるみる暗くなっていく空。時折聞こえる電車の音。

冷えたベンチ。ぽつんと置かれた石油ストーブ。暗い窓に踊る雪の群れ。そして、私の手を包み込んでくれている誰か。

「君の手は温かいね」

紺の制服に、同色のつば付き帽子。大きな手と優しい笑顔。

駅員さん——そう、その場所は駅の中に違いない。

そして成美は1人だった。

1人で、誰かを待っていた。夜になり、朝になるまで、ずっと——

あれはいつのことだったんだろう。多分、すぐく子供の頃——  
あれだけの雪が降っていたということは、実家で暮らしてい



た頃に違いない。

だとしたら、4歳から7歳の間、ということになる。

駅員さんは、雰囲氣的に20代の半ばくらい。青色の制服が鮮やかで凛々しかつたのをよく覚えている。

顔はさすがにうる覚えだが、黒縁眼鏡をかけた、いかにも生真面目で優しそうな人だった。

印象だけというなら——あくまで印象だが——悪徳弁護士、紀里谷理人とよく似ている。

成美の中で、その駅員さんの面影は、「初恋の人」として、いつも曖昧に残っていた。そのくせ、彼といつ、どんな状況で出

会ったかということは一切覚えていなかった。

というより、その時何があったのかを思い出そうとすると、成美の思考は、たちまち降りしきる雪で閉ざされる。大きな疑問に行き当たるとのた。

そもそも7歳の子どもが、雪の夜、たった一人で駅に泊まったりするものだろうか？

なにかがあったのだ。駅に一人で泊まるしかない何かがある。

その「何か」に、最近になって、ようやく成美は行き着いた。

雪——初恋の駅員さん——その次に、必ず連想されるイメージがあることに気がついたからだ。

「灰谷市はいいところですが、内陸のせいかな……冬は随分と寒いんですね」

不意に、独り言のような口調で氷室が言った。

成美は弾かれたように、氷室に視線を戻していた。

「こういう時、少しだけ東京が恋しくなります。僕は雪が嫌いなので」

「……何故ですか？」

氷室さんも、雪に何か、思い出が？

そう思っておそろおそろ訊いたのだが、氷室は唇に少しばかり皮肉な笑いを浮かべた。

「別に？　僕は名前も外見も性格も——君に言わせれば指まで冷えた人間だから、せめて気候くらい陽気であつてほしいと思う程度のもですよ」

本当に？

その割には、随分表情が暗かった。

とりつくろうように皮肉な切り返しをされたのも、少しだけ気になる。まるで、うっかり漏らした失言をごまかされているような感じだ。

そんな成美の疑念を感じたのか、氷室がほんの僅かだけ——どこか寂しげな微笑を浮かべた。

「君は僕を知らない」

「……………」

「それは僕が故意に過去を隠しているからだ、君は内心想っている」

声も出ないまま、成美はそんな氷室を見上げる。

「でも僕も、君を知らない」

——氷室さん……………。

「君の過去、君がかつて好きだった人。僕は何一つ知らないし、知りたいとも思わない。僕が好きなのは、過去の君ではないですから」

「……………」

やっぱりデビルマンには、私の思っていることなんて簡単に見抜かれていた。

気まずさと、それでも何かがちがうという微かな反発から、成美は視線を背けている。

その頬を、指の背で優しくなでられた。

「本当の意味では、僕らは互いのことを何ひとつ知らない。でも僕は——むしろそのほうが幸福なつきあいが出来ると思っている。少なくとも僕は、そういう関係を君に望んでいるんですけどね」

そうです。そうでした。

こと、恋愛関係では、私はあなたに絶対服従でないといけな  
いのです。

成美は諦めて目を閉じ、宣誓するように片手を上げた。

「……承知しました」

「よろしい」

にこつと笑った氷室が、不意に立ち上がると成美を横抱きに  
抱き上げた。

「えっ、きやつ」

「今夜は僕が身体を洗ってあげますよ」

「いつ、いいですよ。それだけは心の底からご遠慮しますっ」

「はは、まあ、そう言わずに」

氷室は快活に笑って、すたすたと浴室の方に向かって歩いて行く。

そう言わずにつて——そのパターンだと、私がお風呂で失神しかねないんですけど。

「この僕にそこまでさせて、こうも不服そうな顔をするのは君くらいですよ」

「ふ、不服とかじゃないですよ。ただですね」

「ただ？」



「もつとこう」

心を割って、じっくり話し合う時間が欲しかったっていうか。仕事上のアドバイスや、趣味や見識の話。そういうのも確かのためになるし、氷室さんが話してくれるとなんでもすごく楽しいんですけど。

そればかりじゃなくて——なんていうか——私たち、互いの深い部分からあまりに目を逸らし過ぎているような気がするんですよ。

まあ、その話題は、さつき牽制されたばかりなんですけど。言葉に迷う間に、唇がキスで塞がれる。甘くて優しい、つい

ばむような、焦らすようなキスだ。

「っ……もう、話の途中じゃないですか」

かろうじて怒った素振りはできたものの、それだけで成美は簡単に氷室の罠に落ちていた。

キスで焦らされながら運び込まれたのは、淡い照明の点つたドレッティングルームだ。

大きな姿見に、氷室に抱えられた自分の姿が映っている。

あえて、成美にそれを見せるような体制で、氷室は成美の唇を押し開け、自身の舌を滑りこませてきた。

一瞬、抵抗の気持ちがかすめたものの、もう成美もじれった

いキスの続きが欲しくてたまらなくなっている。悔しいけれどリビングからドレッティングルームまでのわずかな間に、そんな風に躡けられてしまったのだ。

濡れた音が静まりかえった部屋に響く。その音にも舌にも、酔いしれたように応える自分の横顔が恥ずかしい。

大理石のシンクに腰掛け、成美を膝に抱きかかえたまま、そんなキスを氷室はたつぷり5分は続けただろうか。

やがて成美は、シンクに座らせるような形で下ろされる。その頃にはもう成美の思考も身体も、蜜のようにとろけている。

シンクに両手をついた氷室に、一瞬顔をのぞきこまれる。暗

い影に覆われた目。その目に吸い込まれそうになった途端、再び唇が重なった。

瞬間、胸が強く締め付けられる。

性急で荒っぽい彼のキスに、余裕がなくなりかけていることが判ったからだ。

その瞬間が、成美が一番好きだった。彼の氷が溶けて熱に変わる刹那の変化を感じる時。それが——たとえようもないほど好きだった。

ほとんど力をなくした成美の上に、氷室はかぶさるようにして情熱的なキスを続ける。

いつの間にか背中の中のファスナーが音もなく下げられ、ワンピースが肩から巧みに下ろされている。

「……や……」

冷たい鏡に、素肌になった肩があたる。彼の長い指が背中をたどり、キャミソールを引き上げる。

氷室の目論見がわかり、ようやく成美は恐ろしくなった。まさかと思うけど、こんな鏡の前で――

「い、いやっ、氷室さん。ここじゃ、いや……」

「そんな誘うようなことを言うから」

ますます拘束する力を強くしながら、氷室は目に薄い笑いを

滲ませた。

「僕が止まらなくなるんですよ。ほら、君が可愛くあえぐ様を、自分の目でみてごらん」

「んんっ、い、いやっ、……だめ……」

「どうして？ もうこんなになっているのに」

ああ、もうこうなったら確かに彼を止められない——

結局、簡単に罠に落ちた自分を激しく悔やみながら、成美は観念して目を閉じた。

——しあわせ。

今の状態をそう言わずして、一体何を言っただろう。

その夜——疲れ果ててぐっすり眠ったはずだったのに、何故か夜中、ふと目を覚ました成美は、隣で眠る人の気配を伺ってから、そつと身を起こしていた。

深く愛された余韻が、身体の隅々にまで残っている。指にも、髪にも、脛にも……。

思い出すだけで胸がほのかに熱くなる。

悪夢のキーホルダー事件（キーホルダーと紀里谷理人が引き起こした揉め事に直接の関係はないが）以来、氷室は文句のつけようもないほど完璧な恋人になった。

それ以前は、格差恋愛を意識しすぎて自分の思いの半分も伝えられなかった成美だが、今は違う。言いたいことは言うようにしているし、氷室も昔と違い、それを頭ごなしに否定することとはなくなつた。

平日は1日だけ夕食を一緒に食べて、週末は彼の部屋に泊まりに行く。たまに成美から電話することがあるし、氷室からかけてくることもある。

そんな安定した日々が、最近はずっと続いていたのだ。

（年末なのですが、少しの間東京に戻ることにしました）

だからそう言われた時——それは今日の夕方、彼の車でホテ



ルに向かっている時だったのだが、その時も、成美はそれをさほどのこととは思わずにこう訊いた。

「いつ、戻って来られるんですか。私は29日から三ヶ日くらいにかけて実家に泊まろう思ってるんですけど」

「用事が済み次第、ということになりますか」

前を見たまま、言葉を選ぶように氷室は言った。

「もしかすると仕事始めまで戻って来られないかもしれませんが、それから言い難いのですが、休みの間は僕を1人にしてもらいたいです」

久しぶりに、胸の奥がざわつとした。

「……どういう意味ですか」

「深い意味はありません。ただ、……その方がいいような気がするので」

ああ、そうか。と歯切れの悪い氷室の口調から、成美はようやく彼の言いたいことを理解した。

彼はおそらく、亡くなった妻に関わることで東京に帰るのだ。確かにそこに、成美はあらゆる意味で出て行かない方がいい。彼の気持ちも——それがどういう気持ちかは想像するしかないのだが、多少の心苦しきさのようなものがあるのだろうか。

「分かりました。了解です。じゃ、電話もしませんけど」

「いいです。こちらに戻ったら、僕の方から連絡しますよ」

氷室の聲がほつとしていたから、成美はこれ以上、この話は蒸し返すまいと決めた。彼にしても、それなりに成美に気がつかつてくれたのだろう。それがよく判つたからだ。でも……。

ベッドルームから外に出た成美は、リビングの窓際に立って、音をたてないように気をつけながらカーテンを開けた。

真つ暗な空に雪の粉が舞っている。この分では、明日は少し積もるだろう。

成美は微かなため息をついた。

——亡くなられた人に嫉妬するのもおかしいけど、これじゃ

私、現地妻みたいなものだよね。

氷室が東京に帰ってしまえば、そこから先のことは成美には全く解らない。彼がどこに寝泊まりして、誰と会って、どんな休暇を過ごすのか、何も……。

氷室は知らなくていいと言った。でもやっぱり、私はそれは違うと思う。

好きな人のことは何もかも知りたいし、知るべきだと思う。

それは好奇心とかおせっかいかとは全く違う。彼の背負っているものを、私にも分けて欲しいからだ。これから先何年も、彼とは一緒に生きていきたいから。

人を好きになるというのは、そういうことだ。自分の人生の中に、他人の人生を受け入れるということ。ただ――

あるいは氷室にはそういうつもりはないのかもしれない、正直、それは感じている。彼に結婚願望がないのは何も言われなくても解っているし――ああ、だめ、その先を考えたら暗くなるばかりだ。

今も、成美は知っている。

深く眠っている風に見える氷室が、その実目を覚まして、1人で夜を見つめていることを。

ここにはいない、別の誰かに思いを馳せていることを。

今夜だけではない、もう諦めに近い気持ちで見過ごしているが、彼の夜は、いつも成美以外の誰かに奪われているのだ。

そして成美はもうひとつ知っている。その誰かに成美は、どうしたって勝つことなどできないと。勝負することすらできない。相手はすでに亡くなっているのだから。

「……………」

どれだけ深く身体で愛しあっても、心は別のものを見つめている。

それが氷室の求める幸福なのだろうか、本当に。

(でも僕も、君を知らない)

（君の過去、君がかつて好きだった人。僕は何一つ知らないし、知りたいとも思わない）

——私の、過去か。

大学生の頃、初めてできた恋人のことを話すのはあまりにも馬鹿げている。

どこにでもあるつまらないラブストーリー。間違いなく氷室が不愉快になる以外に、なんの反応も期待できない。また成美も、氷室の女性遍歴をいちいち全部聞きたいとは思わない。紫式部を目指しているのならともかく。

そう、本当に聞きたいのは、今も彼の心に棲んでいる過去だ。

彼の人格に、今もなお影をさし続けている過去だ。ただし、そういう過去を自分ひとりの胸に隠している点では、確かに成美も氷室を一方的に責められない。

——言っちゃっていいかなあ。私が養女だつて話。

でもなんか、どう話しても重くなりそう。それで同情買つてるとか思われるのもいやだし。

だいたい、実の両親のことを、成美は殆んど覚えていないのだ。

ただ、雪が降っていて——そして、優しい目をした駅員さんが。



「……………」

成美は憂鬱な息を吐いた。

理由は解らないが、何故だか雪の日のその場面が、成美に生き別れになった母親の記憶を連想させる。父親はそこにでてこない。多分、父という人の存在をそもそも知らないから、思い出しようもないのだろう。

逆に、母親という人のことをふと思うと、雪の日の場面に記憶がいきつく。そのことに気づいたのは、つい最近だ。もしかすると——あの日成美は、駅で、母親を待っていたのかもしれない。

待っていた理由は——判らない。

そして、会えたという記憶もない。

その前後の事情や顛末は、見事なほど成美の記憶から抜け落ちて  
ちている。少し、恐ろしくなるほどに。

そもそも初恋の人のことを思い出したのもごく最近のことで、  
いつてみれば、氷室とつきあいはじめたのがきっかけなのだ。

（大事にしなさい。それは、人の心を幸福にする手だから）

その言葉だけは宝物のように憶えていたけれど、そう言っ  
てくれた人のことは、いつしか記憶から剥離し、おぼろに消えか  
けていた。

それを、今年になって急に思い出したのは——氷室の手がい  
つも冷たくて——私の手を温かいと言ってくれたから……。

初恋の人が、吹雪の夜を思い出させ、そして母親の記憶に繋  
がっていく。

なんだかそれがひどく不安で、故意に考えないようにしてき  
たけれど。

「……………」

会いに、いつてみようかな。

いきなり頭で何かはじけたように、成美はそう思っていた。

あの時の駅員さんに。

記憶はないけど、手がかりはあるはずだ。

氷室さんがこの年末年始を過去の世界で過ごす気なら、私も自分の過去に行ってもいいのかもしれない。

そうだ。他人の過去を詮索するより、まずは自分だ。

自分のことを、きちんと氷室さんに話せるよう、曖昧だった過去の記憶を、この際思い出してみるのもいいかもしれない。

あの、雪が降っていた日のことを。

私の心に、小さな灯火をくれた人と出会った日のことを――

知ってる？ ずっと地獄の中にいるとね、そこが地獄だつてことが、判らなくなるのよ。

氷室は薄く目を開けた。

耳障りな電子音がして、胸の内側で携帯が小さく震えている。最悪だ。いつの間にかうたた寝していたらしい。

上りの新幹線、目的の駅まであと一駅。全車両満席で、いつもは静まり返ったグリーン車も、今日はどこか雑然としてみえ

る。

氷室は眉をしかめ、眼鏡の下から指を入れて、眉間のあたりを軽く揉んだ。

寝不足だ、解っている。それはすでに慢性的なものだが、いつも平気でいられるわけじゃない。時折——そう、今みたいに気が緩んでいる時に、眠りはいきなりやってきて、容赦なく意識を飲み込んでいく。どれだけ嫌だと抗ってみても。

時々思う。何故人は睡眠を取らなければ生きていけないのか。何もかもコントロールできるはずの自身の生の中で、唯一自由にならない領域。それが人生の3分の1以上の時間を占めて

いる。他人には、それが恐ろしく思えないのだろうか。

少なくとも、氷室の一番身近にいる人は、少しも恐ろしくはないようだった。

（至福、ですね。夜おふとんに入つて目を瞑る瞬間、天国です。しかも隣に氷室さんがいてくれたら、すつごく安心できるし、すごく安らいだ気持ちになつちやいます）

「……………」

（そういうのって、私だけですか？ 氷室さんはそうじゃないんですか？）

氷室は嘆息して、視線を窓の外に向けた。

自分にも、かつてそんな風に思っていた時期があったのだろうか。

好きな人と眠りに落ちる時を至福と感じ、安らぎを覚えていた時期があったのだろうか。

少なくとも今の氷室にとっては、眠りは安らぎの時間ではない。

7年前、——いや、もつと以前から、眠りは恐怖であり、生きる不安そのものだ。

「すみません、ちよつと」

不意に隣席のサラリーマン風の男が、そう氷室に断つてから



立ち上がった。

どうやらラックに乗せていたスーツケースを下ろすらしい。少し窓側に脚を寄せて、スペースを作つてやる。

見渡せばグリーン車には珍しく、家族連れがちらほらと見える。ラックはスーツケースや土産物袋ですし詰め状態だ。

そうか、今年も残すところあと4日。役所は明日が仕事納めだが、世間はとつくに連休入りしている……。

氷室はふと気づいて携帯電話をポケットから取り出した。うたた寝している時に確かに震えた。案の定着信が一件入っている。

登録外の番号だが、その数列には覚えがあつた。国土交通省のかつての上司。職場にも一度電話がかかつてきたが、またかけ直しますと言つて、そのままにしていた。

用件は、承知している。

それは年明けにも世間を騒がせ、氷室も無関係ではいられなくなるだろう。

生憎、探られて痛い腹は持ちあわせていないが、——まあ、過去が蒸し返される程度の、火傷は追うことになるのかもしれない。

「……………」

氷室は携帯を閉じ、それをポケットにすべらせてから、東京の街並みに視線を向けた。

この長い休みを、東京で過ごすとした決めた時から、あらためて思い知らされたことがある。

——日高さん。

僕は、君のいうところの幸福をまるで幸福と感じられない愚かな男で、今も子どもみたいに畏れているんです。

君が、これ以上深く僕の中に入ってくることに。

君が、僕という男の本当の姿に、気がついてしまうことに。

（——天……）

不意に、夢で聞いた声がして、氷室は微かに眉を寄せた。

（約束してくれる？ 天の時間は、生きている限り、全部私のものだつて）

（天……私を見て。いいえ、私以外の誰も見ないで）

氷室は急いで首を振ると、忌まわしい幻聴を頭から追い払った。

人の一番美しい感情を支配し、そして弄ぶことに、一欠片のためらいもない女。

どこまでも躊躇なく——ただ、欺くためだけに、心の深淵にまで入り込んでくる女。

これほど逃げたいと思っっている。

これほど忘れたいと思っっている。

なのに、これから俺は彼女と暮らしたあの屋敷に戻るのだ。

いい思い出など何一つない廃墟のような死者の館に。

認めたくないが、解っっている。

俺の魂の一部は、今でも君のところに戻りたがっっているのだ

水南。

「年内はお世話になりました。よいお年を」

「よいお年を」

あと15分で定時退庁時刻になる。

今年も残すところあと3日。今日は今年最後の仕事の日だ。

2時間も前に最後の案件を終わらせた成美は、残り時間を机の整理と掃除をして過ごした。

机もロッカーもパソコンも拭いて、後は定時のチャイムを待つだけになっている。

灰谷市役所総務局行政管理課法規係。

係長で課長補佐でもある柏原明凜（かしわばらあかり）の元には、午後3時すぎあたりから、頻繁に挨拶客が訪れるようになっていた。

やってくるのは各局の係長クラスから課長補佐クラスの職員たちだが、いかにも儀礼的な挨拶だけをしていく者もいれば、長く話し込んでいく者もいる。

気の毒に、普段から仕事がたてこんでいる柏原補佐だが、先ほどから立ったり座ったりの繰り返しで、今日は残業必至だろう。最も本人は諦めているのか、普段通り、冷静そのものの対

応をしているようだが。

「補佐は霞ヶ関の人だけど、そーいや実家がこつちなんだよな」  
補佐席の方をちらつと見ながら、成美の隣席の篠田（しのだ）  
が言った。あだ名はガチャピン。寝ぼけた目元がよく似ている  
からだ。

ようやく仕事が片付いたらしいガチャピンは、今給湯室から  
掃除用の雑巾を取ってきたばかりのようだった。

「他の霞ヶ関組は、早々に休みをとって帰省しちやつたもんね。  
うちの補佐くらいじゃない？ 仕事納めギリギリまで仕事して、  
なおかつ残業なんてしてんのは」



「ま、独身だし、彼氏もないみたいだし」

「デート騒動も、謎の怪我と共に終結したし」

と、そこでいきなり大地（おおち）と織田（おだ）が口を挟んできた。

ガンダムオタクの2人は、それぞれの頭文字をとってダブルオーと呼ばれている。これは、2人が自ら呼称している呼び名である。

仕事が早い2人は、午前にはさつさと案件を済ませ、昼からは「判例ジャーナル」などを流し見しているようだった。身の回りを掃除する気は、そもそも2人にはないらしい。

「てか、あれさあ。今にして思えば明らかにDVじゃね？」

大地が声をひそめて囁いた。

「デートするのしないのの騒ぎの直後に頬を腫らせて出勤とか。どんな噂をたてられても顔色一つ変えない補佐もすごすぎだけど、ほつといていいことだったのかよ」

成美は自分の顔色が変わるのを感じた。当の柏原補佐は、今、局長室に呼ばれて席を空けている。

「まあ、補佐を殴る男も大したタマだよ」

「賢い女ほど、馬鹿な男にひっかかるとは言うけれど……」

「多分だけど、男はその倍怪我してんじやねえのかな」

ひそひそ話していた男3人の目が、不意に成美に向けられた。成美はドキツとして後ずさる。

「日高、お前なんか聞いてないの」

いや、……聞いているというか、いないというか。

怪我の一件についての詳細はむろん知らないが、そうなったいきさつだけは漠然と知っているとでもいいますか……。

後ずさる背が、どん、と何かに触れて止まった。

成美が振り返るより早く、成美の前に立つ男3人の顔色がさつと変わる。

嫌な予感を覚えて振り返った成美は、そこでひつと息を引い

ていた。

恐ろしく不機嫌そうな雪村（ゆきむら）主査が、成美のすぐ背後に立っていたからだ。

「さっ、仕事仕事」

「日高、私語ならチャイムが鳴ってからにしてくれよな」

「僕も掃除を終わらせなきゃ……」

同僚3人にあっさり裏切られた成美は、あわあわと手を振った。違います違います。私は何も話してませんって。

一拍、空虚な沈黙があつた後、不意に雪村はにこりと笑った。彼の愛称にふさわしい白雪姫のような可憐な微笑み。外見だ

けを見れば水もしたたるほどの美男子——もとい美少年。しかしその心臓部では、どす黒い毒リングゴがふすふす音を立てているのだ……。

「日高、ちよつと」

ちよいちよい、と指で成美を招いた雪村は、さつと背を向けて執務室の外に向かって歩き始めた。

ひえー……、だから違うって言ってるのに。

いい加減判ってくださいよ。雪村さん。

今、法規係で噂になってるのは、補佐じゃなくてむしろ私たちの方なんです。雪村さんが不用意に給湯室で抱きついてきた

りするから。

「やっぱりあの2人……」

「これからは、日高に対する態度を変えなきやまずいかもな」

「バックに雪村さんをつけるなんて、日高さんも策士だね」

背後に好奇に満ちた視線を感じつつ、成美は渋々執務室を出た。

この噂が、いまだ法規係内でとどまっているのは最早奇跡といつてもいい。

それは多分、いや間違いなく相手が雪村主査だからである。

うかつな噂の発信源になればどうなるか——頭のいい篠田、

大地、織田の3人には、よく解っているに違いない。

成美にしても、よーくわかつている。

この噂が氷室の耳にでも届けばどうなるか。

もう、想像するだけで足がすくみそうな気分になる。

が、雪村についてエレベーターホールに出た成美はふと気づいた。

そうだ、氷室さんなら昨日の新幹線で東京に戻ってしまった。

もうこの庁舎で——いや、灰谷市で、どこを探しても氷室は  
いないのだ……。

よそう。この休みの間、私は氷室さんのことは考えないと決めた。彼もまた、私のことは考えないと決めているはずだから。

こみあげた寂しさと心細さを、成美は首を横に振って押しやめた。それに今は、氷室の次に面倒な相手が目の前に立っている。

「おい、解ってると思うけど、補佐の一件で余計なことは口にするなよ」



面倒な男パート1（一応彼氏なので、氷室はそこに含めない）。  
雪村の用件は案の定だった。

ややむつとした顔で——それでも傍目には少女のように美しい面差しに見えるのだが——雪村は続けた。

「補佐の怪我はあの男とは関係ないし、もうあの件は、何もかも終わったんだ。俺たちの取り越し苦労。徒労だよ」

「まあ、それは何回も聞きましたけど」

少し、ふてくされて成美は言った。

補佐の怪我は、あの日デートした男——大明グループの御曹司、大明拓哉（だいまようたくや）の私的な喧嘩に巻き込まれ

たからで、2人の間には何もなかった。そういう説明なのである。

一応は納得したものの、それでも雪村の態度に、成美は一抹の不満を覚えずにはいられなかった。

実際補佐は無事だったし、大明ともさっぱり手が切れたようだ。しかしあの怪我は——やはり、大明に何かされたのではないだろうか。

多分、雪村だけは、補佐からそのあたりの事情を聞いたに違いない。その上で、あえて上辺だけの当たり障りのない説明を成美にすることに決めたのだ。

「いちいち心配してくれなくても、誰にも言っていないですよ。

補佐を心配してるのは、何も雪村主査だけじゃないんですから」  
唇を尖らせて成美は言った。

まあ、氷室さんにだけはちらつと打ち明けてしまったけど。

その氷室も「まあ、大丈夫なんじゃないんですか」と涼しげに笑うだけだった。正直言えば彼もまた、成美に何かを隠しているような気がしてならない。

その時、定時を告げるチャイムがなった。今年最後の定時を告げる音色が、どこか間の抜けた調子で2人の頭上に鳴り響く。

入庁した時から思っていたことだが、これってどういう意図

で作られた音だろう。学校のチャイムの方がまだマシに思えるほどの不協和音……。

「いつも思っていましたけど、変わったメロディですよね」

「は？ お前知らないの？ このチャイムは市歌を元に作られてんだよ。もつとも音源が古いからちよつと音の調子が狂って……」

そこまで言いかけた雪村が、不意に愕然と表情を強ばらせた。

「しまった！ またひとつ夢が壊れた！」

「はい？」

「俺はこの——仕事納めの今日という日に、あの人と2人で定

時を告げるチャイムを聞くのが夢だったんだ。今年も1年ご苦労様。補佐もお疲れ様でした。目と目をあわせるだけで、そんな2人の心の会話が聞こえてくるようじゃないか」

「……………」

顔に似合わず——もとい気性に似合わず、この乙女な性格はどうなんだろう。

この間もうっかり聞こえた着信メロディは、『365日のラブストーリー』だった。本当についていき難い。

しかも、すっかり気を許されたせいだろうが、それを私の前でダダ漏れにしなくても。

「じゃ、私はこれで」

が、背を向けかけた時、その雪村が背後から成美を呼び止めた。

「お前、休みはどうすんの」

「え、休みですか」

なんの話？ 足をとめた成美は戸惑って瞬きをする。

「いや、用事でもあるのかと思って」

そりや、あるでしょう普通。用事くらい。

「明日は1日掃除して……29日に実家に帰りはしますけど、仕事ですか」

「ああ、そういや日高、ひとり暮らしだったもんな」

少し視線を下げて耳の上あたりを搔いた雪村は、「4日、空いてる」といきなり言った。

「はい、4日?」

「いや、コンサートのチケットがあるんだけど」

「なんのですか」

「ウイーン・フィルハーモニー。こないだチラシが回ってたろ」

「はあ……」

しばらく考えた成美は、ん? と、眉を寄せて顔をあげた。

「えっ、それもしかしてデートの」

「しっ」

目に激怒の色を走らせ、雪村は自分の口に指をあてた。

「誤解されるようなこと言うな。余ったんだ。でなきや誰がお前みたいなの鳥頭を人間向けのコンサートに誘うか」

なにそれ、と思ったが、今は別のワードが頭にひっかかっている。

「……余った？」

「2枚買ったけど、まあ——そういうことだ」

怒ったようにそう言ったきり、雪村はふいつと視線を逸らした。



「……………」

同じようにしばらく黙った成美は、今度は眉をあげていた。

「もしかして、補佐にふられたんですか！」

「う、うるさいな。てか、いちいち考えこんでから気づくな。

——で、行くのか、それとも行かないのか」

いやあ、それって…………。

つまりは補佐の代役ですか。

なんか、断るのも身の程知らずのような気がするんですけど。

「その…………すみません」

実家でちよつと、しないといけないことが。

それ以前に、私の背後には、人間離れした恐ろしい能力の持ち主がいるんですよ。

「……デビルマンが」

「はい？」

少なくとも氷室さんの許可は必須だし、で、絶対うんというはずがないし。

いずれにしても、断ろうとした時だった。西、東の両フロアから、ぞろぞろと人が溢れでてきた。

東に総務課の可南子（かなこ）。西に沢村烈士（さわむられつし）の姿を見た成美は大慌てで雪村に背を向けていた。

慌てたのは雪村も同じで、もはや急ぎ足で執務室に戻ろうと  
している。

「じゃ、また連絡するから」

「は、はい」

えっ、あ、いや。私はそれ、断るつもりで。

しかし振り返った時には、雪村の綺麗な背中はずでに観音扉  
の内側に消えている。

まあ、いいか。連絡もらった時に断れば。

「よう、おつかれ」

雪村に続いて執務室に戻ろうとした成美の背に、今度は沢村

のハスキーな声がかげられた。

うわ。また面倒な人に見つかった。

そうは思ったものの、一応立場でいえば先輩である。成美は引きつった笑顔を浮かべて振り返った。

面倒な男ナンバー2。道路管理課の沢村烈士。

鋭く研ぎ澄まされた野性的な顔立ちに、180センチ近い背丈。

瘦身の氷室と違って、スーツの上からでも厚みを帯びた肉体が透けて見えるようだ。一言で言えば、雰囲気だけでとんでもなく怖い男。

「お、お疲れ様です。もう帰りですか」

殆んど逃げ足でおざなりに挨拶した成美の行く手を、沢村は何気ない素振りで遮った。

「飲み。今から管理の連中と飲みに行こうって話になってんだけど、日高さんも」

「いきません」

「……即答だね」

やや呆れた目になった沢村は、すぐにその目に意地悪い光をにじませた。

「いいじゃん。冷血監視ロボみたいな彼氏、どうせ東京に帰っ

たんだろ。今の間に遊んじやえよ」

「いやですよ。冗談じゃない。それに監視の目なら、いくらでも光ってるじゃないですか」

「なんで？ 俺は日高さんの味方だよ。絶対に言ったりしない  
って」

一番危険で信用ならない人が何言ってるんだらう。

「すみません。まだ仕事残してるんで」

「なあ、来いよ。男ばつかの飲みでウンザリしてたんだ。金欠  
なら俺が奢ってやるからさ」

何、コンサートといい、飲みといい、もしかして私、モテ期

ですか。

しかし、沢村にしろ雪村にしろ、本命は間違いなく柏原補佐なのだ。言つては悪いがどちらの誘いも迷惑だとしか言いようがない。

「ちよつとどいてくださいよ。また誤解されるじゃないですか」

「日高さんからかうのも、これが今年最後だと思つたら、さ」

そんなことを言いながら、明らかに面白半分に成美の行く手を塞いでいた男が、不意にその顔に狼狽を浮かべて後ずさつた。

「——つ、じゃ、そういうことで。よいお年を」

——え？

強張ったままの顔を伏せ、まるで別人のようにこそこそ去っていく沢村烈士。

役所でも強面でおっているこの男に、そんな態度を取らせる人間は、成美が知る限り2人しかない。

その内1人は、すでに東京の空の下だから、残るは――

「日高さん、早く戻って」

予想通り、成美の背後には柏原補佐がやや険しい目をして立っていた。

「今日は定時を過ぎたら、課長の挨拶があると伝えていなかった？」



しまった。そうだった。

「すつ、すみませんっ」

行政管理課長の尾崎は、一見蝸牛みたいに愚鈍そうな男だが、その実けっこう気短で、怒りっぱいところがある。成美も身を持って知っているが、怒らせると面倒な性格をしているのだ。

「伝達事項は忘れないように。課長には私の用事で外に出たと伝えてあるので」

「……すみません」

ひたすら萎れて謝りながら、成美は先程の、ちよつと情けない沢村の態度のことを思い出していた。

何も好きな人の前で、毛虫か幽霊でも見たような反応をみせなくてもいいのに。

昔はもうちよつと不遜な態度だったような気がするのに、一体どういう変化だろう。

最近の沢村は、どうも柏原補佐を避けているようだ。

前みたいにちよいちよい法規係に顔を出すこともなくなつたし、廊下ですれちがっても、気づかないふりで通りすぎる。

もちろん柏原は意にも介さず平然としている。いや、もしかすると沢村の変化にさえ気づいていないのかもしれない。

——私の、思い過ごしだったかな。

補佐はなんとなく——沢村さんを意識してたような気がしたんだけど。

雪村さんには本当に気の毒だけど、2人の間に、少しだけ特別な空気を感じたんだけど……。

4

「天さん、お夕食は何時頃にいたしましょうか」

本を書棚に戻した氷室は、眼鏡に指を添えて声の方を振り返った。

「いえ——食事なら外に食べに出ます。あと少しでこの棚を見終わるので、志都（しづ）さん、お疲れだったら先にお帰りになつてください」

冬の書庫は、底冷えといつていいほどに冷えていた。

室内の半分を吹き抜け屋根で覆われた、百畳はあろうかというほどのただ広い洋室。その西側の壁は、床から天上まで黒檀の書棚で覆い尽くされている。

室内の中央にも同じ書棚が幾筋も設置されており、そこには数万を超える書籍が収められていた。

本は、全てがハードカバーで、一見新品のようにも見えるが、

少なくとも1人の人間が確実に読破している。和書が大半だが洋書もかなりの比率でまじっており、ジャンルは、文芸、哲学、美術、医学、法律、古典――

ぞつとする。

これだけの本を、氷室よりわずかに年上の女が、全て読みきったのだと思うと。

ぞつとするのは本の数だけではない。壁にかけられた絵もそうだ。

書棚を囲む壁の空いたスペースには、西洋絵画のレプリカが所狭しと飾られている。どれも暗い、陰鬱な色彩で、死と残虐

性に満ちたものばかりだ。

ヴェチエツリオの『皮をはがれるマルシユアス』、パルミジヤニーノの『ルクレツィア』、カラヴァッジョの『ホロフェルネスの首を斬るユデイト』……。

中でも氷室が最も苦手なのが、入り口にはいつてすぐの場所にある『我が子を喰らうサトウルヌス』である。

フランシスコ・デ・ゴヤがその晩年に描いたといわれる『黒い絵』の一枚。狂気の極みの形相をした白髪の巨人が文字通りわが子を頭から食いちぎっている絵だ。

（天、知ってる？ 修復される前のサトウルヌスには、勃起し

た性器が描かれていたそうよ。それは一体何を意味していたのかしら」

この夏に死んだ氷室の元妻——後藤水南（ごとうみな）。

この部屋は彼女の頭脳であり、同時に人生の軌跡でもある。

部屋を飾る絵の数々は決して彼女一人の趣味ではない。いつてみれば、過去から累々と続くこの家の歴史である。彼女たちがあえて残酷な絵を蒐集したのには理由があるのだ。それは——

「いいえ、夕食は絶対にこのお屋敷でとつていただきます」

向井志都の淡々として厳しい声が、氷室を現実に引き戻した。

「もう用意しているものを、いまさら無駄にされては迷惑です。こちらにお運びいたしますのでおっしゃってください。何時に食事をなさいますか？」

氷室は微かに嘆息した。

昨日もそうだったが、食事までこんな場所ですとつたら息が詰まりそうだ。

「外に出ますよ」

「いいえ。ぜひともご用意したものをお召し上がりになつてください」

「お願いだから、僕に気を使わないでください。僕は何も、客



としてこの屋敷に戻ってきたわけじゃないんですから」

「私はそのつもりで準備しておりました」

「……………」

——無駄だな。何をいったところで。

氷室は反論をあきらめ、視線を再び書棚に戻した。

この人と俺の間に、まともな会話は成り立たない。

そう、昔からそれはひとつも変わらない。

あれから20年たった今でも、氷室と対峙する時の、彼女の嫌悪と蔑みを含んだ眼差しは変わらない。いや、それは年をおうごとに、ますます強くなるばかりだ。

「もう一度お聞きしても？」

抑揚の欠けた声で志都は続けた。

「お食事はいつになさるのですか。天さん」

「――後でいいですよ。今はきりが悪いので」

氷室は少し投げやりに言った。

「なにしろ、この膨大な書籍の中から、タイトルも作者名もわからない本を探すんですからね。いつ終わるとも知れません。

どうか僕につきあおうなどと思わずに、志都さんにご自宅にお帰りください」

「お嬢様の、本を探していただきたいのです」

そんな電話が、向井志都から灰谷市の氷室のところにかかってきたのが、今から2週間も前のことだった。

「本？ というと？」

その夜、氷室は酒席からの帰宅の途中で、繁華街前の道路でタクシーに乗り込む寸前だった。

携帯を持ち直した氷室の前を、次の客が迷惑げにすり抜けていく。

氷室は仕方なく携帯を耳にあてて移動した。

「ですからお嬢様の本です。天さんもご承知のとおり本は沢山ございますが、その中から1冊、今からあたくしがいう本を探していただきたいのです」

——は？

なんの話かよくわからないが、本というからには、屋敷の東側にある水南の書庫の蔵書を指すに違いない。

お嬢様——水南の所有していた本は、1冊残らずその部屋に納められているからだ。

「ちよつと待って下さい」

さらに向井志都が続けて説明しようとしたので、氷室は急いでそれを遮った。

「僕に、彼女の書庫は——わかりませんよ。むしろ、志都さんの方が詳しいでしょう。なんの本だかわかりませんが、ご自分でお探しになった方が早いのではないですか」

主を失った水南の書庫は、向井志都が毎日掃除をし、冊数などの欠落がないかも含め、恐ろしく厳しく管理している。あの書庫は、今も昔も向井志都——水南の忠実な下僕だった女の聖域なのだ。

しかし、構わずに志都は続けた。

「青い表紙の本、ということでございます。硬いカバーで、厚さは2センチもないくらいでしょうか。大きさは不明です」  
溜息をついて、氷室は訊いた。

「タイトルは」

「わかりません」

「作者は誰だかわかりますか」

「わかりません」

——…？

わけがわからない。

氷室は本気で訝しく思っ眉をひそめた。

「すみません、あなたが判らない以上に、僕も意味がわからない。タイトルも著者名も解らない本をやみくもに探せと言われ  
ても……」

「ですからその本には、タイトルも作者名もないのです」

「……………」

「そういう本を探してほしい、ということなのです」

嫌な既視感がふと胸をかすめたが、氷室はその考えを急いでよそに追いやった。まさかな。——水南はもう、死んだのだ。

「わからないですね」

落ち着いて、氷室は言った。

「そもそも志都さんの話には前提が抜けている。最初から順を追って説明していただけですか。いったいなんのために、僕がそんな本を探す必要があるんです」

「存じません。ただ私は、そう言い遣っただけでございますから」

「誰に」

「お嬢様に」

その途端、背後の喧騒がやみ、氷室の時間が凍りついたように停まった。

水南に――



水南に、だど？

「……その、タイトルも作者も解らない本を、僕に探せと？」

「はい」

淡々と志都は答える。

「天さんなら、知っているからと」

「僕が」

「はい。たしかにそう、お嬢様はおっしやられました」

既視感が現実にとつてかわる。

いやまで、水南はもう死んだのだ。この世のどこを探しても  
いない。

眉を寄せ、氷室はひとつ息をした。

「確認しますが、それはいつの話なんです」

「お嬢様がお亡くなりになる、1日ほど前のことでございます」

1日前。

1日前か……。

「それは、志都さんもご存知ない本なんです」

次にそういった時、すでに氷室は冷静さを取り戻していた。

「残念なことに、僕に思い当たる節はひとつもありません。ご承知のとおり、書庫の本なら志都さん同様、僕も大抵を記憶している。——もしかするとそれは、僕や志都さんの知らないと

ころにある本なのかもしれませんよ」

暗に、ある可能性をほのめかしたつもりだったが、志都は即座に言い切った。

「いえ、本は間違いなく、お屋敷の書庫にあるものと存じます」

「どうしてそう言い切れるんです」

「どうして？　ではお嬢様は、何故天さんにそんな頼み事を残されたのでしょうか」

「……………」

「本はお嬢様の書庫にあるのです。ですから他の誰でもなく天さんに頼まれたのです。あたくしはそう思います」

答えず、氷室は心中苦く息を吐いた。

もうひとつ——いやふたつか、思いつく合理的な理由があるが、それをこの人に面と向かって言ってみるだけ無駄だろう。「とにかくお屋敷に戻ってくださいませ。そうしてお嬢様の書庫を見て下さいませ。一冊残らず、全て確認してくださいませ。他の場所にある可能性は、その後存分にお考えになつてくださいませ。よろしいでしょう」

待つてくれ。冗談じゃない。

「確かに見れば思い出すかもしれませんが。僕も、彼女の書庫のなにもかもを記憶しているわけではありませんから。でも、

おかしくはないですか？ 何故、今になってなんです」

「今になって、とは？」

空車のタクシーが近づいてくる。今はもう、一刻も早くこの電話を終わらせたかった。

「それが遺言だとしても、彼女が亡くなってもう半年です。ご承知のとおり、彼女の遺言をめぐっては、色々と問題が起きています。何故今頃になってそんなことを僕に伝えようとするんですか」

「それでしたら、理由がございます」

「ほう、ぜひお聞かせください」

それが嘘か嫌がらせ以外の理由であれば、ぜひ。

「雪です」

雪？

乗り込んだタクシーに行き先を告げようとした氷室は、その言葉に眉を寄せる。

「雪が降りはじめた時に天さんにお伝えするよう、そう申しつかったからです」

——雪……。

自分の視野が、一瞬幻のように吹雪に覆われたような気がした。

はつと我に返り、氷室はその幻影を振り払う。

東京には、12月の始めに珍しく早い初雪が降ったばかりである。

「もちろん私には、お嬢様の意図はわかりかねます。けれど天さんには、当然お分かりになったものと存じます。天さん、一刻も早くお戻りください。ただの頼み事ではございません。これはお嬢様の、れつきとした遺言なのです」

遺言なのです——

現実の光景が氷室の視界に戻ってくる。

気が遠くなりそうな量の本、死の誘惑に満ちた部屋。室内に響く秒針の音。

目の前の本1冊1冊を、それらが並べられたルール通り、一から辿って調べていく。

向井志都のオーダーどおりの作業に、氷室はこの2日——屋敷についてからというもの、ずっと1人で明け暮れていた。

何故こんな馬鹿げた真似をするはめに陥ったのか、正直、今



でもわからない。

何度断つてもかかってくる電話に、いい加減辟易したのもある。形だけでも本を探すふりをして納得させようと思ったものもある。——が、本当にそれだけだろうか。

氷室自身が、やがて耐え難い誘惑にとらわれはじめていたのではないだろうか。

もう一度、……この部屋に戻ってみたいと。

「……………」

眉を寄せた氷室は、苦く笑って息をついた。

だとしたら、なんとも愚かな選択をしたものだ。

だいたい前提からしてこの話はおかしいのだ。

死の1日前に、水南がまともな遺言を残せたはずがない。

向井志都の話をも全面的に信じるとしても、その時の水南が、まともな精神状態だったはずがないのだ。

通夜の末席で聞いた話では、がん細胞は脳に転移し、最後の1ヶ月はあらぬうわ言ばかりを口走っていたという。髪は抜け、別人のようにやせ細り、かつての彼女を知る者なら目をそむけずにはいられないほど凄惨な亡くなり方だったという。

もちろんモルヒネも投与されていただろう。とすれば、会話すらままならなかったはずなのだ。

つまり——妄言。

全ては水南の最期の妄想で、本など、はじめから存在しない。気づけば、お茶を載せたカートを押してきた向井志都が、氷室の足元に立っている。あたかも監視者のように、氷室の一挙手一投足にじっと目を凝らしている。

氷室はその視線をやりすぎしながら、もうひとつの可能性を冷ややかに考えた。

これは向井志都の嘘で、つまりは全くの作り話だということ。志都の動機はいくらでも思いつく。彼女が、いかに氷室を忌み、憎んでいるか。想像するまでもないからだ。

氷室は天井まで続く書棚を見上げた。

——が、一番の謎は、俺自身だ。

こんな仕打ちを受けると判っていて、何故、俺はこの部屋に戻ってきた？

ありもしない本を探すために——永遠に解決しない謎を解くために。

「——天さんッ」

不意に足元の志都が声を荒げた。人が変わったように荒々しい口調だった。

「本の位置は絶対に変えないでくださいませッ。そちらはもう

一冊左寄りですッ」

狂気さえ窺える、場違いに激しい口調。しかし、その意味を知っている氷室は、何も言わずに志都の指摘した場所に本を戻した。

「この部屋のものは、1ミリたりとも動かささないでくださいませ。土地も屋敷も、確かに何もかも天さんのものになりましたけど、この部屋の中だけは」

おそろしく早口で言った志都は、そこで言葉を切り、あたかも挑むように鋭く氷室を睨んだ。

「お嬢様そのものでございますから」

ふと指が止まったのは、背後に視線を感じたような気がしたからだ。

錯覚だ。また、いつもの。

氷室は自分に言い聞かせ、再び本の背表紙を目で追い始めた。あれから日付は二度変わり、時刻は今、深夜2時を大きく回っている。

さしもの向井志都も就寝したのか、すでに家中がひっそりと静まり返っている。12 LDKの豪邸の中で、明かりがついてい

るのは、間違いなくこの書庫だけだ。

ふと、自分がしていることが可笑しくなった。

書庫にこもって、これで4日目だ。

本など最初からないと解っているのに、一体何を探そうとしているのだろうか。

そう思いつつも、目だけは律儀に本の背表紙を追い続ける。

Different Seasons、Bag of Bones、Pet Sematary……。この列はまるまるステイブン・キングだ。恐怖、骨、墓、表題だけでもぞつとするラインナップ。

列から計算すると、水南が12歳あたりの本。その前が純文学

や哲学書ばかりだったから、この辺りから大衆作家を好んで読み始めたのだろう。

そう、この書棚の本の配列は、持ち主の年齢と呼応している。

その時々で購入した本が——それはとてつもないハイペースで買われているのだが、幼い頃のものから1冊残らず全て順番に納められているのだ。

今から20年以上も前、この屋敷で暮らすことになった氷室に最初にあたえられた仕事が、水南の書斎の管理だった。

だから大げさではなく、本の配置ならほぼ正確に記憶している。本だけではない。壁にかけられた絵の配置までも、狂いな



く記憶している。

それは向井志都も同様で、つまり今の作業に意味がないことを、おそらく2人とも同じ程度には知っているはずなのだ。

——なのに志都さんは、最初から書棚をみろといつて譲らなかつた。

肉体はひどく疲れているのに、頭だけが冴えている。氷室は眉をひそめてその意味を考えた。

何故だろう。もしこれが嫌がらせでないとするれば、『書棚』に何か意味があるのだろうか。

そしてもうひとつ、志都の態度以上に気になることがひとつ

ある。

絵の配置だ。

書棚を移動しているうちに気がついた。かつてあつたはずの絵の一枚が、壁に跡だけ残して失くなっている。

失くなっているのは、書庫の入り口側に並んだ西洋絵画のレブリカではない。残酷なレブリカたちの展示場の先、灰色一色の水彩画がずらりと飾られているスペースである。

ある意味、残酷な西洋画よりもなお恐ろしいその絵は、全て同じタッチ、同じアングルで、同じ静物を描いたものだ。

今、氷室がいる場所——後藤屋敷の鳥瞰図。それが、全部で21

枚並んでいたのだ。

脚立を降りた氷室は、ゆつくりとそれらの絵の方に歩いて行った。

21枚——いや、20枚だ。やはり、1枚欠けている。

何か意味があるのだとしても判らない。習作なのか、それとも意図して21枚が描かれたのか。それすら氷室は知らないからだ。

灰色の鳥瞰図。キャンパスの片隅に、世界から切り取られたようにひっそりと描かれた後藤屋敷——。

これもまた、ヒントなのか？

青い本、雪、一枚だけ抜けた絵画。

いや。

氷室は意識をそこに馳せるのをやめた。

ないというからには水南が持っていたのだろう。それだけのことだ。意味などない。

青い本など最初からないのだ。向井志都が嘘をついていなければ、それは死に際の人が見た妄想だ。

気持ちを切り替え、氷室は再び元の場所にもどると脚立に登った。

0歳児から始まる水南の記録を、今、氷室は12歳まで追いか

けている。これでまだ5分の1にも満たない。彼女の異常なまでの書痴ぶりが発揮されるのは、まだこれからなのだ――。

(……天)

まどろみに引きずり込むように、闇の中から声がいざなう。はつとして氷室は瞬きをした。

秒針の音が、無音だった世界に戻ってくる。

午前3時5分。脚立の天辺に座ったまま、一瞬だが確かに意識が途切れていた。

睡眠にいざなう甘い感覚。そこに水南の声が混じったことに、何故だか嫌な身震いがする。

目の前には、思春期を迎えた水南の歴史が並んでいた。

氷室は指を目頭にあて、本の確認作業を再開する。

ずっと中国の思想書ばかりが並ぶ書棚。似たようなタイトルラインと常用外漢字の羅列。水南が普通でないのは重々承知だが、10代前半の女の子が、こんなもの、何が楽しくて――

「……………えっ？」

そこでいきなり飛び込んできた文字に、氷室は面食らって瞬きした。

『愛について』

『愛の科学』

『愛のもたらす効用』

「……………」

そうか、水南は一時期恋愛に関する本を好んで読んでいた。

そういう面もあるのかと、当時から意外に感じたことを思い出す。

視線を巡らせれば、その棚はまるまる、愛だの恋だの似たようなタイトルが並んでいた。

『愛の謎』

『愛という悲劇』

『愛が終わる時』

——うそだろ。こんなにあつたのか。

もしかして、愛と名がつく本を片端から注文していたのではないだろうか。それくらい、頭文字に愛がついたタイトルが整然と並んでいる。

この当時、氷室は12歳。

そういった水南の側面を、どこかで嫌悪していたような記憶がある。俗っぽい、所詮女だ、と。

「……………」

が、30才を超えた今、むしろこのラインナップを微笑ましい



と思うのは何故だろう。

水南にも普通の少女らしい感情が、——書物相手にせよ、一時期にしろ、あったのだろうか。

次に引き出した本を見て、氷室はわずかに眉をあげた。

『Jenseits von Gut und Bose』

ドイツ語だ。

日本語で訳されたものなら氷室も目を通している。フリードリヒ・ニーチエの哲学書『善悪の彼岸』である。

まさかと思うが、これも水南の感覚でいえば「恋愛カテゴリー」なのか？

氷室は苦笑したまま、ページを無作為にめくった。読めないことはないが、さすがにここまで専念的な用語が並ぶと、辞書なしでは読みきれない。

しかし、こうして改めて亡き妻の軌跡を辿っていくと、今まで考えもしなかった彼女の側面がかいま見えてくる。

（ねえ、天。ネバーランドにどうして子どもしかいないか知っている？ ピーターパンが、大人になった子どもを殺しているからなのよ）

氷室が出会った最初から、水南は夢見がちなドラマの裏に潜む残酷な真実を知っていた。

いや、残酷な結末をむしろ好んで追い求めていた。

セックスも結婚も、愛という一時の情熱の果てにある結末さえも、彼女はすべて書籍の中から学んでいたのかもしれない。

だから自分に向けられた愛に、恐ろしいほど冷淡でいられたのか――

「……………」

氷室は微かに目をすがめ、入り込みかけた思考の闇を振り払った。

いや、――結局は全てが想像だ。

水南という女の真実など、俺には永久に解らない。

本を閉じようとして、ふと指がある違和感に気がついた。

その感覚のままに指で辿ったページを開いてみる。ページが一枚、破り取られている。

水南の本はどれも、折れ目一つつかないほど丁寧に読まれ、そしてほぼ新品さながらの美しさで保管されている。たかがページの欠損とはいえ、明らかにこれは異変だ。

——このページ……。

何があつた？

氷室は眉を寄せ、和訳本を読んだ時の記憶の断片をたぐりよせる。

145節……146節。

すぐに、ある有名すぎるセンテンスが浮かび出る。

が、それがなんの意味を持つのか判らず、氷室は破れたペー  
ジを記憶にとどめ、眉をひそめて本を閉じた。

ただ無為に指と目を動かしている間に、どれだけの時間が過  
ぎたのだろうか。

ふと、背筋にひやりとした感触を感じ、氷室は微かに肩を反  
応させた。

何か、背後に潜んでいる。

闇の裡から、無言で氷室を見つめている。

錯覚だ。もう何年も前から続く幻覚。

けれど、いつもはやり過ぎさせるこの感覚が、今は耐え難いほど生々しく感じられるのは何故だろう。

まるで深淵に棲む怪物が、淵から顔をのぞかせているかのよう  
うに。

「……………」

その怪物の正体を、氷室はもう何年も前から知っていた。

怪物は、夜、必ずある女の姿を借りて現れるのだ。

そうして氷室を、優しい声で誘惑する。

こめかみを指でおさえ、氷室は幻影を振り払おうと頭を振った。

(無駄よ……)

微かな、あるかなきかの息遣いがすぐ背後から聞こえてきた。

夜の深淵。秒針が刻む単調な繰り返し。

(無駄よ……、天、私はいつも、あなたの傍によりそっているのよ)

囁きにも似た吐息が、密やかに混じりはじめる。

闇の裡から、いつも聞こえてくる声。

(天……、ほら、逃げていないで私を見て?)

氷室は目を閉じて首を振った。幻聴だ。記憶の中から聞こえてくる声だ。

誰にも聞こえないのは判っている。しかし、俺にだけは確かに聞こえる。これは一種の幻聴なのか？ だとしたら、俺の神経はもう随分前からいかれている――

針の音が不意にやんだ。

時が静止したような沈黙。

(天……)

駄目だ。



振り返るな。

（天……私を見て）

そこにはいない。

（私を見て）

もう君は、そこにはいない。

（ずっとあなたを好きだったのよ。子どもの頃から、ずっと）  
もう君はどこにもいない。

（天——！）

衝かれたように、氷室は振り返っていた。

心臓が軋むように高鳴り、腹の底が冷えた。

肩に流れる漆黒の髪。青みを帯びた切れ長の瞳が、まるで断罪するもののように気高く、氷室を見下ろしている。

——水南……。

生きていたのか。

いきなり、電子音が凍りついた氷室の心を切り裂いた。

鼓動の音と一緒に、秒針の音が戻ってくる。

氷室はようやくやく——自分の背後にあったものが、この部屋を飾る水彩画のひとつだということに気がついた。

この部屋で唯一、明るい色彩で描かれた絵。

16歳の水南を描いた肖像画だ。

氷室は動転する気持ちを抑えるように、自身の口を手で押さえた。

衣服と肌の下で心臓が激しく鳴っている。

――天

春の木漏れ日のような優しい笑顔が、まるで昨日のことにように氷室の脳裏に蘇った。

――天、どこなのか？　ここにいますんでしよう？

封印してきた記憶の欠片が、一気に胸から溢れでる。

幾万にも色を変える神秘の眼差し、真理と愛と裏切りをつむぐ唇。

笑顔、泣き顔、甘えた顔。

白い肌と青と影を帯びた瞳、吐息、囁き、背後から抱きついてくるひんやりとした指の感触。

（ねえ、あなたは暇があればこの絵ばかりを観ているようだけど、本当の私とどちらが好き？）

（とぼけないで。教えて天。あなたの目に映る私は、本当にこの絵と同じなのかしら）

（天……今日はずっと一緒にいて……私を絶対に離さないで……）

「……………な」

乾いた唇から、ようやく干からびた声が出た。

ミナ。——水南、水南。

閉じ込め、鍵をかけ、二度と顧みないと思っていた感情が、  
激流のようにあふれだす。

君を愛していた。

君だけだった。

これほど人を好きになつたことはない。——これほど、自分  
が狂うかもしれないと思うほど、誰かを愛したことはない。

そして、これほど人を憎んだこともない。

いつそ、殺してやりたいと思うほど。

実際僕は君を殺し、君もまた僕を殺した。——水南、でも僕は、君ほど完璧に、見事に、相手の息の根を止めてはいない……。

「水南……」

低く呻いた氷室は、両手を髪にさしいれて頭を垂れた。狂おしい苦悩が蘇り、悲しみと絶望で胸がたちまち埋め尽くされる。

一生後悔するわ、天。

私じゃない。あなたがよ。誓ってもいいわ。あなたは今夜のことを生涯悔やむことになるのよ。

その通りだ、水南。

僕は生涯、君の幻から逃れられない。

僕の中の君が消えない限り——僕はこの場所から、どこにも行けやしないのだ。

そして君の影は僕がどこに逃げてもつきまとう。

どこで、違う人生を生きようとしても。

「わあ、雪……」

成美は低く呟き、冷えた窓ガラスに手をあてた。

たちまち自分の吐く息で、ガラスが白くけぶつていく。

列車と同じ速さで流れていく雪は、こうして見ると吹雪のようだ。

遠くの山が白く染まっている。目の前にある景色は、もう見慣れた灰谷市のものではない。

（泊まりにくるなら、暖かくしてきなさいよ。こっちは町とは違うんだから）

出がけに電話した義母の声が蘇り、成美は旅行バッグの中からシヨールを取り出して膝に広げた。

一応暖房は効いているようだが、車内は少しばかり冷えてい



る。やっぱりバスにすればよかったかな。成美はそう思いながら、シヨールを腰のあたりまでひっぱりあげた。

灰谷市で、掃除だの年賀状だの、なんだかんだと用事を済ませている内に、短い冬休みはあつという間に過ぎてしまった。

帰省の予定は1日遅れて、今日はもう30日である。

この急行列車が向かう先は、県北にある山間の田舎町だ。駅から降りてさらに北に車で10分いったところに、成美が育った実家がある。

帰省には大抵長距離バスを利用して来たから、電車に乗るのは——1人では、これが初めてかもしれない。

「4ヶ月ぶりかあ」

成美は呟き、再び視線を窓の外に向けた。

最後に帰ったのが盆だった。その時は泊まらずにすぐに灰谷市に帰ったから、泊まりがけで帰るとなると、1年ぶりの帰省になる。

——ずっと、帰れ帰れって言われてたのに……、悪かったな。少し所在ない気持ちで、成美は周辺を見回した。

最初、座る場所がないほど混み合っていた車内は、今は心細さを覚えるほどに閑散としている。

つい手前の大きな駅で、客の大半は下車してしまった。車内

と比例するように外の景色もますます寂しいものになっていく。ここから先、人口の極めて少ない過疎の町に入っていく。いつてみればそういうことだ。

——まあ、町名を言ったところで、誰も知らないくらいなの、ド田舎だもんね。

実家を聞かれて、その地名を答えると、大半の人が「それどこ」という顔になる。分かりやすく位置を説明すると、「そんな田舎？」と少し馬鹿にしたような口調になる。

つまるところ、誰もがちよつと驚く程度のド田舎なのだ。

最も成美がその町で暮らしたのは、4歳から7歳の、たった

4年足らずのことである。国家公務員だった父のおかげで転勤族だったからだ。

小、中、高と灰谷市で過ごした成美は、大学入学と同時に1人暮らしを始め、それからはずっと灰谷市内で生活している。

電車の速度が少し弱まり、景色が流れる速度が緩やかになる。

さびれた広告看板の群れを過ぎると、ペンキの剥げた駅名看板が見えてきた。

### 『安治谷』

もうこの辺になると、ホームに立つ駅員もない。

駅名も告げず、電車がホーム半ばで停車した。

数人の乗客がのろのろと下車していつて、車内には成美ひとりきりになった。

——安治谷駅……。

あじがや駅。

改めてみると変わった名前だと思う。考えたこともなかったが、このあたりの地名だろうか。

跨線橋の向こうに、明治建築風のモダンな駅舎が垣間見える。

この駅じゃないと成美は思った。記憶と外観がまるで違う。

雪の夜、成美が泊まった駅ではない。

なのに何故か、駅名だけが意識の底に引っかかる。

あじがや。

あじがや……。

空気を抜くような音をたてて扉が閉まり、再び列車が走り始めた。

——あじがや……あじがや……。

どうしてこのフレーズに妙に引つかかるのだろう。成美は眉根を寄せて首をかしげる。

——あじがや。

いきなり耳の裡で、囁くような笑い声が聞こえた。

ちがうだろ、なるみ。

あじやがじゃなくて、あじがや、つていうのよ。

——え……………？

胸の奥に痛みにも似た暖かな感情が広がり、瞬時に消えた。

憶えのない声と情景。成美は驚きながら自然に胸を押さえていた。いまのはまさか——ふうん、違う。そんなはずはない。

多分、何かの錯覚か記憶のすり替えに決まっている。だって憶えているはずがない。今まで、一度も思い出すことがなかったんだし——

「……………」

成美はゆっくりと息を吐き、胸からそつと手を離れた。

馬鹿みたい。何を動揺してんだろ、私。

今更感傷的になるほど子どもじゃない。養女だからといって、実はうちの子じゃなかったのよ、的なドラマがあつたわけでもない。

幼いながらも物心はあつたから、自分が養女だつたことは認識していたし、いじめられたとか寂しい思いをしたとか、そんな記憶も殆ど無い。

叔父夫婦はいい人で、実の子と遜色なく成美を育て、大学にまで行かせてくれた。

そういう意味では、普通の、ごく平凡な人生を歩んできたと



成美は思う。だから今の両親が養親だなんて、ことさらに、人にアピールするほどのことでもない。

ただ、養親と成美の間には、ひとつだけ暗黙の了解でタブーになっていることがある。

それが成美を産んだ実の両親——養父にとっては妹夫婦にあっては2人の話題を出すことだ。

その程度には、家族にとって嫌な思い出があつたのかもしれない。

いや、多分あつたんだろう。

「大丈夫かな、私」

思わず弱音が口から漏れる。

なんととはなしに解っている。「初恋の人」を探すというのはそういうことだ。

避けてきた過去と、初めて1人で向き合うということ。

そこに何が待っているようと、今回、どうしたって氷室さんは助けてくれない……。

「連れてきちゃったけど、役にたつてくれるかな」

成美はポケットの中から、鍵につけたキーホルダーを取り出した。

氷室さんに似た北風君。

私に似ているらしい太陽ちゃんは、多分彼のマンションのキーケースの中だろうけど。

やばい。今、ちよつと氷室さんに負けた気がしたぞ。

成美はポケットにキーホルダーを滑らせると、咳払いをして前に向き直った。

北風——もとい、氷室さんに報告するのは、意地でも年明け、仕事が始まってからにしよう。

初恋の人に会いました、なんて言ったら吃驚するかな。

おしおきは困るけど、すこしは驚いてくれなきや会いに行かないがな。

そして私にも聞かせてほしい。

あなたが長い休みの間、何を思い、何を見て、何を感じたのか。

きつとあなたは何も言わずに、いつものように笑うだけだろうけど。

それでもどうか、私だけには教えて欲しい。あなたの心の、その奥底にあるものを。

「よう、久しぶりだな、天」

応接室の扉を開けると、ソファに鷹揚に座っている男は、コーヒーカップを手にしたままで片手をあげた。

形よく撫で付けた総髪に、濃いグレーのアルマーニのスーツ。その足元には、仔牛ほどの大きさがある黒犬が寝そべっている。男——三条守（さんじょうまもる）は、片頬だけをつりあげて形ばかりの微笑みを浮かべた。

年齢は氷室より2つ上。水南の同級生で幼馴染。それ以外にどんな関係があつたかは、正確には知らない。

「なんだよ。ひでえツラしてんな。まるで幽霊でも見たような顔してんぜ？」

氷室は答えず、三条の斜向かいのソファに腰を下ろした。

無視かよ、と当てつけがましくつぶやいた三条が、ソファに背を預けて足を組み替える。

「聞いたよ。へマやらかしてド田舎に飛ばされたんだって？  
こうしてみると、確かに田舎臭い顔つきになったよな。ま、お前にはそつちが本性だろうが」

「おかげさまで」

氷室は前を見たまま簡単に答える。すぐに、向井志都が氷室

の分のコーヒーを差し出してくれた。

「国土交通省も気を使ってくれたのかね。お前の生まれ故郷と眼と鼻の先だよな。灰谷吊つて」

「……………」

答えないでいると、三条は空になったカップを志都の方に差し出した。

「志都さん。もうコーヒーはいいから、ウイスキーを出してくれないか。真ツ昼間からこんな田舎者とシラフで話したくないんでね」

「かしこまりました」

主人をけなされても顔色ひとつ変えない志都は神妙に頷き、いそいそとカートを引いて出ていった。

「なんだよ、なにかいえよ。それとも怖くて口もきけないのかよ」

嘲るような口調でいうと、三条は傍らの黒犬の頭を撫でた。

「お前は犬が苦手だったもんな。知ってるぜ？ さつきも一瞬足がすくんだろ。必死に苦手を克服したんだろうが、ガキの頃のとらウマつてのは、なかなか消えやしねえからな」

「確かにね」

氷室は微かに冷笑した。



「確かに今でも残っているようですよ。犬を見ると、無条件に報復してやりたい衝動がね」

「……………」

今度は三条が眉を歪め、憎々しげに氷室から目を逸らした。

まだ抗う術を知らなかつた頃、氷室はこの男に何度も殺されかけた。

比喩ではない。実際それくらいの呵責のない狂気と暴力を、この男は取り澄ました顔の下に潜ませているのだ。

そして何をして、それをもみ消すだけのやつかいな権力を持っていた。手に負えない狂犬——その鎖を握っているのは、

今も昔も水南だけだ。

「まだサインしないのか」

「しませんよ」

氷室は答え、目の前のカップを取り上げた。

「する必要もない。無駄な問答です」

「言ったら。水南の遺言だ」

「だからその証拠をみせてください」

「俺が証拠だ。俺がどこまでも水南に忠実な男だつてことは、  
てめえだつて知ってるはずだろ」

氷室が黙っていると、三条は歯ぎしりするような笑みを浮か

べた。

「……お前をム所送りにすることだつてできるんだぜ。俺は」

「というど?」

「新聞、見ただろ。今朝からニュースはそればかりだ。お前の預かり知らない間に、お前がやったつていう証拠がどこかから湧いて出てくるかもしれないつて話だよ」

「……………」

新聞はおろかニュースのひとつも目にしていない。

そういう意味ではこの数日間、氷室は外界から切り離された場所にいたのだ。

「なるほどね」

とはいえ、だいたいの予想はつく。氷室は落ち着いて指を顎にあてた。

「どうぞ、やりたければお好きなように。ただし僕も、それなりの報復をさせていただきますけどね。そうそう、遅くなりましたが、ご長男の誕生おめでとうございます」

三条が、氷室を睨むようにして黙りこむ。

氷室は空になったカップをソーサに戻した。

「用がそれだけなら、今日のところはお引き取りいただけますか。この家でくつろぎたいならご自由にどうぞ。ただしそれは、

僕が灰谷市に帰ってからにしてください」

「ふうん……」

悔しげにつぶやいた三条は眉をあげ、しかしすぐにその表情を嫌味な笑いの下に溶け込ませた。

「じゃ、どうあっても、この土地屋敷は手放さないつもりなんだな？」

「何度も言いましたが、それは僕の一存では決められない」

「一存、ねえ。なにをもつともらしいことを言っただか……」

ソファの肘掛けに両手をかけ、やや前傾姿勢になって三条は口元を歪ませた。

「本音で喋れよ。てめえはただ、意地になっただけなんだ。

水南の遺したものを俺にくれてやるのが嫌なんだろう。え？

ただそれだけの、子供っぽい動機だろ？」

なんとでも言え。

「そうまでして水南の幻影にしがみつきたいのか。未練がましいな、いつそ、憐れみさえ覚えるほどだ。なあ、ワン公。まだご主人様のくれる餌が恋しいのか？」

顎の前で、組んだ指をゆつくりと組み替えながら三条はほくそ笑む。その目は冷たく、殺意さえひそめて氷室を見続けている。

「お前はな、水南とのゲームに負けたんだ。まだわかんねえかな。お前は、とうの昔に飽きられた捨て犬なんだよ。たーかしくん」

「……………」

氷室がそれでも黙っていると、三条はけつと喉を鳴らすようにして顔をしかめた。

「この家は水南の聖域だ。そこに拾われた野良犬が、主人面出入りしている。俺には、それがどうしても我慢ならない。――クソいまましい。いつそ、お前以外の誰かが持ち主にでもなつてりや、こんな気持ちにはならなかつたらうによ」

「他に用件は？」

極めて事務的に氷室は言った。

「なければこれで失礼します。公務員の休みは暦どおりなのでね。あまり時間を無駄に使いたくない」

「そりゃご苦労なことつて。向こうに可愛い彼女も待ってることだしな」

立ち上がりかけていた氷室は、そのまま視線を止めていた。

今、この男はなんといった？

にやり、と三条は勝ち誇ったように笑った。

「オイオイ、そんな意外そうな顔すんなよ。その程度なら調べ



るだろ、普通。珍しく長く続いてるし、案外お前の方が入れ込んでいる。そんなこと今まで一度もなかったしな」

黙る氷室の横顔をのぞきこむように身をかがめた三条は、ぷつと吹き出すようにして笑った。

「なんだあ。そこまで解りやすい反応を見せるキャラだったか？ お前」

「……………」

「おもしれえ。なんだよそれ。相手ガキだろ。20歳そこそこ。ちよつと貧乏臭いっていうか、しみつたれた感じのさあ。しかも母親は服役中ときてる」

止まっていた時に、不意に強い血流が走った。

なんだと？——

「あれ、今マジで驚いた。お前？」

わざとらしく眉をあげて氷室を指さした三条は、その手を口元にあて、くつくつと声をたてて笑った。

「知つとけよ。遊ぶ相手の素性くらい。私生児だし、母親は人間として終わってるし、結構重たい女だぜ。結婚とかまず勘弁な、みたいなの？　ま、お前にはお似合いだし、こういうの類友っていうんだらうけど」

「……………」

彼女はなんと言っていた？

最初の頃、まだはつきりつきあうと意識していなかった頃。

家族のことを、話のついでに訊いたことがある。

父が退職して田舎に引っ込んで——だから大学の頃から灰谷市で1人暮らし。確かそんなことを言っていたはずだ。人間観察は得意な方だが、そこに、暗い影は一筋も見えなかった。

両親の話も、ごく普通に会話に出ていた。お母さんは心配性で、お父さんは頑固者。年の近い姉が1人いる。ごく普通のサラリーマン家庭だということが、話の端々からうかがえた。それを微笑ましいと感じたことさえある。

黙る氷室を見上げたまま、三条は鼻で嘲笑った。

「俺の情報網を舐めるなよ。お前の彼女を、香澄（かすみ）みたいにするこただつてできるん」

ぐう、と三条の喉が鳴った。ネクタイのないストライプ模様のシャツの襟元を、氷室は渾身の力で掴みあげていた。殆んど無意識の、本能から出た行動だった。

「——香澄にしたことと同じ真似を、彼女にしてみろ」  
猛る感情のまま、唸るように氷室は言った。

「お前を殺す。脅しじゃない。社会的にも肉体的にも抹殺してやる」

「ふざけんな……」

今度は三条が、歪んだ顔に殺意を満たして氷室の腕を掴み、渾身の力で握り、ひねった。

「そのセリフは、そっくりそのままお前にかえしてやる。お前らが水南にしたことに比べたら、俺が香澄にしたことがなんだったんだ。え？」

「どうとでも言え。彼女に手を出すことは絶対に許さない」  
轟音のような犬の吠え声が室内に響いた。

三条の連れてきた犬が、主人の危機を察して臨戦態勢に入っただのだ。逆だった毛にむき出しの牙。当然、口輪もリードもつ

いていない。

三条は犬を制するように片手を出し、しかしその目で挑発するのように氷室を見た。

「わかるだろ？ 俺の命令ひとつで、こいつはいつだって、お前を噛み殺すぜ？」

「お好きな様に」

氷室は眉一つ動かさずに冷笑した。

「ただし息の根は間違いないとめることですね。でないとお前のように、大切な愛犬が殺処分のお憂き目にあうことになりますよ」  
互いの腕と襟首をつかみ合い、数秒、みじろぎもせず睨み

合った後、不意に三条の腕から力が抜けた。いきりたつ愛犬を一声で黙らせた三条は、ひどく嫌味な笑い方になる。

「……今の一言で思い出したぜ。俺がどんなにお前を憎んでいるのかを、な」

「……………」

「悪いが、お前の彼女をどうするかは、俺の全くの自由だね」

「なんだと——」

「間違つても、てめえの指図は受けねえよ」

三条は、氷室の腕を振りほどいた。さもいまいまして、カラーを直す。そして喉をさすりながら元通りソファに腰を下ろ

した。

「確か、成美ちゃんっていったよな。今は里帰りで、養親の家にいるんだよな。なんとかかって田舎町——当然お前も知ってるだろう？」

氷室は何も言えず、眉根だけを寄せる。

「とんでもないクソ田舎で、狸が出てても不思議じゃねえくらい寂しいとこだよな。田舎だから無用心で、扉に鍵もかけやしない。物盗りが入ってもちつともおかしかねえよな。天」

落ち着け。これは挑発だ。

氷室は自分に言い聞かせた。



何もかも自分の手の内だと、そういつて俺を脅しにかかっているだけだ。

とはいえ、もう手遅れだ。なんとも馬鹿げたことに、最初に自分から暴露してしまった。

彼女のことになると、平常心を保っていられなくなることを。これでは、自分の弱みは日高成美だと、わざわざご丁寧に教えてやったようなものだ。

「夜道でうっかり襲われちゃつても、きつと誰も助けにこねえんだろ。田舎だから街頭もないし、近所に人もいねえだろうし。そうだ。正月つてあれ、警察つてやってんの？ ん？ 公

僕、返事くらいしろよ」

——なるほどな。

ようやく冷静さを取り戻した氷室は、三条の思惑を理解した。彼女の身の安全と引換にこの屋敷を手放せと、三条はそう言いたいのだ。

「さあ、やっているんじゃないですかね」

氷室は微笑し、肩をすくめた。自分でも虚勢だという自覚はあつたが、今は他にとるべき態度が思いつかない。

「あなたがそう出るなら、僕もそれなりの策を講じるまでですよ。先ほどは控えめに申し上げましたが、僕ならあなた以上に

巧妙に、あなたを獄中に送ることができると自負しているのですがね」

「……そいつは、どうも」

案の定、三条の微笑みは幾分か強ばって見えた。

互いの視線が、探るように絡み合う。

どちらの狂気が本物で虚勢か、今は、互いに胸の裡を探りあっているのだ。

「では、失礼。僕はまた家の仕事がありますので」

氷室は丁寧と言って、ようやく重苦しい部屋の扉を開けた。

外には、待ちかねたような顔で向井志都が立っている。立ち

聞いていたのか、はたまた入るタイミングを見計らっていただけなのか。

「くそッ」

扉を閉める間際、小さくだがそんな舌打ちが室内から確かに聞こえた。

が、廊下に出た氷室もまた思っていた。今のは完全に俺の負けだ。

水南と別れてから、色んな女性とつきあいはした。そのどれもが自分の弱みになるとは、これっぽっちも思わなかった。いつでも切れるし、別れられる。そう、本当の意味で、自分の心

は誰にも奪われはしなかったからだ。

（珍しく長く続いてるし、案外お前の方が入れ込んでいる。そんなこと、今まで一度もなかったしな）

その通りだ。

なのに、迂闊にも想像もしていなかった。

三条みたいな危険な獣が、まさか日高さんのことを調べていたとは――

『警視庁は、国土交通省大臣官房総括審議官、青柳敏夫（あおやぎとしお）を収賄容疑で逮捕したと発表しました。青柳敏夫は東京大学法学部を卒業後』

「成美、おまたせ」

店先のテレビに見入っていた成美は、びくつとして振り返った。

「なに、またこのニュース？ この人、成美の仕事に関係あるの？」

背後には、義母の日高美和（みわ）が不審げな顔で立っている。

「ううん。全然関係ないけど、……まあ、朝からこればかりや  
ってるから」

「うわ、いかにも悪そうな男」

美和は顔をしかめ、エコバックを成美の方に差し出した。

テレビには、蝦蟇みたいなどす黒い顔をした初老の男が映し  
だされている。

「よく知らないけど、どつかの企業から、何億とかもらってた  
んでしょ？ よくぞ逮捕してくれたって感じだわよね。やるじ  
やない、日本の警察も」

「すぐくえらい人なんだよ。本省の審議官っていったら」

「へーえ」

美和は興味をなくしたように歩き出した。

買い物客でごったがえしている年末のショッピングモール。

この辺りでは一番大きなスーパーであり、成美の実家からは車で30分以上はかかる。

「お味噌がない！」

美和のその一言で、2人は年末の慌ただしい最中、美和の運転する車でここまで来た。味噌ひとつで30分。それが過疎化した地方の現実である。

歩き出すと、レジ横のオープンカフェに置いてあったテレビ



音声は、たちまち成美の耳に届かなくなる。

——国土交通省つて……もしかしなくても氷室さんの職場だ  
けど。

どこか後ろ髪ひかれる思いで、成美はちらつと背後を見た。

——大丈夫だよね。無関係だよね。この間会った時も、そんなの話題にすらならなかったし。

今朝は慌ただしかったから、新聞もテレビも見えていない。成美がこのニュースを知ったのは、実家に帰って、つけっぱなしのテレビを観た時である。

電話をしたい。でもできない。

せめて情報を集めようとニュースをかたつぱしから観てはみたが、詳しい情報はまだどの局もつかんでいないようだ。

国土交通省大臣官房総括審議官。つまり国土交通省のトップから数えて五指に入るエリート中のエリート、青柳敏夫という人が逮捕された。

庁舎建設に係る入札情報を故意に漏洩させ、落札業者から多額のリベートを得ていたという。

『青柳被告のこのような不正は、組織ぐるみで何年も前から行われていたと警視庁ではみており――』

ニュースはそう告げていた。

つまり氷室さんが本省にいた頃から……なのかもしれない。

シヨツピングセンターの外に出ると、灰色の黄昏の中、粉雪が吹雪くように打ち付けてきた。駐車場は目の前だが、車が霞んで見えないほどである。

「す、すっごい雪だけど、運転大丈夫?」

「まあ、なんとか。でも急いで帰らなきゃ」

そう言つて足を早めた美和の背中が、ふと止まった。

「どうしたの?」

成美が訊くと、美和は眉をひそめたまま、ぐるりと背後を窺い見る。

「……なにかしら。さつきからどうも、誰かにつけられているような気がして……」

「はい？」

成美も目を丸くして振り返ったが、ただ粉雪が吹雪いているだけだ。

「誰もいないけど」

「実は駅からそんな気配があつたのよね」

眉をひそめたまま、美和は続けた。

「ほら、今朝成美を迎えにいった時のことよ。その時は本当に、背の高い男の人がじーっとこつちを見つめてたの」

「……そうなんだ」

成美は曖昧に相槌を打った。美和という人とはとにかく根っからの心配性で、ちよつとしたことでも大袈裟に脚色してしまうところがある。

「でもいい男。遠目だから雰囲気しか判らなかつたけど、すらつとして、脚が長くて、この田舎にはいないタイプ。どう思う?」  
「どう、つて?」

「狙いはお母さんかしら。それとも成美ちゃんかしら?」

どちらもありえないとは思うが、——すらつとして、脚が長くて、この田舎にはいないタイプ?

にわかには胸がドキドキしてきた。

氷室さん？

いやでもまさか。

ありえないけど、それは判っているけど、もしかして、また奇跡みたいに氷室さんが私の前に現れたりして……。

「それにしても、今年はすごい雪だわねえ」

美和が、感嘆したように言って天を見上げた。その時、成美はようやく決心していた。

「あの——あのさ、お母さん」

帰宅して以来、どうしても口になかなか言えなかった言葉が、今なら

言える気がした。氷室が会いに来てくれるかもしれない——そんな馬鹿な夢をちらりとでもみてしまった成美は、その瞬間、自分の目的をはつきりと思い出したのだ。

年が明けて氷室と再会した時には、胸をはって彼に過去を語りたい。

「ちよつと、話、いいかな。運転しながらでいいから」

「なあに？ 深刻な話？」

「……聞きたいことがあるんだけど」

「——え？」

車のドアを開けた美和が、叩きつける雪に顔を歪めさせて振

り返る。

「随分前に——私が、駅に1人で泊まった時のことなんだけど」

「すっかり暗くなっちゃったわねえ」

自宅のガレージで車を降りた美和が、忙しげな声でつぶやいた。

「今更だけど、お味噌なんかなくてもなんとかなったような気がするわ。さつさと夕飯の支度しなくっちゃ」

雪は、幾分弱まっているようにも見えるが、以前としてやむ



気配はない。

助手席からわずかに遅れて降りた成美は、さつさと歩き出した美和の背中を慌てて追った。

「あの、お母さん」

さつきの話なただけ。

「あれ？ ちよつと待って、あれつてもしかして俊子じゃない？」

遮るように言った美和の横顔が、みるみる険しくなる。

ガレージの少し先、自宅を囲む垣根の間に赤い半纏を着た人姿が見えた。

その半纏は、身体の弱い成美の義姉——俊子（としこ）のために、美和がつくったものである。

「ちよつと、俊子っ」

風邪引いたらどうすんのっ、家にいなさいって言ったでしよっ。

駆けていく美和の背中から、風に流れつつそんな声が聞こえてくる。

「大丈夫だよ。家にいたって、することないんだもん」

頬を膨らませた俊子は、美和の背後に成美を認めると、たちまち満面の笑顔になった。

「なるちゃん、おかえりつ。寒かったでしょ」

日高俊子。成美よりひとつ年上で、血のつながりでいえば従姉妹にあたる。

病弱というほどではないけれど、少し身体が弱いのか、しよつちゆう風邪ばかり引いている。間違いなく美和の心配性の元凶となった人だ。

成美より1年先に女子大を出た俊子は、特に定職につくこともなく、アルバイトなどをしながら、両親と共に生活している。

成美の手から味噌だけが入ったエコバックを受け取ると、俊子は八重歯を見せて笑った。

「本当にお味噌だけ買ってきたんだ」

「今思うと、2人で行く意味なかったよね」

元々が従姉妹同士で仲良しだったから、今でも成美は俊子のことを「俊ちゃん」と呼んでいるし、俊子も「成ちゃん」と呼んでいる。だから姉妹という感覚はあまりない。

俊子は、年の割には無邪気で甘えん坊で、でも顔立ちは母親の美和に似てくつきりした美人系だ。ただ悲しいかな。俊子は自分を着飾ることにほぼ関心がなく、せつかくの美貌も、少しばかり野暮ったく見えてしまう。

——ま、私も人のこと、上から目線で評価する立場じゃない

よね。

と、えらそうに思った自分を少しばかり恥ずかしく思いつつ、成美は自分を省みた。

野暮つたい、というのは、そもそも成美の代名詞だ。

丸い顔にお世辞にも高いといいがたい鼻。目は、かなり大きい方だと思うが、何故か眼力というものが致命的にないらしく、印象はかなりぼやつとしている。アイメイクをとってしまえば、思いつきり童顔。

昔はこの顔があまり好きではなく、不釣合いに大人びたメイクばかりしていた。それを氷室に「似合わない」とずばりと言

われ、シヨックで、言葉も出てこなくなつて……。

「成美、……さつきの話だけど」

三和土で靴の雪を払っていたら、後から入ってきた美和が玄関を締めながら言った。

その表情も声も硬かったから、成美もようやくやく気がついた。車の中で訊いた実母の話は、やはり美和にとつては、ひどく不快なものだったのだ。

（お母さん、私が駅に泊まつた日のこと、覚えてる？）

（あの日つてさ、もしかしなくても私、自分を産んでくれた人に会ったんだよね。その人、今はどこで、何してるの？）

ハンドルを握った美和は、一瞬虚をつかれたような顔をしたものの、すぐにいつもの口調に戻ってこう言った。

（あー、ごめん。こんな天候だし、運転に集中させてくれる？）

あとは、お父さんや俊子の話ばかりになった。その時からうつすらとは、母がこの話題を避けたがっているような予感を感じたのだが……。

「すぐに答えられなくてごめん。急に成美がそんなこと言うからびっくりして」

「うん、……そうだよね」

今までずっと、暗黙の了解でその話題はタブーだった。

それをいきなり、なんでもないように破ってしまったのだから、美和が当惑するのも最もだ。

やっぱりいい、と言いかけた時、美和が遮るように口を開いた。

「答える前に教えてくれる？ いったいどういう心境の変化なの」

「別に……、変化つてほどじゃないけど」

「どう言えばいいんだろう。」

「最近、……時々だけど、昔のことを思い出すようになったから。具体的につてわけじゃないけど、あれつてなんだったのか」



な、みたいなき感じ。それでよくよく考えてみたら、私、自分産んでくれた人のこと、なにも知らなかったな、と思つて」

美和の横顔は石のように固まったまま動かない。

その反応を、少なからず不安に思いながら、成美は続けた。

「なんていうの……そういうことつて、好きな人ができて結婚とかになったら、まあ、いやでも説明しなきゃいけないじゃない。その時、どう説明したらいいのかなつて」

こわばっていた美和の横顔が、はじめてぎこちない笑いを浮かべた。

「じゃあ、そんないい人が成美にもできたんだ」

「ううん、そんなわけじゃないけど」

「でも、急にそんなこと言うなんてへんじやない」

「いや、へんって」

「へんじやない。今まで一度もそんなこと言わなかったのに！」

「……………」

いきなりの剣幕に、成美は戸惑って瞬きをした。

ようやく判った。

自分が思っていた以上に、この問題の根は深いのだ。簡単に口に出してはいけないことだったのだ。

しかし、いったん口の端に乗せた以上、もう今更後には引け

ない。

「もちろん結婚なんて今は考えてもないけど、そんなことがあつてもおかしくない年になつたなあつて思ったの。好きな人ができて、結婚とか意識するようになる前に、……相手には自分の口から話したいじゃない」

「……なにを」

「養女だつて。……そしたら、産んでくれた人はなにしてるの？  
みたいな話になるじゃない」

難しい目をしたきり、美和は少しの間無言になる。

色々、考えを巡らせているのがはつきりと判る横顔だ。そし

て、言った。

「……もう陽子（ようこ）さんとは何年も音信不通のままだからね」

うん、と成美は声を出さずに頷いた。

陽子。太陽の陽に子どもの子。成美を生んだ人の名前だ。

「じゃあ……、私が駅に泊まったのって、やっぱり、私を産んでくれた人絡みで何かあったってこと？ 雪が、すごく降っていたことだけは覚えているんだけど」

美和はしばらく、自身の葛藤と戦うように黙っていた。

「そうね。だいたい、そんなようなものよ」

そして挑むように成美を見た。

「それで何が聞きたいの？ 昔のことだけを聞けばいいつても  
のじゃないでしょう。陽子さんが今、どこで何をしているとか、  
はつきりいえばそういうことが知りたいんでしょう？」

「……そうだけど、別に会いに行きたいとか思ってるわけじゃ  
ない？」  
「じゃあなんで？ なんで今さら、そんなこと言い出すの？」  
だからそれは、さつきも説明したとおり……。

自分の剣幕に戸惑ったように、美和はうつむいて眉間を押さ  
えた。

「ごめん、お母さん少し動揺してる。……成美はもう、そんな

「ことすつかり忘れてくれてると思つてたから」

ごめんなさい。

成美は言葉に出さずに謝つた。

一生懸命育てたのにいまさら？　とでも思われたのだろうか。そんなつもりはないし、そんな風に切り出したつもりでもなかったのに……。

正直いえば、ここまで強い拒絶反応は予想外だった。

まるでそこに触れたら、今までの全てがなくなってしまうかのような。

血の繋がりなどなくとも、気持ちは完全に親子だと成美は思

つていた。そんな風に育ててもらったし、そんな風に接してきました。

それらは全て紙上に描かれた理想の世界で、実はその紙の下には、みてはならない現実があつたのだろうか――

やがて、言いたくないことを無理に口にするような口調で、美和は言った。

「とにかく、お父さんに話してみるわ。……お父さんにはお父さんの考えがあるし、私の一存じゃ……。だいたい陽子さんは、お父さんの妹さんだしね」

「うん、ごめんね」

成美はため息をついて、天を仰いだ。

まいったな。

なんか、聞いたらとんでもなく後悔しそうな気がしてきた。

「どうしても、聞きたい？」

不意に成美の顔をのぞきこんで、確かめるような口調で美和が言った。

その目は、言外に「そうじゃないでしょう？」と、言っているようである。なにも今夜、話さなくてもいいんでしょう、と。

もし聞いてしまえば、幸福だったこの人との関係まで壊れてしまうのだろうか？



ううん、どうしてももってわけじゃ。そう喉まで出かかった言葉、けれど成美は一呼吸してから飲み込んだ。

「うん……、聞きたい」

「下に、妙な車が止まっているみたいだが、何か知ってるか」  
そう言つて、父、日高芳雄（よしお）がリビングに入ってきたのは、午後7時を回った頃だった。

自宅横で税理士事務所を開業している芳雄は、土日も平日も

なく、午前9時から7時までには、ずっと事務所に詰めている。

元税務職員。とんでもなく勤勉な父親だ。

リビングの食卓には、すでに家族4人分の食事が用意してある。

海鮮鍋。結局味噌は使わなかった。まあそういうことも、美和にはよくあることである。万が一に備え、あらゆるものを揃えておかないと不安な人なのだ。

「下って？ 5時頃、成美と通った時は何もありませんでしたけど」

食器棚からビールグラスを出しながら、美和が答えた。

「黒のベンツだ。このへんであんな車、見たことないぞ」

へー、と成美と俊子が同時に目を合わせる。

その俊子の目が、ふいにいたずらっぽく笑み崩れた。

「成美ちゃん追いかけてきた彼氏とか」

「ち、違うよ。もしそうなら、そんなのただのストーカーですよ」

もしかして氷室さん——

まあ、その線だけはあり得ないか。車も違うし、なんたつて彼は今、東京なんだし。

成美は気を取り直したが、何故だか美和はひどく不安気な顔

でビールグラスを食卓に並べ始めた。

「ストーカー……ねえ、成美ちゃん、もしかして」

まさかと思うけど、駅ですつとこつちを見ていた男がいたとかなんとか言い出すつもりなのだろうか。

が、ストーカーといえば、確かに成美には恐ろしい思い出がある。

女装した挙句、成美の部屋にまで侵入した悪徳弁護士、紀里谷理人（きりやりひと）だ。

まあ、彼の目的は私でなく氷室さんで、ストーカーというより、単なる嫉妬、嫌がらせみたいなものだったのだが。

「まあ、少しばかり気にはなるな」

厳格な芳雄は、生真面目に呟くと、ビールグラスを伏せて置いた。

「飲むのはやめよう。万が一ということもある」

「ちよつと、お父さん、考え過ぎだよ」

「そうだよ。たまたまうちの下に停まつてるっただけじゃない」  
成美と俊子が口を揃えてそういった時、リビング隅の電話が鳴った。

美和が出て、すぐに芳雄がそれに代わる。かけてきたのは、隣家の、ご主人を亡くして以来ずっと一人暮らしをしている奥

さんのようだ。

「ああ。はいはい。下に停まっている車のことなら、うちも気にはしていたんですよ。——え？ 若い男？」

神妙な顔で電話を受けていた芳雄は、それを切るなり、傍らの上着を掴んで肩にひっかけた。

「ちよつと、声をかけてくる」

はい？ もしかして停まっているベントツの運転手に？

成美はびつくりしたが、なお青ざめたのは心配性の美和である。

「お父さん、大丈夫なんですか」

「いや、隣の奥さんの話だと、どうもエンジントラブルを起こして動けなくなっているらしいんだ。今夜はこの雪だし、ガソリンスタンドもやっていないだろう。うちの前行き倒れになられても困るからな」

だからって——ベンツって——あまり、普通の人が乗る車のようには——

とはいえ、一度決めたことを覆す芳雄ではない。

「お父さん、マフラーマフラー、それから懐中電灯も」

父母の足音がばたばたと玄関の方に消えていく。

「なんか、……怖いね。成ちゃん」

「大丈夫だよ。町から来た人が道に迷っただけでしょ」

この席で、改めて実母のことを芳雄に尋ねるつもりだった成美は、拍子抜けした気分で、鍋の様子を窺った。

美和がお伺いをたててくれた結果は、却下、だった。

逆に芳雄にこう言われたのだという。「成美にいい人ができたのなら、まず挨拶に来させるのが先だろう」と。

その誤解を解いてから、改めて聞いてみるつもりだったけど……。

まあ、無駄かな。

成美は小さなため息をついた。



父は昔から、一度決めたことは絶対に覆さない性格だ。

頑固というか、意地っ張りというか、こうなったら意地でも、成美が彼氏を家に連れてくるまで口を開かないに違いない。

で、そんな事態は、天地がひっくり返っても起こりえない。

成美はふつと溜息をついた。

仕方がない。明日、一人でこの近くの駅を回ってみよう。

運良く記憶の中にある駅に行き着いて、あの時の駅員さんに出会えるかもしれないし。

その時、玄関の扉が開く音がして、そこで待機していた美和の素っ頓狂な声があった。

「あら、お父さん。どうしましょう。どうしましょう」

え、——なに？

成美と俊子は顔を見合わせ、同時に立ち上がっている。

ごほん、ごほん、と苦しそうな咳が玄関の方から立て続けに聞こえてきた。

「車が、動かないんだそうだ」

芳雄の、苦り切った声。

「バッテリーもあがって、下手すれば凍死するところだった。放っておくわけにもいかんだろう」

まあ、まあまあ、という美和の声。

「このあたり、——あ、すみません、タオルお借りします。ソ

○トバンクがまるで入らないみたいで」

くぐもった男の声が初めて聞こえた。

その声に、成美は眉を寄せていた。ん？ まさか。いや、まさかね。

「あら、そうなのかしらねえ。このへんの人たちはみんなド○モだから」

と、これはおろおろした美和の声だ。

「プラチナバンドって、なんの意味があるんですかね……。あ、タオル、ありがとうございました」

嘘でしょ。そんな。

「なんでも成美を訪ねてきた——客だそうだ」

苦々しげな、芳雄の声。

その時には、成美はもう声の主を確信していた。

そう、美和は決して思い違いをしていたのではないのである。

駅から確かに成美はつけられていたのだ。そして、こんな真似をする男といえば——

本当になにこれ、大晦日前に悪夢ですか。

「はじめまして、お母さん。灰谷市で弁護士をしております。

私、紀里谷理人と申します」

面倒な男、パート3。

爽やかな声で、紀里谷がそう言うのが聞こえた。

「おい、サル」

成美が紀里谷の前にビールグラスを差し出すと、それまで笑顔と白い歯がひたすら爽やか——加えて仕事もできるイケメン弁護士を演じていた男は、たちまちどす黒い本性をさらけ出した。

てか、なんなのサルつて。

あんたは織田信長ですか。

「この、クソ田舎者の山ザルが。いつたい、どんだけ山奥に住んでんだよ」

「一体、なんの真似なんですか」

成美もまた、声をひそめて紀里谷をなじった。

リビングには、今成美と紀里谷の2人しかいない。

言い訳と嘘にまみれた最悪の夕食は終わり、芳雄は事務所に戻り、美和は紀里谷の布団を用意している。俊子は1人で入浴中だ。

紀里谷といえは、夕食の後、風呂にまで入れてもらって、今

は芳雄のパジャマを着てくつろいでいる。本当に図々しいし、なんでこんなことに？　といくら自問しても納得できない。

相手は単なるストーカーで、今日だって、絶対何かの意図があつて成美の後をつけていたに違いないのだ。

なのに紀里谷は「実は成美さんとは浅からぬおつきあいを——」と、多分苦し紛れに切り出し、「まあ、弁護士さんと成美が？　本当に弁護士さんと成美が？」と、美和が狂喜乱舞したのである。

しかたなく成美は、妥協できる範囲で話をあわせた。「一応友達で——」それはまあ、嘘ではない。「一度、紹介しとこうかな

つて」それは、真つ赤な嘘である。

なんの真似だか知らないが、この吹雪の中、土地勘ゼロらしい紀里谷を外には放り出せない。武士の情けではないけれど、一応氷室の友人のようだし、ここは、貸しを作っておくことにしたのである。

「なにかしたら、容赦なく警察呼びますからね」

「するかよ。俺、女は駄目って言つただろ」

とんでもなく迷惑顔で紀里谷。その顔をお前がするか、といつてやりたい。

「で、どういう企みだったんですか、今度は」



「ん……、まあ、色々あつてな。……まあ、いいだろ。結局のところ、雪道で迷つて失敗したんだから」

うやむやに言つて缶ビールの蓋を開けようとした紀里谷の腕を、成美はがしつと掴んでいた。

「開き直らないで言つてください——なんでこんなところまで、私をつけてきたんですか！」

「だからお前の——てか離せつ、尋麻疹が出るだろうがっ」  
あ、そつか。そんな面白い体質の人だつたつけ。

「言わなきや、べたべたに触つた拳句、警察に突き出しますよ」

「——つた、言うよ。いうから離せつ。お、お前の浮気現場を

押さえに来たんだよ。言つとくけど、これも弁護士の仕事の内だからな」

……………は？

「い、依頼主がいるんだよ。そいつが——まあ、この休みに、お前が昔の彼氏に会うとかさ。とにかく、そんな感じで浮気するかもしれないから、現場を押さええてほしいって……そういうことだ！」

「……………は？」

成美は、たつぷり1分は口を開けていたかもしれない。

「それ、氷室さんじゃないですよね」

「なつ、なわけないだろう。馬鹿じゃねえか？ お前、自信過剰にもほどがあるぞ」

その言い方もどうかと思うが、とすれば、思いつく相手は1人しかない。

以前も紀里谷に似たようなことを頼んだ倉田真帆（くらたまほ）だ。

「倉田さん……ですか」

紀里谷は口をもごもごど動かしだきり、答えない。

凶星、つてことだろうか？

真帆は成美の同期で、氷室に熱を上げている。影でこそこそ

裏工作していたのは知っていたが、それがまだ続いていたとは……。

脱力して、成美はため息をついていた。

「どうでもいいですけど、それで凍死寸前って……、弁護士のくせに、馬鹿ですか」

「う、うるさいな。雪道の運転は初めてだったんだ。あの車、まだローンがかなり残ってて……ぶつけたら姉貴が——いや、大損だろうが」

ふうん。お姉さんの車ですか。

「だからって、恋人のふりまでして、私の家にあがりこみますか？」

「命がかかってたんだよ、こっちは」

まあ、猛吹雪の中、車はエンストして携帯は圏外で充電切れ。

実際紀里谷は、パニック寸前だったらしい。

「氷室さんに……」

そう口にしかけた途端、紀里谷が、半ば蒼白な顔で振り返った。

「言わないよな」

「……………」

「いい、言わないですよ。ほら、日高さんにしても、多少は秘密にしておきたい展開なわけでしょう。これは」

うわ、なに、この情けない豹変ぶり。

「——なんでもするんで」

あえて答えずに視線を逸らす。すると、ガバツと紀里谷が両手を畳について頭を下げた。

「ほんとになんでもするし、今までのことも全部、まるっと、心の底から謝罪しますっ。い、言わないでくださいっ、お願いしますっっ」

成美は今度こそ本気で呆れて、土下座する紀里谷を見下ろした。

本当に、氷室さんの言うとおり、犬より従順な人だった。

いったい氷室さんって、どういうやり方でこの面倒な人をつけたのかしら。

「あのですね」

「はいっ」

がばつと顔を上げる紀里谷。

そんな、チワワみたいな期待に潤んだ目で見上げられても。

「実は、紀里谷さんをお願いがあるんです」

それ頼んじやうと、今度は私が、この人に弱みを握られることになるなあ。

そう思いながら、成美は、夕飯の時からずつと考えていたこ

とを切り出した。

12

あと一列で、書棚は持ち主が17歳の年に入る。

覚えている。この辺りの本を購入したのは、水南が16歳の秋の終わりだ。

出入りの業者が持つてくる大量の本を、まず開封して確認し、水南に渡す。それが当時の氷室の役目だった。

景気後退を反映してか、本人が経済に持ち始めたせい、骨



太の経済書が実に多くなつてくる。が、それと相反するように、恋愛小説もちらほらそこに混じりはじめる。——海外のロマンス小説。今にして思えばすごく意外だ。こんな低俗なものを、水南は本気で読んでいたのだろうか？

——水南……

暖かくて、苦くて、息苦しいような感情が、本を手繰る氷室の胸の内側に広がっていく。

否応なしに、思い知らされずにはいられなかった。

まだ水南は生きている。

氷室自身の胸の底で、幾重にも蓋をされた氷の棺の中で。

けれどその蓋は、この部屋の空気に浸された途端、もろくも解けて霧散した。

そうして水南は、再びこの世界に蘇つたのだ。――

なすすべもなく水南と過ごした過去に引きずられていきながら、胸の底の微かな光が――あるかなきかの儚い光が、懸命にそれに抗しているのを氷室は感じた。

（――課長！）

（朝ですよ。起きてるのは判つてるけど、起きてください）

（今日は何します？　天気がいいから、お散歩にでも行きましようか）

真夏の日差しのように、いきなり明るい光が氷室の闇を照らします。

けれどそれはすぐに灰色に曇り、日高成美の不安そうな目が氷室をのぞきこんでいた。

(……じゃ、駄目ですか?)

(私、もつと氷室課長のことを知りたいんです。……私じゃ、駄目ですか)

はつと氷室は我にかえり、再び自分1人が闇の底にいることに気がついた。

駄目だ。

踏み込まれたくない。知られたくない。この心に抱いた暗いものだけは、君には一切触れさせたくない。

だから別れる。君がこれ以上、僕の中に入ってくる前に。君を、——誰よりも大切に思っているから。

(きれいごとよ、天)

不意に水南の声が、耳元で囁いた。

(あの子が大切？ 笑わせないで。あの子は私の、何もかも真逆なだけ取り柄の代役でしょう?)

いや、違う。

(あなたは私にないものを、ただあの子に求めただけ)

違う。俺はそんなものを求めてはいない。

（あなたは、寂しかったのよ。天）

——……………。

（私が死ぬと判った時から、寂しくて怖くてどうしようもなかった。だから、誰でもいいから暖かな手を求めた）

——違う……………。

（寂しさから恋をして、私を失う恐怖から逃げようとした）

（最初から、私以外の誰かを愛するつもりなんてなかったんでしよう？）

そうじゃない。それは違う。

俺は最初は——やり直せると思ったんだ。

彼女となら、もしかすると、普通の恋愛ができるのかもしれないと思っただ。

そうしたいと思っただから——初めて他人に、君との過去を打ち明けたんだ。

嘲るような笑い声をした。

（でも、すぐに、それは無理だと判ったじゃない）

「……………」

（知っているのよ。私。あなたはいつも怯えていた。彼女があなたの中に入り込もうとするたびに、子どもみたいに震えてい

た。結局あなたは乗り越えられなかった。自分の何もかもを知られるのが怖いから、逃げることに、決めた)

「……………」

(にもかかわらず、あなたは別れを先延ばしにして、無意味な恋愛ごっこを楽しんだ)

やめろ。

(自分の心は硬くなに閉ざしたまま、相手の心にだけ自分の存在を刻みこんでいったんだわ。卑怯者、あなたほど残酷で身勝手な男はいないじゃない！)

「……………もう、やめろ！」

やめてくれ。

そうだ。

その通りだ。水南。

それにはなんの反論もできない。

俺ほど身勝手な男もいない。

未来のことなど何も考えずに、およそ遊びには似つかわしくない生真面目な女性に手を出した。

真剣な恋愛を装いながら、彼女がこちらに踏み込んでくると、窓を締めて鍵をかけた。

そのくせ、彼女が自分に背を向けると、腕を掴んで引き戻し



たのだ。あと少し、あと少しだと、自分にそう言い聞かせながら。

それを、エゴと言わずに何と言えはいいのか。

今も、すぐにでも屋敷を飛び出し、灰谷市に戻りたい衝動は、決して行動に移すべきではない。

君を、三条の薄汚い口から飛び出した過去ごと抱きしめたいという気持ちは、俺のエゴで、実に勝手なヒロイズムだ。

（そうよ。あなたの中は、あなたと、そして私だけのもの）  
水南が優しく囁いた。

（そこに、誰も入れてはだめ。あなたと私は、そうやって永遠

に生きていくのよ……)

あると思った光は幻なのだ。最初から――

永遠のような闇が、窓の外を覆っている。

睡眠も休息も一切取らず、何かに取り憑かれたように、氷室は本を探し続けていた。

青い本、タイトルも作者名もない。そんなものはないと解つていながら。

(思い出すでしょう？ 天、あの時は楽しかったわね)

間断なく聞こえる囁き。

(ほら、この本を見て。まるであなたと私のような物語よ)

本のタイトルを確認するたびに、その頃の水南との思い出が  
否応なしに蘇る。

16歳、水南は本当に美しかった。どんな芸術家もこうも精巧  
な美は表現できないのではないかと、完璧な美貌の持  
ち主だった。

朝露に濡れた白薔薇のような肌。豊かな黒髪。潤みを帯びた  
黒い双眸は、見ているだけで心ごと吸い込まれそうになる。

あれほど美しい人を、氷室は今に至るまで見たことがない。

同時に、あれほど冷酷な心の持ち主も、氷室は知らない。

何故出会ったのか——今でも思う。何故、出逢ってしまったのか。

水南という女性にさえ巡り会わなければ、氷室の人生はいまと全く違ったものになっていただろう。

女性と寄り添って眠ることを安らぎと感じられる。その程度には、普通の男になっていたのかもしれない。

25年前——

越してきたばかりのはじめての街。そこで一番大きな屋敷の、雇われ家政婦。それが、氷室の母の職業だった。

「学校がひけたら、お屋敷の勝手口から入って、中で勉強していなさい。お母さんの仕事は、夜が遅いから」

どうやらそれが、雇用の際の約束事のように、まだ小学2年生だった氷室は、母が雇われた屋敷——後藤家の一室で、連日夜の10時過ぎまで、1人きりで過ごす日々を送るようになった。ある夜のことだった。

勉強に飽きた氷室が無為に鉛筆を回していると、不意に背後に人の気配を感じた。

振り返った。心臓が停まるかと思った。大きな西洋人形が立っている——そう思ったからだ。

しかし、その人形は口を開いた。

「なにやってるの」

勉強だけど、そんな言葉をかろうじて返した。

頬がにわかに紅潮した。人形の声は、生きた女の子の声だった。しかし、その声にはまるで感情というものが感じられない。

——本当に人、だろうか？

女の子は、無言で氷室が勉強机の代わりにしていた座卓に歩み寄ってきた。手足が長く背が高い。多分その時の氷室より、頭ひとつ高かったろう。

さらさらと流れる黒髪からは、甘い花の香りがする。

「頭がいいのね」

机の上をのぞきこんだ女の子が言った。

答えなかった。

この年で中学レベルの問題を解く氷室に、誰もが驚き、憧憬の目を向けてくる。この子も、きっと同じだろう。そう思ったからだ。

氷室が黙っていると、ひどく優雅な口調で女の子は続けた。

「でももちろん、この程度で満足してはいないんでしょう？  
天君の生活水準なら、もっとレベルの高い勉強しないといけないことくらい、当然理解しているんでしょう？」

「……………」

どういう意味だろう、それは。

「でないと言いがれないじゃない。君が今いる地獄みたいな場所から。社会の、最下層から」

背中を、冷たい手で撫でられたような気分だった。

「駄目よ。私に怒っては、駄目」

女の子はほほえんだ。美術の教科書に出てくる聖母のようだと氷室は思った。美しい——けれど何故か不安をかきたてられる。

「君はね、天君」



そのほほえみのままで、女の子は続けた。

思わず後退した氷室は、その時はじめて不安の理由が判ったような気がした。

この少女の目は、爬虫類のそれに似ている。

ただ穴があるだけで、そこには、なんの感情も宿っていないのだ。

「君は犬よ」

少女は囁くような声で言った。

「君は、お母さんと一緒にこの家に飼われた犬。犬はね、飼い主に齒向かっては駄目。なにをされても大人しく尻尾をふって

いなさい——君の、お母さんみたいに」

ようやく氷室はこの少女の正体に思い至った。

後藤家の1人娘、誰もが賛辞する頭脳明晰なお嬢様——

後藤水南だ。

それからほどなくして、氷室はこの街にひとつだけある名門私立小学校に転入することになった。

氷室家の経済状態ではありえないことであり、また、同小学校にテストなしで中途入学したケースも氷室が最初で最後である。

（後藤さんがね、お前の頭がいいのを惜しんで、お嬢様と同じ学校に通わせてくれると言ってくれたださったの。学資も全部援助してくださることになって……本当に天は運がいい子だわ）

その時には、氷室にももう判っていた。

母は、尻尾を振って飼い主に服従した犬なのだ。

なにをされても歯向かえないどころか、歯向かう意思があったことさえ忘れた動物なのだ。

アパートを引き払い、母共々後藤家に住み込むことになった時も、氷室はもう驚かなかった。

それが最初からだったのか、成り行きでそうなったのか。ど

ちらであつても、もう構わなかつた。派手になり、体臭や表情までも変わつてしまつた母は、もう、氷室には異種の人だつたからだ。

また、母のことに構う余裕もまた、その時の氷室にはなかつた。

転校先の学校は、金持ちしか入学できないエスカレーター式の進学校で、創設者は後藤家の祖先である。当然、後藤家の娘である水南の権力は絶対だ。

そんな閉鎖された学校で、転入したばかりの氷室が徹底的に疎外されたのも、当然といえば当然だつたらう。

季節外れの転校生。母子家庭。後藤水南の父親の愛人の子供。

虐げられる理由は、もうそれだけで十分すぎるほどである。

そのカーストの頂点にいるのが水南なら、氷室は確かに最下層だったのである。

そして、階層があるのは学校だけではない。

後藤家が造った会社、工場、学校、街を構成するあらゆるパ  
ーツ……つまりこの街には、後藤家を頂点にしたピラミッドが  
昔から構築されていたのだ。

その狭い異常な世界で、いわば氷室はたった1人の異端者だ  
ったのだ。――

水南の取り巻きたちは、まるで女王様のごきげんをとる、それがたつたひとつの方法でもあるかのように、氷室を徹底的に虐めぬいた。

その残酷さは、“いじめ”などという生ぬるい言葉では語り尽くせない。いわば精神の虐殺である。当然、容赦無い暴力もそこに加わる。

その先頭に立っていたのが、校内のボスであり、当時から『水南の婚約者』を称していた三条守だった。

三条は、ことあるごとに氷室の首を柔道技で締め、意識を失うまで傷めつけた。

「知ってるか？ 仮にお前を絞め殺しても、これはスポーツ事故なんだよ。お前みたいな虫ケラ1人死んだところで、だあれも騒ぎやあしねえんだよ」

愛犬家の三条家は幾種の大形犬を飼っており、その犬たちに、服や学用品をずたずたに食いちぎられたことも一度や二度ではない。

後藤家に居候をはじめて1ヶ月も経たない内に、このままでは本当に殺されるかもしれない——と、氷室は真剣に考えるようになった。

そしてその死は、誰にもかえりみられはしないのだ。

子どもとはいえ、親が絶大な権力を持つ連中は、何をしても責められることはない。どんな結末も、事故で処理されてしまおうだろう。

一方で水南は、彼女の取り巻きたちが必死になって氷室をいじめる様を、煽り立てもしなければ止めもしなかった。

彼女の采配がどう動くかで、氷室の学校での立場はまるで違ったものになっていただろうが、水南は文字どおり何もせず、むしろ氷室の出方を静かに観察しているように見えた。

——試しているのか。

もしかすると、いずれ姉弟になるかもしれない愛人の連れ子



が、この難局にどう対処するか、それを確かめようとしているのかもしれない。

負けたくない。

あの女にだけは、負け犬だと思われたくない。

そう思うようになった時、ただ黙って耐えるだけの存在だった氷室は、ようやく反撃を開始した。

勝機を得る方法はひとつしかない。四面楚歌のこの世界で、確固たる自分の味方を作ることである。当然、友情を構築する以外の方法で。

じつくりと人間関係を観察し、やがて狙いを定めた氷室は、

少しずつ敵の牙城を崩しにかかった。

方法はしごく簡単だった。相手のウィークポイントを探り出し、いざという時にそれをつきつけてやればいいのだ。

どんな馬鹿げた理由でも、当人には死にたいほど恥ずかしいことがこの世にはある。幼稚な子どもなら、なおさらだ。

そうやって掴んだ尻尾は、さらに深くたぐり寄せ、内臓までしつかり掴みとる。

氷室は同級生たち巧妙に罠にかけ、その弱みを意図的に増幅させた。そうして力関係を存分に判らせてやれば、一度刷り込まれた主従関係からはそう簡単には抜け出せない。手足のよう

に動く下僕が、こうやって1人完成するのだ。

結局、1年も経つ頃には、氷室は校内の一大勢力のリーダーになっていた。2学年年上の三条ですら、容易に手出しできない存在になっていた。

あの頃の経験には、むしろ氷室は感謝している。そうやって自分という個ができた。いまでも、何者をも恐れではない。誰にでも生きていく限り、隙というのは絶対にある。それを、あの頃の経験が教えてくれたからだ。

が、どんな動物にも天敵がいるように、どう狡知をこらしても、絶対に叶わないのではないか——と思える相手が、1人だ

けいた。

水南である。

氷室が中学にあがるのを待っていたかのように、水南はようやくその本性を顕にした。

『ゲーム』

三条がそう名づけたものに、以来氷室は、常に悩まされることとなる。

それはいつも、ささやかな異変からはじまる。

いつもそこにあるものがない。いつもの場所から、少しばかり何かの配置が変わっている――

その異変が端緒であり、やがて氷室の身近な人間が危機的な状況に陥るのだ。

大切なものが紛失していたり、人生を左右するようなイベントのある日に突然姿を消してしまったり、状況的にその人物が犯人としか思えない状況で、なにかしらの盗難が起きていたり、といった具合にだ。

そうして、それを解決するヒントが、何故か氷室にだけに判る形で与えられる。

「ゲームだよ。天。光栄に思え。あの水南がお前を試してるんだ。水南に認められたきや、お前がその謎をとくんだな。解け

るものなら」

三条に挑発されたことよりも、氷室はただ、証明したかった。

水南に——自分を犬か虫のように見下すあの女に、頭脳では決して負けてはいないと。

が——

それは、まるで写し鏡を見ているかのような恐怖だった。

どんなに先じて行動しても、必ずその先には水南の空洞のような目が待っている。一手も、二手も先を読んでいるつもりでも、その先には必ず水南の次の手が待ち構えている。まるで、「遅かったのね」とでも言っているかのように。

かなわない、と氷室は思った。

理解しないわけにはいかなかった。たった2歳しか年の違わないこの女は、俺より格段に頭がいい――

が、水南とそんなゲームをしていた頃は、ある意味まだ2人は対等であつたのかもしれない。

結局氷室の母は、後藤家の後妻にはならなかった。氷室はどこまでいっても愛人の息子であり、後藤家の養子にはなれなかった。

そうした氷室の微妙な立場は、中学3年の時にはつきりと「執事見習い」なるものに確定したのだ。

つまりは使用人。しかも、水南専属の使用人だ。

以降、氷室は、彼女の小間使いであり、奴隸も同然の立場となつた。

彼女が指を鳴らせば氷室はかけつけ、どんな願いでも聞き遂げなければならぬ立場になつた。

常に水南と対等であろうとあがいていた氷室にとって、それは言いようのない屈辱である。今考えても判らない。それがいつ、恋慕に近いものになつていったのか――

いや、それもまた、巧妙に仕組まれた罠だつたのだ。

（――天……）



悪魔。

今でもその単語以外に、水南という女を表現する言葉を氷室は知らない。

その悪魔に、氷室は二度、地獄の底に突き落とされた。

なのに、思い出の中の水南は、今も天使のように優しく氷室に微笑みかけている。

「——そうよ。そうやって、私を見て——私をずっと追いかけて」

（約束したわ。天、あなたの時間は生きている限り、ずっと私のもものだって）

(たとえば、私が先に死んでも)

「……水南」

氷室は呻くように呟き、額に手をあて、うなだれた。

いくら首を振って拒絶しても、水南の吐息と囁きが、耳にからみついで離れない。

——気が……狂いそうだ。

もう、どこにも逃げ場がない。

こうして目が覚めている時でも、心を奪われ続けている。過去に。もう夢でしか会えない人に。

——判ったよ、水南。

君の遺言は、俺への罰といましめだ。

君は今でもこの部屋にいて。

俺の心変わりを約束が違うと責めている。

本当に卑怯だ。君自身は、俺を一度も愛したことがないくせに。……

本を投げ出すようにして置き、氷室は脚立を降りると、水南の肖像画の前に立った。

——僕は……君を、手放せない。

そうだ、もう抗うのはやめて、ずっと君の側にしよう。

俺もまた君と同じ魂になれば、君の許しを乞うことができる

だろうか。

そこには、微笑んだ君が、両手を広げて立っている。——夫、おかえりなさい。幸福の極みだった頃のように、そう言つて。

——水南……。

氷室は微笑し、そして一歩前に踏み出した。

どうしてもつと早く気が付かなかつたのだろう。

本当はずつと、7年も前から、俺は君の側にいきたかつたのに、水南。

そつと手を伸ばしてみる。指は、10代だった少年の頃にように震えている。水南——俺は、もう一度君に触れたい。

その時だった。胸におさめていた携帯が、突然電子音をたてて低く震えた。

13

成美は、指を携帯のキーから離して、ため息をついた。  
やめた。

今、氷室さんに電話したところで、こんなわけのわからない事情を説明できるはずもないし、拳句、不機嫌にするのは目に見えている。

蛍光灯だけを灯した部屋は薄暗く、家中が夜の帳に覆われている。聞こえるのは秒針が刻む音だけだ。

田舎の夜は都会より随分早く、まだ夜の10時すぎだというのに、両親も俊子も、就寝してしまつたようである。

仏間に布団を用意された紀里谷だけは、まだ起きているような気もするが。

（紀里谷君のお布団、なんだつたら成美の部屋に用意しようか）

「……………」

成美は携帯を投げ出して、枕に自分の顔を埋めた。

自己嫌悪と罪悪感。

氷室さん、本ツ当に本当にごめんなさいッ。

これは裏切りでも浮気でもなく——抗弁、そう抗弁なんです。多分、ジョークではなく、母は本気で紀里谷と成美を同じ部屋で寝かせようとした。間違いなく母のいらぬ気遣いだ。私が今夜、とんでもなく傷ついたと思っっているから。

そして紀里谷を本当の恋人——将来まで真剣に考えた——と、誤解してしまったから。

いや、そんな風に誤解させてしまったのは私なんだけど。

自分の過去を、養親の口から聞き出すために。

成美が紀里谷を引き連れて両親の前で改めてその話を持ち出

すと、父はしばらく迷ってたようだが、やがて観念したように口を開いた。

（紀里谷さんが、そこまで成美のことを考えてくれているなら、お話ししましょう）

（私どもは親ですが、灰谷市で暮らす成美の側にいて、支えてやることはできません。いつ話すべきかというのは、非常にデリケートな問題でした。私は……成美に精神的な支えとなるような人ができた時に、話すべきだと考えていました）

だって、そこまで深刻な話だなんて、想像もしていなかった。

（お父さん、ご安心ください）



また、それに返す紀里谷の対応もすごかった。そこまで頼んでない——何度成美は、口を挟みかけたろう。

（お2人はご存知ないでしょうが、僕らはもう昨日今日の間柄ではないのです。僕が司法試験を受ける頃から彼女には支えになつてもらい、ようやく弁護士になつた今、真剣に彼女との将来を考えています）

よくもまあ、作り話が次から次へと出てきたものだ。

（うちあければ、僕にも両親が、いません。今は姉と2人で暮らしています。自慢にもなりません、決して裕福な暮らしではありませんでした。僕を育ててくれた姉は今でも、水商売を

しておりますし)

美和がそつと、ハンカチで目をぬぐった。

いや、それ本当だけど、確かに嘘じゃないんだけど、この人の姉——月華さんつてのも、なかなかの曲者よ？

私のこと、ちんちくりんとか小猿ちゃんとか、相当好き勝手に言ってくれた人よ？

(まだ、僕の収入も少ないし、仕事も不安定なので結婚は少し先になると思います。というより、成美が今、……僕より仕事に夢中なのかな)

成美って言うな！

そんなこんなですっかり紀里谷を信じ込んだ両親は、ようやく重い口を開いてくれた。

それは、かなり衝撃的な内容ではあったのだけど。

「……てか、紀里谷さん、演技しすぎ」

これじゃ、完全に詐欺じゃない。自分の親、騙したようなものじゃない。結婚とか将来とか、そこは上手くぼかしてよ。後で、実は友達でしたって笑ってばらせる程度には。

紀里谷のことだけでも、事前に氷室に相談しておいた方が——いや、もうすでに事前ですらないか。話せば、確実にエベレスト級のブリザード。遭難するのは紀里谷だけではない。ここ

までいけば成美も思いつきり同罪だ。

「あー、もう、最悪……」

最高のクリスマスから、急転直下で最低の年末に突入した。

早くも年明け、氷室と再会するのが怖い。ちよつとやそつとのごまかしは、あの人には簡単に見抜かれてしまうだろう。最悪、ご実家はとうでしたか？ と、そんな質問にもボロを出してしまいそうだ。

——やつぱり、そうなる前に正直に話そう。

成美はうんうんと頷いてそう決め、仰向けになった。

思考が止まると、秒針の音だけが、やけに大きく聞こえてく

る。

「……………」

本当は、解っている。

今、私は、自分の動揺を、自分自身で誤魔化しているのだ。

私の過去。

正確には、私を産んでくれた人の現在。

氷室さんはどう思うだろう。むろん、気にしないと言うだろう。君は君だから、そう言ってもくれるだろう。そんなところで不安にはならない。氷室という人を、そこで疑うことはない。

でも、耳に入れたくはない。

この胸がざらざらするような不安と不快感を、彼とだけは共有したくない。

何故だろう。そもそも自分の過去をきちんと氷室に話すつもりで——そのために、紀里谷まで使って養親から実親の話を聴きだしたのに。

（お前、なかなかへビーだな）

両親との話の後、紀里谷はあつさりとそう言った。しかし彼はその口で、

（でも不幸自慢でいけば、俺のがかなり上だからな。ま、よくある話だよ。子どもは親を選べねえし）

と、多分慰めみたいなことを言ってくれた。

紀里谷に知られるのは、平気だった。一応弁護士だから、噂を撒き散らすような真似はしないだろう。でも、氷室には――  
できれば、知らないでいてほしい。何を聞いても彼は気にしないだろう。それはよく解っているのだが。

成美はぶるぶるっと首を振って、布団を胸まで引き上げた。  
駄目だ。考えても解らないことは考えないようにしよう。

明日は初恋の人を探しに行く。

（成美が駅に1人で泊まった日のことは……、それは、確かに、憶えています）

（ただ、成美。お前がその日何を見て何を経験したのかは、実は私たちにもよく分からないんだ）

あの雪の日の思い出を、1人で探しに行くのだから。

着信――

突然響いた着信音は、5度ほど鳴って諦めたように切れた。

氷室は、少しだけ眉を寄せてポケットから携帯を取り出した。

休みの間は、誰からの電話にも出るつもりはなかったが、世



間を騒がせているであろうニュースのことが、ふと気になったのだ。

開いてみると、案の定何度も電話をかけてきた元上司の番号。そして、留守電マークが点滅している。

少しの間そのランプを見つめた氷室は、指でキーを押してから、携帯を耳にあてた。

『氷室、俺だ。どうして連絡してこない。新聞みたか。青柳さんが逮捕された。すぐにマスコミがかぎつけると思うが、警察のホンボシは西東（さいとう）事務次官だ』

西東事務次官。キャリアの頂点——国土交通省事務方のトツ

プである。

『これは噂なんだが、西東さんはお前をスケープゴートにする腹積もりらしい。わかるだろ、お前の親父さんのことだ。——マスコミが最も喜びそうなネタだ』

「……………」

『とにかく一刻も早く連絡してくれ。俺でよければ力になる。嘘じゃない。お前には借りがあるからな。いつかはそれを返したいと思つてたんだ』

メッセージが切れた後も、氷室はしばらく携帯を耳にあてた

ままでいた。

霞ヶ関時代、確かに氷室はこの無能な上司に幾ばくかの助け舟を出してやった。でもそれは、決して親切心からではない。

部下である自分にまで火の粉が散ってくるのが面倒だったからだ。

力になる？

もちろん、なんの役にも立たないだろう。だが氷室のような本筋を外れた人間に手をかせば、この男の出世の道も、同時に閉ざされることになるのだ。

てつきり青柳さんの件で余計なことは喋るなど、釘をさされ

るものだとばかり思っていたが……。

少しばかり意外さに打たれた氷室は、他の着信にも目を向けた。

留守電が2件、見覚えのないアドレスからメールが1件入っている。

「……………」

氷室は少しためらってから、まずメールの方を開いた。

12月28日。2日前の夜に受信したメールである。

氷室は、面食らって瞬きをした。

え………？

氷室課長。おかげん  
はいかがでしょうか  
U>ω<)ノ シッ!!

灰谷市役所は、本日仕事  
納めを迎えましたっ  
(°▽°)ホコレ!!

まさか……三ツ浦君？

道路管理課の新人、三ツ浦靖人（みつうらやすと）。今年採用  
で、成美と同じ年である。

さて報告です(´\_ゝ´)ﾌｵｰ  
沢村さんですが、やはり油断  
のならない女関係でした。

今日は法務の日高さんにロッ  
クオン。ワ(ﾟдﾟ)オ!

人がぞろぞろいるエレベータ  
ー前で、口説きまくっていた  
んです。

確かに、年末年始の緊急連絡用に、三ツ浦には携帯の番号と  
メールアドレスを知らせている。しかし、このメールは一体。

日高さんもなんだか優柔不断にデレデレした感じで、最後は法務の補佐に叱られて終わりです。

日高さん、法規担当のくせにそういうところ軽いんですよね(´Д`)=3

同期として、僕はちょっぴり恥ずかしいです(´・ω・`)

氷室課長のおられない間は、こうして僕が沢村さんを監視していますのでご心配なく。

ではでは。よい休日を(´▽`σ)σ！

ゞ(❀ 6 6)ノ㊦❀ヤ❀ス❀ミ❀ナ❀サ

❀①. ♪♪



「……………」

いや……………。

緊急連絡用って、こんなことか？

三ツ浦が、相当ずれまくった青年であることは知っていたが、こんなものを普通上司に送るか？

確かに、沢村に何か不審な動きがあれば、すぐに報告するよ  
うに、と三ツ浦には言っておいた。

しかし、それは何も、日高さんの近況を知らせろということ  
じゃないぞ。

苦いため息と共に画面を閉じた氷室は、今度は留守電をきく

ために携帯を耳に当てた。

すぐに、少し舌つ足らずの女の声が響きだす。

「こんにちはーっ。真ツ帆でえす。氷室さん、お休みは有意義に過ごされてますかあ？ あ、私は明日から家族でグアム旅行です。来年は氷室さんも一緒に……ふふっ。考えておいてくださいねッ」

倉田真帆。

次の脱力波が、容赦なく氷室に襲い掛かる。

「さて、本題です。実は成美——法務係の日高成美さんのことですけど、今日法務の人から聞き捨てならない噂を耳にしちゃったんです。お聞きになりたいですよね。」

雪村さんって知ってます？　うちの局の担当で、見かけはともかく中身は最低の男なんですけど。」

その人が、どうも日高さんと隠れて何かやってるみたいなんです。今日も、2人でこそこそエレベーターホールの方に消えていったって係の人が。」

怪しいですよー。

雪村主査つて一見大学生みたいですけど、年は、氷室さんとさほど変わらないんですよ。やですよね。おっさんの若作り。

あ、氷室さんのことじゃないですよ。

あまり知られてないけど、スノウ製菓の会長のお孫さんだつて知ってました？

最も雪村さんのご家族は会社には関わってなくて、お父さんは国税庁のえらい人みたいですけど。

それにしても、氷室さんが東京に帰った途端に他の人につて、……日高さんも案外抜け目ないですよ。しかも、何気に玉の輿狙つてるようにも見えますし？

氷室さん、気をつけてくださいね。私はいつも、氷室さんの味方ですから。

じゃ、電話は気が向かれた時でかまいません。よいお休みを！」

「……………」

何故だろう。

別に指示したわけでも、仕組んだわけでもないのに、何故だか日高さんの情報が僕に集まる流れになっている。

残るはもう一件の留守電だ。

声は、部下の沢村烈士のものだった。

「あー、すみません、こんな時間に。別に、用ってほどもないんですけど、ちよい、あなたの声がかききたくなつて」

酔っ払っている。

「一度、あなたを押し倒しちゃった感覚が忘れられないのかな。あなた、綺麗なんだもん。マジでそのあたりの女より、よっぽ

どそそる顔してるよ」

しかも、相当悪酔いしているようだ。

「あんたの代わりってわけでもないけど、今、俺の隣に成美……  
……って嘘つす。ははは。でも寂しいんで、ぶつちやけ今夜は、  
女なら誰でもいい気分なんすよね。……まあ、いいや。じゃ、  
よいお年を」

いきなり人の女を呼び捨てにした報いは、後でゆっくり考え

てやろう。

酔っ払ってもどこか冷めている沢村がこうも自棄になつてい  
る——その理由が少しだけ気掛かりだったが、氷室は携帯を閉  
じて元のポケットにすべらせた。

いきなり現実の時が、止まっていた氷室の周りで動き出した  
ようだった。

ここではなく、別の場所で動いている時。

忘れていた。俺の生きている場所は、もうこの屋敷だけでは  
ない——



氷室は再び、16歳の水南を見上げた。

絵の中に棲む少女は、さきほどまで確かに生きていた。

今はどう見ても、キャンパスに絵の具で描かれた、ただの絵だ。

携帯に視線を戻した氷室は、やや冷めた目になって呟いた。

「沢村と、雪村さんね」

行政管理課の雪村のことなら知っている。あの柏原明凜が、珍しく褒めていた。役所人には珍しく頭がよくて合理的な男だ

と。

もうひとつ知っているのは、先月その男が、日高成美と何度か食事に行ったということである。

実は、相当不愉快だった。

あえて、おくびにも出さずに黙っていたのは、雪村が優秀な男で、成美の係の上席だからだ。その関係までいちいち指摘すれば、彼女の仕事に差し障りがでるからだ。

とはいえ、相も変わらず、無用心で隙だらけ。

今回は、それが本当によく判った。

日高さん。まるで無自覚なようだけど、君には、異性をひき

つける天性の匂いがある。

匂いというか、冬のひだまりのような、ほのぼのとした明るさだ。

それは、普段は影って見えないし、見えても目立ちはないけど、一度そのぬくもりに触れた男は、無意識にその暖かさを求め、君の側に戻っていくのだ。

沢村も、多分だが雪村も。

そして俺も。

氷室は髪を手でかきまわしてから、殆んど考えることなく書庫を出た。

廊下では、カートを押す向井志都が、しずしずとこちらに近づいてくるところだった。

「出かけてきます」

志都が顔を上げる前に、氷室は言った。その時点でどこへ行くつもりもなかったし、行く場所も考えてはいなかった。

「こんな時間からですか」

案の定、目元に疑心をたつぷりたたえて、志都が非難がましく言う。

「ええ、ちよつと外の空気を吸いたくなつたので」

「お嬢様の遺言はどうなさるのです」

ぴしやりと手を叩くような、手厳しい口調だった。

足を止め、わずかに志都を振り返った氷室は、少し考えてから、口元に微笑を浮かべた。

「どうも、そのような本はないように思いますね」

「きちんと、お探しにもならないで——」

「生憎、僕にはもう無理ですよ。誰か他の人間をあたってください」

啞然とする志都を置いて歩き出すと、氷室はコートを羽織つて玄関から外に出た。

暗い帳に覆われた冬の夜を見上げる。月が、明るく輝いてい

る。

吐く息は濃い白だ。あと1日で今年が終わる。

一步一步、屋敷から遠ざかる度に、背にからみついたものが解けていくようだった。

（――天……）

嘔きが遠ざかる。同時に肩から力が抜けていく。

（――天、待って。どこへ行くの……？）

最後に、指にからみつくように残る冷たい手の感触を、氷室はそつと手放した。

ようやく氷室に、ひとりきりの静寂が戻ってくる。

あの書庫は、水南の精神世界そのものだった。

いわば氷室は、死んだ妻の中にいたも同然だった。そうやって何日も何日も、氷室は死者と対話していたのだ。ここより他の世界があることに気がつきもせず。

（知ってる？　ずっと地獄の中にいるとね、そこが地獄だってことが、判らなくなるのよ）

水南の生前の言葉を思い出し、氷室は皮肉な苦笑を浮かべた。君は予言者のように、未来のなにかもを言い当てるんだな、水南。

そのセリフを君の唇から聞いた時、俺はそれを、ただの負け

惜しみだと解釈した。

そして冷ややかに君を見下して、心のなかでこういったのだ。  
生憎だったな。このゲームに勝ったのは、俺だ。

——ゲーム。

見開いた目から何かが零れた。暗い世界がいきなり開けた。

いきなり訪ねてきた三条が言った言葉にも、そのワードが含まれていた。その時も、胸に何かが薄気味悪くひっかかったはずだ。

（お前はな、水南とのゲームに負けたんだ）

厭味にはやけに脈絡がない言葉だった。いや、そもそも



三条は一体、何をしにきたのだろう。

話し合いが無益に終わることは目に見えているし、脅しには脅しで返す氷室の性格もよく知っているはずなのに。

（ねえ、天、ゲームをしましょう）

足を停めた氷室は、弾かれたように屋敷の方を振り返った。

ゲーム？

これもまた、ゲームなのか？

まさか——君は、自分がいなくなった後の世界で、俺をゲームに巻き込むつもりだったのか？

しかしそうしてみれば、全てがクリアに見えてくる。

三条守も、向井志都も、仕組まれたゲームの駒だったとしたら？

氷室は半ば計画的に屋敷に連れ戻されたのだ。そうして三条が伝令としてやってきた。ゲームの「ヒント」と、そして失敗した時の「罰」を告げに。

——それが……日高さんだともいうのか、水南。

愕然とした氷室は、次の瞬間、奥歯を強く噛み締めていた。

——ふざけるな。死んでもなお、君は俺を愚弄するつもりか。

君は最後に、俺に何をさせたかったんだ？

いや、もうどうでもいい。

氷室は迷いを断ち切るように、首を横に振った。

もう関係ない。考える必要もない。何故ならそのゲームに、俺は、絶対に乗らないからだ。

日高さんは俺が守る。たとえ三条と刺し違えてでも。誓つてもいいが、それだけの覚悟は、今の三条にはない。

二度と、後藤の屋敷には戻らない——水南の懐には戻らない。しかし氷室の足は、迷うようにその場で止まった。

「……………」

では、どこに行けばいいのだろうか。

灰谷市だろうか。日高さんの側だろうか。

いや、多分どちらにも違ふ。

たとえそれが、水南の思惑通りであつたとしても、別れるには今が一番いいタイミングなのだ。

潮時——それが少しばかり早くきたただけだ。

彼女と未来を共に生きる選択は、自分にはないのだから。

胸の奥に暗くて深い空洞がある。それが何かわからないまま、氷室は再び歩き出した。

「もしもし？」

受話器から聞こえた声に、氷室はかすかな身震いを覚えた。

「もしもし？ 誰ですか？」

幼い声はげげんそうなものに変わり、そこに初めて大人の男の声が聞こえた。

「まさ、誰からだ」

「無言でんわ。切っちゃまっていい？」

氷室は、受話器を置いていた。

公園脇の公衆電話。静けさだけが氷室を再び包み込む。

動揺が、しばらく氷室を動けなくしていた。

この携帯の番号に、まさか子供がでてくるとは思ってもみなかった。

馬鹿な真似をした。この番号の主はおそろしく用心深い。公衆電話からかけられた無言電話を不審に思えば、すぐにでも番号を変えてしまっただろう。

でも仮に目的の人物が電話に出てくれたとして——俺は冷静に、今夜の用件を切り出せただろうか？

実は、お話があるんです。

僕が管理している不動産を、できればそちら様にお譲りしたいのですが。

白い息を吐いて歩きながら、氷室は苦い笑いを浮かべた。

無理だ。

そんな真似をするくらいなら、まだ濡れ衣を被せられて獄に入るほうがマシなくらいだ。

だったら俺は、そもそも何を求めて、あの番号にかけてしまったのだろうか？

(もしもし?)

(もしもし? 誰ですか?)

何を、求めて……………。

暗い闇が、自分の深いところにまで入り込んで、包み込む。

その闇の奥底で、あの夜の吹雪が荒れ狂っている。

小さな、弱々しい、傷だらけの子供が、やせ細った身体をま  
るめ、膝を抱くようにして泣いている。怖い、怖いとつぶやい  
て震えている。

もう何年も前から、氷室はその子供の正体を知っている。そ  
れは――

（もしかして、末端冷え性ですか？）

不意に、暖かなひだまりが、闇の中にあるかなきかの光を射  
した。

（いつも指が冷たいから……、でも手が冷たい人は、心があつ



たかいつていいですよね。氷室さんみてる、本当のことだと思えます)

——日高さん……。

小さな、けれど暖かな手が氷室の冷えた指をそつと包み込んでくれたような気がした。

その、ありえない錯覚に、氷室は少しだけ驚いて苦笑する。  
まいったな。

いつの間に君は、がちり鍵をかけていたはずの僕の心に住みつくようになったのだろう。

まるで、わずかな隙間からでも入り込んでくる、春の、優し

い風のように。

16

どこに行くあてもないまま、氷室は師走の町を歩き出した。  
ふと見上げた月は冬雲で濁っていて、なのに、やけに綺麗に見えた。

そしてまた、日高成美のことを考えている。

それだけで、胸が暖かなもので満たされるようだった。

——これを言えば、多分君は怒るだろうな。

君は僕の好みでもなければ、最初、特段の魅力を感じたわけでもない。

僕らの恋はそういう意味では、ほんの偶然、僕の些細なきまぐれから始まったものなのだ。

会議室しかない14階で、怪談みたいなすすり泣きを耳にしたのが端緒だった。

それが隣のフロアの新人職員だと解つても、まさか氷室は、そのどこか幼げな女性に、30を過ぎた自分が恋愛感情を抱くようになるとはこれっぽっちも思わなかった。

その幽霊と、ある夜偶然氷室は鉢合わせになる。

泣きはらした顔が案外可愛かったのと、下手な誤魔化しで逃げようとしたのが面白くて、つい声をかけてしまったというのが正解だ。

彼女の若さや、その年で市役所の頭脳と呼ばれる職場に配属されたこと、そして同性上司に抱く複雑でやっかいな感情にも興味を覚えた。

もつとはつきり言えば、日高成美が柏原明凜の部下だったから、氷室は彼女に関心を抱いた——と、言い換えてもいいかも知れない。

——これは、バレたら、完璧に逆鱗ものだな。

歩きながら氷室は笑いを嘔み殺した。

女性というのは不思議なもので、どう考えたって敵いもしない相手に、何故だか本気でライバル心を抱くようにできている。

日高成美にしてもそれは同じようで、どうも柏原女史と無意識に張り合っている節があるからだ。

——まあ、女性のカンというのは侮れない。確かに俺は、一時期度を超えて柏原さんに関心を持っていた時期があつたからな……。

そういった氷室の心の機微を、あるいは日高成美は敏感に読み取っていたのかもしれない。

ただそれは、恋心とは無縁のものだ。

柏原明凜を初めて見た時、氷室は一瞬ではあるが、自身の顔に動揺が走るのを誤魔化すことができなかつた。

似ている——水南に。

顔立ちはまるで違うが、醸し出す雰囲気がよく似ている。他者を冷然と見下し、自分の中に他人が入ることを硬く拒絶する、冷徹で傲慢な眼差しが。

氷室はすぐに柏原明凜の前歴を調べた。今にして思えば1人勝手な不安だったが、同じフロアで仕事上でも関わりがある。

なにかそこに浅からぬ因縁を感じたのだ。

こちらの弱みを握られる前に先手を打ってやろうという、官僚くさい思惑もあつたのかもしれない。

柏原明凜が、霞ヶ関でなんらかの問題を起こしたという話は、少なからず耳にしていた。それは、一体なんだつたのか。

出てきた情報は、じつにくだららないものだつた。

酒席で、上司を——しかも事務次官を拳で殴つた——男か。いや、男でも己の局のトップを殴つたりはしない。

しかもセクハラではない。友達の職業を馬鹿にされたため——案外浪花節、ということか。

面白い、と思つた。

もちろん、必要以上にお近づきにはなりたくないが、水南と同じ雰囲気を持つ女が、水南と真逆な性質を持っていることが限りなく愉快だった。ますます興味をかきたてられた。

が——近づこうにも、柏原明凜のガードは固く、同僚にさえ容易に心を開かない性質らしい。

極度の人嫌いか。もしくは敵がいる環境になれているか。

後者だな、と氷室は思った。

頭のいい人間にありがちな性質だが、他人の痛みにししばかり無頓着なところがあるから、男女問わず敵が多いのだろう。

頭がよすぎて、悪い人間が辿る思考回路が全く理解できない。



嫉妬、気後れ、劣等感、焦り、それに追隨しておこる足の引つ張り合い——彼女にはひとつも理解できないに違いない。それが周囲には、限りなく傲慢に見えるのだ。

さらに悪いことに、その誤解を解こうともしていない。それは間違ひなく彼女の欠点だと氷室は思う。まあ、欠点のひとつでもないときすがに可愛げがないが。

敵が多い——嫌われているし、憎まれてもいる。

が、柏原明凜の自己防衛意識の高さには、それ以上の何かがあるような気がした。

まるで何度も危険な目にあつてきたような——そんな印象さ

え窺えるほどだ。

そのくせ、そのガードを自らあつさり解いてしまう時がある。なげやり、というのでもない。気を抜いた、というのとも違う。

何かそこに、自身を罰してでもいるかのような潔さを感じるのは気のせいだろうか。

もちろん、その過去に立ち入るつもりは毛頭ない。口に出すつもりさえない。しかし以来柏原明凜は、氷室にとって少しばかり気がかりな存在になったのだ――

14階の幽霊は、その柏原明凜の部下で、少しばかりその上司を恨みに思っているようだった。

誤解なんだがな、と、氷室は思った。

少し目線を変えて話してみれば、柏原さんほどつきあいやすい人もない。

また、部下のことを案外真剣に考えてもいる。彼女の矜持と強さに基づいたひとりよがりの考えではあるが——なにしろ、柏原明凜は、笑いたいくらいの浪花節の人なのだ。氷の仮面を剥いだ本質のところでは。

少しだけ、柏原さんの手助けをしてみてもいいか。

柄にもなく、そんなおせっかい心が湧いてきた。

手助けといっても、彼女の代わりに落ち込んでいる部下を慰

め、仕事上の助言をしてやる程度の話だが。

初日、ぎこちなく心を閉ざしていた日高成美は、会話を重ねていく内に、少しずつ明るい笑顔を見せるようになった。

好意を持たれていることはほどなく判ったが、それは、ちよつとした誤算だった。

悪い気はしないが、少なくとも、柏原明凜は眉をひそめるだろう。なにしろ、彼女は氷室が妻帯していることを知っている。そして日高成美は、彼女の大切な部下なのだ。

——まあ、いいか。どうせいずれ、柏原さんが釘を刺す。それまでの、ちよつとした気晴らしだ。

どのみち日高さんは遊びには向かないタイプだ。それに今は、  
どうしたってそんな気にはなれない――

本当の誤算はそこからだった。

何故だか、その気晴らしは、思った以上に長く続いた。別に  
そうする必要もないのに、気づけば連日、氷室は日高成美を車  
に誘い、あえて2人の時間を持つようになった。

理由は――よくわからない。ちよつとした遊び心、ゲーム感  
覚もあつたのかもしれない。

ただそれだけではない。説明しがたい何かがあつたことも、  
また確かだ。

氷室がそんな態度をとるからだろうが、彼女の好意は毎日に強くなるばかりだった。

まるで、触れれば、すぐに落ちる果実のようで——氷室は初めてこの展開に戸惑いを覚え、うっかり手が出そうな自分を戒めた。

双方の立場を考えれば、それは危険すぎる状況である。

そんなつもりはなかった。

これ以上は、まずい。

しかしそう思った翌日には、自分から彼女を誘い、向こうがためらう素振りを見せれば、逃げ場をなくして追い詰めてしま

っている。

柏原明凜にランチに誘われたのは、そんな自分の態度の不思議をもてあましている時だった。

（もし日高とつきあうつもりなら、東京のご家族とは、法的にけりをつけたほうかよいのではないですか）

十分予想できた警告なのに、いざ言葉にされてみると、いきなり袈裟懸けに斬られたような気分だった。

（僭越なことを申しあげようで気は進みませんが——日高は将来幹部候補生と目される優秀な職員で、この灰谷市役所は、現市長の意向もあって、女性の不倫には大変厳しい処置が取ら

れると聞いております。余計な口出しとは思いましたが)

不倫――

なんとも馬鹿げた言葉だが、法的にはそういう言葉が、確かに2人にあてはまる。

柏原さん、僕の法的な配偶者は、すでに別の男と世帯を持ち、しかも年内には確実に死ぬんです。いまさら不倫だなんだと騒ぐような関係ではないんですよ。

しかし、同時に氷室は思った。

不倫。

自分が今まで抑制し続けてきたのは、そんなもののためだつ



たのだろうか。

世間にそう評価されるのが怖いから。——馬鹿馬鹿しい。

実際は、そうだった。自分自身のためではなく、若い日高成美の将来を慮ったゆえに、不用意に手を出すまいと決めていた。が、不倫という言葉をつきつけられた途端、そんなものに縛られている自分が馬鹿馬鹿しくなった。いまだ水南に縛られている。多分そんな風に感じたのだ。

その夜、日高成美に最後通告とばかりにぶつけられた感情を、氷室は上手く交わすことができなかった。

キスをした。

自分でも驚くほど——真面目に、真剣なキスをした。

もう、戻れないな、とその時思った。

こうなった以上、俺はこの子と、恋をはじめることになるの  
だろう。

だとしたら、大切にしてやらないと——いや、慎重に進めて  
いかないと、まずい。

柏原さんの危惧したとおり、いや、最初から自分でも気にし  
ていたとおり、この恋愛が新人職員にもたらすデメリットは計  
り知れないからだ。

そして俺には、この子の将来を——役所を辞めた先までをも、

背負っていく覚悟はない。

そんな風に、おそろしく用心深くはじめた恋は、すぐに様々な出来事によつてかき乱され、想定していたものとは別の方向に走りだしてしまった。

思っていたより早かった水南の死も、想定外の出来事のひとつである。

そして、あの破滅的な夜が訪れた。

あの夜——今思つても、胸が軋むほど苦しくなるあの夜、行政管理課の書庫で、氷室が追い詰めたのは日高成美ではなかった。

水南だった。あの夜氷室は、成美を通して水南を見ていた。

水南への暴力的な感情だけが暴走して、我に返った時には、大切にしようと決めた人が歯を食いしばって泣いていたのだ……

終わつたな、と思つた。

結局俺は、水南の呪縛からは逃げられない、そうも思つた。

セックスの際、相手の女性の嫌がる様に酔うような興奮を覚えるのは、間違いなく水南との関係が原因だ。

幼少期から支配され続けてきた女に、同じ真似をする快感。傲慢だった女が、泣いて懇願する様を冷酷に見下ろす快感。

その時の記憶が、まるで麻薬のように脳髓にまで染み込んで、今も氷室を病的に支配しているのだ。

日高成美にも、その夜の暴走の理由は分かっていたはずだった。

自分を弄ぶ男が別の女を見ていたことに、本能的に気がついた。だからこそ、ただ悔しくて泣いたのだ。

なのに、それでも彼女は、氷室を好きだと言ってくれた。

甚だひとりよがりの解釈だが、身を挺して、氷室の立場を守ろうとまでしてくれた。

その時、はじめてやり直せるだろうか、と思った。

俺はこの人と——もう一度始めから、ごく普通の恋をして、暖かな家庭を築くことができるだろうか、と。

無理だということは、つきあいはじめてほどなく判った。

俗な言葉でいえば、2人の関係は幸福だった。彼女への思いと独占欲は、日増しに強くなるばかりだった。しかし、同時に、氷室の内にある水南の影も、ますます色濃くなっていたのだ。彼女を抱いた後、きまつて水南の夢を見ると気づいたのは、いつだったろう。

悪夢に浮かされて目覚めた後、まるで子どものように、隣で眠る人の寝顔を確認したことが、一体何度あったろう。

やがて氷室は、眠りそのものを拒否するようになった。

なのに夜の静けさは、否応なしに水南の思い出を連れてくる。過去に——二度と戻りたくない闇に、氷室を掴んでひきずりこむ。

昼間が幸福であればあるほど、その落差は激しかった。まるで氷室を責めさいなむように、水南は一晩中、氷室の側から離れないのだ。

そんな氷室の内面に、日高成美は何度も入ってこようとした。救いの手を伸ばしてくれようとした。

でも、受け入れることはできなかつた——

氷室は白い息を吐き、唇を軽く噛み締めた。

そうだ、水南の言うように、俺はただ怖かったのだ。

怖かった。

君を、今以上に好きになることが。

いずれ、僕の全てを打ち明けてしまいたくなるほど好きになつて——そうして、僕と水南の記憶の中に、君が入り込んでくることが。

それだけは……絶対に耐えられないと思つたのだ。

ふ、と唇から苦い笑いが漏れた。

だつたらさつさと別れればいいのに、いったい何を今までた



めらっていたのか。

「多分だが、日高成美を手放してしまえば、水南の亡霊からも開放される。それが判っているのに、何故。」

日高さん。

君を前にした時の僕の思考パターンは——まったくもって、謎だ。

「……………」

氷室は月を見上げていた。

胸の奥は依然として一部が欠けているように寂しいのに、不思議と清々しい気分だった。

知らなかったな。

どんな汚い場所も、こんな綺麗な月を頭上に抱いている。

その光に気づくと気づかないのでは、世界の見え方がまるで違う。

はじめて素直な感情が、胸の底から溢れでた。

——日高さん。

僕は、今、君に会いたい。

どうしようもなく、君が恋しい。君のぬくもりに触れていた  
い。

ここまでできてようやくやく判った。

出会いから今日に至る、君と僕の謎の全てが。

それは、極めて単純な答えだ。

僕は、君に恋をしている。

今までの何もかもを、失つてもいいと思うくらいに。

「あの、ここでいいですから、もう」

「なんだよ。遠慮すんなよ。運転手くらいしてやるよ」

いやー……それはどうだろう。

成美はいかにも迷惑げに、運転席の紀里谷を見上げた。

一夜明けた翌日——午後。

雪は、朝のうちにはやんだらしく、昼前には道路の凍結もほぼ問題ないレベルにまで落ち着いた。寒さは厳しいが、太陽の日差しが目に眩しい。よく晴れた冬晴れの大晦日である。

「言っとくけどな。俺たちはもう、戻れない道を進んでるんだからな」

「はあ」

できれば1人で進みたいし、とりあえずここで別れたい。

「このことが天さんにバレたら……俺はもう、灰谷市にはいら

れない。そこんところ、お前もよく解つてんだらうな」

「わかつてますよ。私だって、それは真剣に怖いんです」

成美は、唇を尖らせて紀里谷を恨みがましく見上げた。

「だいたい、紀里谷さんが演技しすぎなんですよ」

「なんだって?」

「演技しすぎ。あることないことベラベラベラベラ……」

「なつ、それはお前が、そうしろつて言つたから」

「言いましたよ。でも、隣でただ黙つて頷くだけでいいつて。

私、こうも言いましたよね。それをまあ、学生時代からのつきあいだとか、一緒に住んでるみたいなことまで。みんな、すつ

かり信じ込んでやって、今更嘘とか、もう絶対に言えないじゃないですか」

「知るかよ。そのくらいお前の才覚で始末つけろってんだ」  
うそぶいて、紀里谷はむつとした目を前に向ける。

本当に、とんでもないことまで言ってくれたものだ。なにげに同棲まで匂わせて——さすがにその時は、父親の顔が見られなかった。

しかも、来年中には挙式とか、ああ本当にこれ、どう落とし前をつければいいんだろう。

「おい、着いたぞ」

その紀里谷が、そっけなく言つて車を停めた。

「あ、すみません」

狭い駐車場のすぐ手前には、小さな駅。

野槌（のづち）駅だ。

プラットホーム横には、みるからに寂しい外観の駅舎がぽつんと建っている。

雰囲気は似てるかも、と成美は思った。

四角いコンクリート屋根の感じが、なんとなくだけど記憶にある情景と近い。

でも駅前つてこんな感じだったっけ。小さいながらも商店街

があつて、ロータリーももつと広がったような……。

「どう？」

「え、ああ、はい。まあ、ここなんじやないかと思ひますけど……」

とはいえ、目の前の光景からは、なにひとつ過去の出来事が浮かんでこない。

実際に駅に行つてみれば思ひ出せる。根拠もなくそんな自信があつたのだが、それが頼りなく揺らいでいくようだ。

「思ひますけどつて、なんだよ、それ。お前のおふくろさんが駅名を憶えてくれたんだから、この駅で間違ひないんだろ？」



不審げに紀里谷が眉を寄せる。

「お前も昨日は、ああ、あの駅！ みたいな感じで相槌打ってたじゃん」

まあ、それはそうなんですけど。

（あれは……成美が7歳の、丁度今時分の頃ですかね。生憎私は、長期研修で東京におりまして……、家内が1人で対応したものですから、詳しいことは分からないんですが）

成美の生みの母が何をして、今どうしているか。その点に関して、腹をくくったように雄弁に語ってくれた芳雄だったが、雪の日の思い出に話が及ぶと、ひどく言いにくそうな口調にな

った。

あとを継いだのは、その芳雄よりもさらに表情が冴えない美和である。

「あの日、朝起きると、居間に置き手紙があつたんです。陽子さんの筆跡で、成美をつれていきますつて。……慌てて家中探しても、成美はどこにもいませんでした。お気に入りのリュックも、靴もなくなつていて、……陽子さんと出ていったんだな、と思いました」

「警察には、届けられたんですか」

成美にかわつて質問をしたのは、もつぱら紀里谷だった。

「いえ、警察には……、陽子さんは、成美を生んだ人ですし、大きな騒ぎになつてはいけないと思ひまして」

「けれど、親権はお2人にあつたんでしよう？　立派な誘拐ですよ、それは」

そこは、さすが弁護士、というところなのだろうか。美和がいやに神妙に言葉を選んでいたのは、軽い被告人気分を味わっていたのかもしれない。

もちろん成美は、そんな出過ぎた横槍をいれた紀里谷を、かなり鋭く肘でつついた。

「警察には、私が知らせるな、といったんです」

苦い目で口を挟んだのは芳雄だった。

「陽子は、さきほども言いましたが、当時は執行猶予中で……正直、身内を庇う気持ちが大きかったというのもあります。結局、成美は無事に帰って来ましたが、これ以上話を大きくしても、成美のためにならないな、と」

美和が気を撮り直したように続けた。

「その日は大雪で……一日中、なににもできずに、陽子さんからの連絡を待っていたように思います。……連絡は、暗くなつてからありました。でもそれは、陽子さんからじゃなく、もう名前も忘れてしまったんですけど、駅の人からだったんです」

駅の人。

成美と紀里谷は思わず顔を見合わせていた。

「おたくのお子さんが迷子になってるので、引取りにきてくれないか、という電話で……どうということになっていいのか、もう、わけがわからなくて。でもどうやら、成美は、その日、1人で野槌駅にいたようなんです。朝からずっと」  
すぐに美和は車を出そうとしたらしいが、とにかく、その夜は吹雪がものすごくて、とても3駅も離れた場所まで、車を走らせることはできなかつたという。

「困り果てて野槌駅に電話を入れたら、一晩くらいなら駅にお

泊めますよって、駅の方が親切に仰られて……明け方、雪が止んだのを見計らって車で迎えにいきました。成美はひとりきりで、何があったの、と問いただしても何も。……陽子さんが迎えにきたということ以外、何一つ喋りませんでした」

「じゃあ成美さんは、実のお母さんに連れられて家を出て、なのに野槌駅で一人で降りた、と」

紀里谷が確認するように問うと、美和は困惑したように首をかしげた。

「……そういうことになるんでしょうか。成美と陽子さんがどうして野槌駅で別れたか、ということになると、私にはさっぱり

り……」

「実は陽子とは、それきり音信不通になってしまったんです。後で知ったことですが、中国に……男と一緒に、逃げていたよ。うで。会えたのはそれから7年もたってから。陽子が、逮捕された時でしたからね」

芳雄が苦い顔で話を継いだ。

「ご承知のように、逮捕された理由が理由でしたからね。当時のことを問いただしても、さっぱりです。結局何があったか、誰も判らず終いだったということなんです」

美和は、不安げな目を成美に向けた。

「当時の駅員さんに会えたとしても……どうなのかしら。15年も前のことだから、当然転勤になっっているだろうし。だいたいお母さん、もうその人の名前も顔も憶えてないの。……その時だって成美のことを単なる迷子だと思っっていたくらいだから、詳しい事情は、ご存知ないんじゃないかしら」

「なんか、ちよつとおかしいんだよな」

紀里谷の声が、成美を現実に引き戻した。

「おかしいって？」

車のドアに手をかけていた成美は、運転席の紀里谷を振り返る。



「いくら生みの親っていつても、前科持ちの犯罪者が——ああ、ごめん」

とはいえ紀里谷はさほど悪びれた風ではなかった。

「7歳の子供を家から黙って連れ出したんだろ。もうちよつと大騒ぎしてもよかったような気がしてさ。いかにも心配性そうなのに、そこはおおらかだったんだな。お前のおふくろ」

「まあ、……色々、気をつかうところもあつたんじゃないでしょうか」

歯切れ悪く成美は答えた。

執行猶予中の人間が、そこでさらに誘拐罪に問われるような

ことになればどうなるか。

それが身内なだけに、芳雄も美和も、悩んだに違いない。

「それだけじゃなく、なーんか全体的な印象がさ」

紀里谷は面倒そうに頭をかいた。

「ま、いいや。俺も被疑者とばっか話してっから、どうしても

疑い深くなるのかな。行けよ。このまま車で待つてるから」

弁護士って、被疑者を信じるのが仕事じゃないんですか。

そんな厭味がうっかり口から出そうになったが、そこは堪えて、頷いた。

まあ、ちよつとはいい人なのかな。紀里谷さんも。

案外面倒見がいいというか、人情味があるというか。油断したら何をされるかわからないから、警戒は最大限のままキープしているけれど。

その紀里谷は、先ほどからちよいちよい携帯電話をのぞきこんでいるようだった。ソ○トバンクだからつながりにくいといっていたけれど、さすがにこの辺りまで出てくると通信状態は快適だろう。

「じゃ、行つてきます。話が長くなるようなら電話しますから、その時は先に帰ってください」

それだけ言いおいて、成美は紀里谷の車を降りた。

冷えた駅構内は、ひっそりと静まり返っていた。

小さな待合スペースには、賞味期限の切れた漫画雑誌が詰めこまれている。自販機だけが、やたらと多い。

時刻表が貼りだされた壁に、申し訳程度の小さな覗き窓があつて、その奥に紺の制服を着た駅員の姿が見えた。

記憶にある駅の待合は、もう少し開けた場所にあつたような気がする。

駅前には、わりと広いロータリーがあつて、商店街みたいな

ものも間違いない。なのに、この駅の周辺には田んぼと住宅地しかない。成美の記憶にある駅とは、少し違うような気がする――

「あの、すみません。ちよつといいですか」

コンコンと、プラスチックの覗き窓をノックする。

「はい」と、落ち着いた男の声がして、ふしくれだった手がプラスチックの窓に近づいてきた。

せめて顔が見える程度にこの透明な板を大きくすればいいのに――相手の顔が見えないのでは、なんとも話がしづらくて困る。

「お待たせしました。定期券ですか」

「いえ、あの……この沿線の駅員さんは、みなさん同じ会社の方なんですよね」

成美が鉄道会社の名前を言うと、ええ、そうですが……、と訝しげに老域に入ったらしい駅員が答えた。

「実は、昔お世話になった駅員さんを探しているんですけど」  
成美がかいつまんで経緯を説明すると、案の定「そんな古い話じゃあ、記録も残ってないですよ」と迷惑気な声が返された。

「だいたい駅員っていつても、転勤もあれば、転属もありますからね。15年も前にここにいた駅員なんて、あんだ、みな散り

散りに、色んなところに飛ばされてますよ」

それでも、沿線にある駅のどこかにいるのではないか。と成美は重ねて訊いてみたが、それには、困ったような笑いが返された。

「だから、転属もあるんですよ。本社で事務やつてる場合もあれば、車掌になる場合もありますし。せめて名前でも判れば、なんとかなるかもしれないですがねえ」

年が明けたら本社に直接照会してみてくれないか、それだけ言うと、駅員は奥に引っ込んでしまった。

本当に——さほど大きくはない私鉄だが、対応は公務員と似

たりよつたりだ。せめて名簿のひとつでも引つ張りだしてくれればいいのに。

——空振りかあ……。まあ、やつぱり、無謀だったよね。

ため息をつきながら、成美は駅舎を後にした。

結論は新年に持ち越した。まあ、本社に照会したところで、個人情報保護がどうこう言われて門前払いされそうな気がするが。

——あ……。

空はいつの間にか灰色に陰り、白いものがちらつき始めている。



やっぱり、降ってきた。

慌てて紀里谷が車を停めた方を振り返った。その時だった。

ロータリーに、滑りこむようにして入ってきたタクシーが停車する。

すぐに後部座席の扉が開き、中から、黒のトレンチコートを着た長身の男が降りてきた。

バーバリー、氷室が愛用しているものと一緒のタイプだ。そしてマフラーも一緒——え、なんだかすごくくない？

クリスマスに成美がプレゼントした、イタリア製のマフラーと同タイプの同デザイン。値段は、レプリカでなければ2万を

超える。

いずれにしても、こんな場所でそんなに決め込まなくても、とつつこみを入れたくなるくらい、ド田舎には不釣り合いな男である。

その人はかがみこみ、タクシーの運転手に道でも尋ねているようだった。

氷室さんに似てるな、と思いつつながら、成美はつま先立ちになつて、紀里谷の車を探した。

普通タイヤみたいだし、早く帰してあげないと、また昨夜みたいになりかねない。

急いで歩き出すと、タクシーに背を向けたバーバリーが、丁度顔をあげてこちらに歩いてくるところだった。

わー、顔が小さい。手足も長いし芸能人みたい。でも、なんだか性格悪くて不機嫌そう。服が同じせいかな。そんな冷たい顔つきまで、氷室さんと似て……。

成美は凍りついていた。まさに、文字通り、凍りついた。嘘、でしょ。

これ、夢でしょ、マジで。

そうだ、私は紀里谷さんの車の中でうたた寝して、そして今に至つたに違いない。

だつていくらなんでも——今までも似たようなことは何度かあつたけど——信じられない。

数メートル先で、相手もまた凍りついていた。

驚きというより、驚愕したように目を見開き、それがみるみる険しくなる。

「やあ」

が、最初に平静を取り戻したのは氷室の方だった。

「これはこれは——まさか、こんな場所で、君に会えるとはね」  
咄嗟に言葉が出てこない。

いや、この状況で、そんな普通に挨拶されても。

だって、だって——じゃあこれは、本当に現実？

「えと……このあたりに、……ご親戚でも？」

なのに成美は、ぎこちなく乾いた声で、ムードもへつたくれもないことを言っていた。いや、まだこの現実に、気持ちがついていかないのだ。

氷室は唇だけで微笑んだ。気のせいだろうか、ちよつと嫌な予感を覚えさせる笑い方だ。

「ちよつと、友人を探しにね」

——友人？

「まさか、その場に君がいるとは、想像の範疇外だったな。こ

「これは、喜んでいいのか、それとも怒るべきなのか」

その時には成美は、モールス信号でも赤外線でもなんでもいい、なんとかして声を出さずに、この危機を紀里谷に伝えてやりたいと思っていた。

氷室が紀里谷を追ってきた。なぜだか知らないが、直感でそれが判ったからだ。

「あ、あのですね。氷室さん」

これには深くて——少しばかり深刻なわけが。

「おい、何やってんだよ」

最悪の事態は、まだ続く。成美が説明しようとしたまさにそ

の時、当の紀里谷が、苛立った風に車から降りてきたのだ。

「また雪降ってきたじゃねえか。早く用件すませて——うわあ  
あああつ」

その恐怖と驚きはよく判る。

つんのめるようにして逃げようとした紀里谷は、そのまま膝  
を折って、尻もちをついた。

それでもなお、這うようにして、後ずさる。

氷室はそんな紀里谷を、たっぷり1分は無言で見下ろしてい  
たようだった。

「昔の友人と恋人に、僕は今、ひどく傷つく対応をされたわけ

ですが……これは、示し合わせてのことですか？」

ぶんぶんと成美は首を横におもいつきり振り、紀里谷はかくつかくつと同じように横に首を動かした。

「日高さん」

紀里谷を見たまま、氷室は言った。

「は——はい」

「車に戻っておいてください。少し、紀里谷には聞きたいことがあるので」

この空気感。前と全く一緒なんですけど。

氷室がものすごく怒っていた、ストーカー事件の時と。



しかも車つて、所有者はそこにいる紀里谷さん……。

「天さんっ、これにはわけがっ。深刻なわけがっ」

「まあ、そのあたりは、ゆっくりと」

につこりと笑った氷室が、紀里谷の腕を掴んで立たせた。

「向こうで、聞かせてもらいましょうか」

怖い。怖い、ものすごく怖い。紀里谷が本気で怯えているのが、目色で成美にも伝わってくる。

いつそ、成美も逃げ出してしまいたかった。紀里谷が上手く言い逃れてくれればいいが、そうでなければ——いや、でも。

氷室さんが、来てくれた。

信じられない。夢みたいだ。でも、夢じゃない。

氷室さんが、この街に来てくれた……。

19

待ち時間は、前に比べると長かった。

15分から20分あたり、成美は一人で、ソワソワハラハラ、何をしても落ち着かない気持で、氷室と紀里谷が戻るのを車内で待った。

「すみません。お待たせしました」

やがて、どこか疲れた顔で、氷室1人が戻ってくる。彼が運転席に座り、当然のようにキーに指をかけたので、成美は驚いて訊いていた。

「あの、紀里谷さんは？」

「電車で帰らせましたよ。彼がいた方が都合がよかった？」

いえ、その……。

口ごもっている、不意にこちらを向いた氷室に腕を引かれ、抱きしめられた。

コートもマフラーも、氷のように冷えている。髪も、そして触れ合った頬も鼻も。

——氷室さん……。

何故かそれが愛おしくなつて、気づけば成美も、カいっばい彼の背を抱きしめていた。

もう怒られたつて、なんだつていい。

氷室さんが来てくれた。

こうやって私を抱きしめてくれた。

なにひとつ言葉もないまま、冷えた唇が重ねられる。すぐにそれは熱を帯び、深く、密度を増していく。

背中に回された手が荒々しく動く。何度か唇が離れ、問うように彼を見上げてても氷室は一言も喋らない。そしてキス。

際限なく、成美の唇を開かせては自分の熱を押し入れてくる。

怒っているのは、よく判った。

それも、多分、とんでもないほど。

なのに、少しも怖くないどころか、彼がますます愛しく思えるのは何故だろう。

そう、この人は、いつも何かにおびえている。今も、それがよく判るからだ。

やがて氷室は唇を離して顔をあげ、成美を抱きしめ、額を押し当てるように目を合わせた。

「どこかに、泊まる？」

頷いた。いつにない性急な口調に胸がざわめいて熱くなる。

親への言い訳は——この際、後で考えるしかない。

が、ただ恋に溺れ、無為に今日という日を2人きりの時間に費やすのは……過去を説明をしてくれた両親に対しても……。

「紀里谷に、おおまかな話は聞きましたよ」

切り出し方が判らない成美が眉を寄せていると、氷室がコートを脱ぎながら、初めて彼らしい、落ち着いた口調で言った。

ドキンツと、胸の鼓動が跳ね上がる。

「あの、どの辺りをお聞きになりました？ 結構長いというか、

話せば複雑な話ですて」

「君と、人探しをしている最中だったと」

ん？ まあ人探しというか、なんというか。

その上に「初恋の」がつくことを、まさか言っていないよね。

紀里谷さん。

目をあちこちに泳がせる成美を見下ろし、静かな口調で氷室は言った。

「僕では、探偵の相棒にはなれませんか」

「……………」

え？

「少なくとも紀里谷よりは、人探しは上手いつもりですけどね」

——…。

迷いが、多分顔に出ていた。

一体紀里谷さんは、何を彼に話したんだろう。私を産んだ人の過去。できることなら知られたくない。でもそれを話さずに、彼に全てを理解してもらえらるだろうか。

「あの、私……」

駅員さんを探している、というよりは。

多分、お母さんと別れてしまった日のことを、思い出そうと  
しているんです。

その日に何があったのか。



あの日、なくしてしまつた記憶を、私——探そうとしているんです。

言葉を探す成美を、氷室は黙つて見つめているようだった。が、不意に彼は冷やややかな目で口を開いた。

「紀里谷に似ているそうですね」

ドキッ。

「お正月休みを利用して初恋の人探しですか。君がそんなに口マンチツクな女性とは知りませんでしたよ。しかも紀里谷に似た初恋の人。それはそれは、昔の君は随分と趣味がよかつたんですね」

「い、いえいえ、あのですね、それはですね」

半ば蒼白になりながら、成美は懸命にこの場を言い逃れる言葉を探そうとした。

あーっ、もうっ、やっぱり紀里谷さんなんか信じるんじやなかった。

よく判った。紀里谷に打ち明けた秘密は、そのまま氷室にダダ漏れになるのだ。これからは肝に命じて置かなければ。

「わ、私の理想は氷室さんです」

「いいですよ。そんなとってつけたように理想にしてもらわなくても」

氷室は冷ややかに言い捨てたが、その横顔は言葉ほど不機嫌そうではなかった。

「とりあえず泊まる場所を探しましょう。日が暮れたら道がわかりづらくなる」

「は、はい」

とりあえず言い訳は、車がホテルに着くまでに考えるとしよう。

心中胸をなでおろした成美は、そつと横目で、車をバックさせている氷室を見上げた。

なんか、いつも以上にかっこよくない？

光沢のあるグレーのシャツに黒の上着。暗い色合いが彼の美貌をいつそう引き立てているようだ。

——氷室さんが、来てくれた。

今回はピンチでもなんでもないけど、氷室さんが来てくれた。見上げた空からは、雪が静かに舞い降りている。

夢みたいだ。

今年最後の日に、大好きな人と一緒にいられる。絶対に叶わないと思っていた夢が、こんな風に簡単に叶うなんて……。

「あ、紅白始まつてる。テレビつけましようか」  
ふと時計を見た成美が腰を浮かせようとすると、

「つけないで」

寝そべったままの氷室の声が、素早くそれを遮った。

「紅白、見ない人ですか」

「君の質問を先読みして答えれば、裏番組も一切、ね」

そりやまあ、確かに、料理番組みたり、お笑いみたりしてる

氷室さんは想像できないけど。

少しばかり不満を覚えつつ、成美は座椅子に座りなおして湯のみを持ち上げた。

氷室はすでに用意された布団の一組で腕枕をしたまま、さきほどからずっと無言で天井を見上げている。

「大晦日は、いつも何をされてるんですか」

まさか、毎年寝転んで天井とにらめっこしているわけではないだろうに。

「読書ですよ」

あつさり氷室は答え、それきり再び無言になる。

——どうしたんだろう。

どうも氷室さんの様子がおかしい。

そりや今夜は、出会いからして少しどころではなくおかしいし、彼が不機嫌になる要素は山のようにあるんだけど。

それでも、2人で泊まろうと喋ってくれたのは氷室だし、頼んでもいないのに、成美の初恋の人探しを手伝ってくれたのも、氷室自身の意思である。

成美にしても、聞きたいことは沢山ある。

いつたいどうして、氷室が成美の前に現れたのか、もとい、紀里谷を追いかけてきたか。

成美が原因とは考えにくい。何故なら成美と鉢合わせになった時、氷室は——そんな彼の顔を見たのは実は初めてだったのだが——相当衝撃を受けていたようだからだ。

が、そんなことも、氷室は一切口にする気はないようだった。

「……もしかして、怒ってます?」

成美は観念して、おそろおそろ聞いた。

今日、車で1時間ほど走った氷室は、古い観光旅館に宿をとってくれた。ひなびた安っぽい和室はどうみても氷室の雰囲気には似合わないが、成美は単純に嬉しかった。

今夜、ここで、2人きりで年越しをするのである。



氷室もその時には、こうも陰鬱な感じではなかった。時々考  
えこむような素振りはみせたが、成美が話しかければ微笑を返  
す程度には機嫌がよかった。それが――

宿で軽く食事をとった後、氷室は「ちよつと出てきます」と  
いつて部屋を出て行った。

そうして、ものの1時間で戻つてくると、「判りましたよ。折  
よく地元に帰省しているそうなので、明日、本人と会う約束を  
とりつけてきました」と言ってくれたのだ。

「なんの話ですか？」

最初、ぽかんとして成美は訊いた。

「だから君の初恋の人に。明日会う約束をとりつけてきたと言っているんですよ」

まさに急転直下である。

つい1時間前まで名前さえ判らなかつたのに、明日会う？

つまり氷室さんは、その人の名前はおろか電話番号すら調べあげ、そうして電話までしてくれただってこと？ たったの1時間足らずで？

いくら氷室のやることでも、今度ばかりは信じられない。一体どんな魔法を使ったのか。

けれどそれを問いただすことはできなかつた。その時の氷室

の表情が、明らかに精彩を欠いていたからだ。

精彩を欠くというより、表情はひどく強張り、無理に口を開いているという感じでした。あつた。

そしてそれきり黙りこみ、1人でさつさと温泉に入つて戻つてくると、そのまま布団に入り、成美に「来い」とも「先に寝ます」とも言わないまま、黙つて天井を睨みつけているのである。

こんな気まずい空気では、せめて賑やかに紅白でも見たいものだ。

「怒ってるって？」

が、返ってきた氷室の声は、思いの外いつもどおりだった。

「明日君が、紀里谷似の初恋の人に会うことに？」

彼らしい軽い皮肉に満ちた口調に、成美はようやくほつとした。

「だって、ずっと不機嫌そうだし。今だって、なんだか」

「君と同じ部屋に泊まっているのに、何もしようとしないから？」

「そ、そういうことじゃないですよっ」

まあ、それも確かに不安なんだけど。

「おいで」

氷室が笑って手招きしてくれたので、成美は少し頬をふくらませながら、隣に滑りこむように布団に入った。

すぐに頭の下に腕が回され、抱き寄せられる。彼の大きさとぬくもりに包まれる。

いつもより、彼の匂いを強く感じる。温泉に入って、肌に直接浴衣を着ているせいだろうか。

こうしていると、すごく実感できる。

ひとつ上の場所で外界を冷やややかに眺めているような氷室が、実は、大きな身体と、優しい肌の匂いを持つ、ただの、1人の男だと。

この優しい身体の中には、強い心も弱い心も同じように閉じ込められている。今は判る。彼は畏れを知らない悪魔ではない。そうみせているだけで、本当はひどく寂しがり屋で……傷つきやすい人なのだ。

「どうしました」

「ん、あつたかいと思つて」

成美はぎゅっと氷室の背を抱くと、鼻先を、彼の胸元に摺り寄せた。

氷室が微かに笑う気配がする。

「外が寒いから、僕のような冷血人間の体温でも暖かく感じる

んですかね」

そんなことないですよ。

本当のことを言うと、氷室さんは、最近、少しだけあつたか  
いんです。

まあ、確かに季節が冬に入ったせいもあるかもしれませんが。  
そのまま氷室の視線は天井に戻され、成美も彼と同じような  
姿勢を取った。

沈黙——でも今は、なんとなくそれが心地いい。

成美は氷室が何か話してくれるのを待っていたが、もしかす  
ると先に話すのは自分ではないかとふと思った。

「一体、どんな魔法を使ったんですか？」

「ん？」

「よくあれだけの情報で、名前もわからなかった人と連絡までとれたな、と思つて」

氷室の横顔が、わずかに苦笑するのがわかった。

ただしそれは、暖かな苦笑ではない。この程度のことともわからないのか、みたいな冷めた苦笑だ。

「7歳の君が、大雪の日に、1人で駅に泊まった。それだけ判れば、年月日程度は簡単に割り出せるでしょう」

覚悟はしていたが、それだけで紀里谷が持ちうる情報の大半



が、氷室に流れたことがうかがい知れた。

もし氷室が怒っているとすれば、そのことを成美自身の口から打ち明けていないことにあるのかもしれない。

腹、括んなきやいけないな。

成美は小さく息を吐いた。

「まあ、確かにそれで年月までは分かりそうな気がしますけど、日にちまでは無理じゃないですか」

成美にしても、正確な日付までは聞いていない。成美自身が覚えていないというだけでなく、美和も芳雄も、だいたい1月の終わりくらい、という程度の記憶しかないのだ。

成美の反論に、天井を見上げたままの氷室は、淡々と答えた。

「まずは、逆算して年が判る。しかもその日は、車が出せない程度の大雪だった。そんな日は、そう何度もあるものではないのではないですか」

「……………」

まさに、ぐうの音も出ないというやつだ。

「後は、その時期このあたりの駅に赴任していた駅員を、しらみ潰しに調べただけですよ。あつけないほど簡単な作業でした」

「そ、そこが一番大変だと思うんですけど、電話番号まで一体どうやって調べたんです？」

「まあ、方法は色々ありますよ。君が知らなくてもいい方法がね」

たしかにそれは、聞かない方がよさそうだ。

「……ありがとうございます。それで明日、その駅員さんと野槌駅でお会いできるんですよね」

ちら、と氷室が視線だけで成美を見た。

「野槌駅ではないですよ」

え？

「君が泊まった駅というのは、野槌駅じゃない」

え………？

「そのひとつ前の、安治谷駅です。きっと君のお母さんは……  
思い違いをしていたんでしょね」

21

安治谷駅。

あじがや駅。

眉をひそめる成美を横目で見てから、氷室は続けた。

「……古い話だから、お母さんも記憶が混同していたんじゃないですか。たった一駅違いですから、大した差はありませんし」

記憶違い——

何故だか、胸が重苦しくなるような感覚に見舞われ、成美は視線を伏せていた。

なんだろう、この感じ。なんだかすごく嫌なことを思い出しそうなの、この感じ。

「この界隈の駅を虱潰しに調べたのが幸運でしたね。というより、20代の駅員はその人物しかいなかったんです。まさか7歳の君が、4、50代の中年に一目惚れするとも思えなくて」

氷室のその言い方に、ようやく成美は少しだけ笑っていた。

「さすがは氷室さんですね。もう、すごいとしか言いようがない

いです」

「以前も言ったと思いますが、探し物は頭でするものなんです。間違っても無駄に足を使うべきじゃない」

今のは明らかに嫌味だろうが、まあ、今日だけはふくれるのはよしておこう。

少なくとも紀里谷と2人では、永久にその人に辿りつけなかっただろうから。

樋口直人（ひぐちなおと）

それが、初恋の人の名前だった。

不思議だった。名前を氷室の口から聞いた途端、それまで夢

か幻でしかなかった人が、にわかには現実味を帯びてくる。

「ついでに聞いておきましたが、残念なことに、既婚者だそうですねよ」

「べ、別に残念じゃないですよ、失礼な」

「ふうん」

氷室は冷めた目を天井に向ける。

「少し、電話で話しましたが、当時のことはよく覚えているそうですね。駅に女の子を泊めるなんて、後にも先にもそんな経験は初めてだったそうで」

「……………」

「さすがにいきなり会いたいと申し入れたら、驚かれましたがね。……まあ、地元に帰省している今しかチャンスはないだろうと思っただので」

そうですよね。と成美はいい、ありがとうございます、と改めて礼を言った。

もしかすると、もっと別の話も、樋口の口から出たのかもしれない。

が、それは、やはり成美からは確認できなかつた。

まだ、自身の口から氷室には何も打ち明けていないのだ。

もしかすると、氷室は、今まで自分が欺かれていたと思つた



のかもしれない。

成美にしてみれば別に必要がないから言わなかったただけなのだが、自分が養女だということを、一言も告げずに今日まできた。

それだけじゃない。行方不明だとばかり思っていた実母は今

紀里谷は、そこまで氷室に白状してしまったのだろうか。

「……最初は、灰谷市で暮らしてたんです」

呟くように、成美は言った。

「私と、お父さんとお母さん。ちよつとだけ、覚えてる。……」

ううん、この2日くらいで思い出したのかもしれませんが。3人で電車に乗って、田舎のおばあちゃんの家によく遊びに行っていたから」

あじやが駅。

不確かな発音しかできない幼い娘を笑顔でたしなめる父と母。いつそそれが、夢であればいいとさえ思うほど幸福な光景。どこかでそんな予感もあった。それが——思い出の駅だったのだ。

不意に瞼の奥が熱くなり、成美は少しだけ唇を噛み締めた。

「おじいちゃんとおばあちゃんは、今はもう死んじゃって、そ

の家が、今は私の実家です。叔父さん夫婦が家を継いだから……。私の……言葉はあれですけど、養親の」

「それで？」

促す氷室の声は、短いけれど優しかった。

小さな深呼吸をしてから、成美は続けた。

「簡単に言えば、私のお父さんって人には、他に家族がいたんです。いつか離婚して籍を入れますとか言ってる間に、私が産まれて、お父さんは死んじゃいました。……もともと身体が弱い人だったそうです」

不倫という言葉を、美和も芳雄も最後まで口にはしなかった。

成美は、もう一度深呼吸をした。

「でも、そのあたりから、今度はお母さんがおかしくなっちゃって……」

（そのことについては、私も責任を感じているんだ）

昨夜、沈鬱な表情で、芳雄は自身の罪を告白した。

（同じ頃、親父とお袋が相次いで亡くなって、陽子の味方は一人もいなくなつた。私は陽子が成美を産むのにも反対したくらいだし、私たち兄妹は、昔から仲が悪かつたからね。……私も援助しなかつたし、陽子も家に寄り付かなくなつた。結局、生活に困って、水商売に身を落としたんだろう）

「そこで、あまり性質の良くない男の人とつきあうようになってんだって……。結局、警察に捕まったんです。俗にいう、美人局みたいなことをして、それで客からお金を騙し取るみたいな……」

罪は、思いの外重く、初犯にも関わらず実刑がついた。

そこでようやくやく成美は、叔父夫婦に引き取られることになったのだ。

（成美ちゃん、痩せて、歯なんかもう虫歯だらけで。なんでこんなになるまで放っておいたんだって、お父さん自分を責めて泣いちゃって、私も成美ちゃんが可哀想で）

そこまで説明して言葉を切り、成美はそつと氷室を見上げた。

「この話、重たいですか」

「別に？」

本当だろうか。

微かな不安が胸に広がっていく。でも彼の目はあくまで優しく、成美に続きを促しているように見える。

「……今でいう虐待……ネグレストみたいなものだったかな。

それが4歳の時だというから、少しは憶えていてもよさそうなのに、私、聞いてもちつとも思い出せないんです。間が抜けますよね」

氷室の手が優しく、成美の肩を撫でてくれた。

「それで？」

うん。成美は自分を励ますように、頷いた。

うん、大丈夫。話を端折ったり美化したりせずに、きちんと全部、話さなきゃ。

「そんなこんなで、私、叔父夫婦の娘になったんです。お母さんも納得したし、養子縁組に際して特にトラブルもなかったそうです。叔父——今の父は、お母さんに法定相続に見合う金銭を渡し、お母さんはそれで一からやり直すって東京に出ていきました。それが、私が5歳の時です」

それでも次の展開は、なかなか口にできなかつた。

「お母さん、東京で……」

きつと、寂しかったり、辛かったりしたんだと思うんです。

だから悪い人たちに騙されちゃつて、そこから抜けられなくなつたんじゃないかなつて。

その思いは胸の奥で噛み締めたまま、耳にした真実だけを簡単に口にする。

「商売に失敗して、また悪い男の人とつきあうようになって、叔父に金の無心に来るようになったんだそうです。それだけならまだよかつたんですけど……親戚にも借金をするようになって



ちやつて」

借りた金は、結局一銭も返されることなく、全て叔父が肩代わりをした。ただし、すぐに返せる額ではなかったそうで、親戚からは随分苦情が寄せられたそうだ。

「それで叔父が——今の父ですけど、もう妹とは縁を切ると親戚中に謝罪して回ったんだそうです。その時に母も、縁切り状を書きました。日高の家とは今後一切関わらないという証文です」

そして2年後、あの雪の日が訪れる。

「私が7歳になったばかりの頃、だったの、かな……。その1

ヶ月前くらいから、叔父のところにも、母から頻繁に電話がかかるようになったんだそうです。私と、もう一度一緒に暮らしたいって。叔父は激怒して、相手にもしなかつたそうですけど」

成美は唾を飲み込み、天井に視線を向けた。

「不思議なくらい、私は憶えてないんです。でもどうやら母が家まで迎えに来て、私は母についていったみたいです。うちの最寄り駅から安治谷まで、多分、電車で移動したんでしょうけど、全然……思い出せないんです」

漠然と、1人で電車に乗っていたような記憶があるが、隣に母がいたことは、どうしても思い出せない。

「その夜、1人で駅に泊まった私の側に、優しい駅員さんが……それが樋口さんなんですね。樋口さんが、ずっと側にいてくれたんだと思います。私の手を握って——優しい言葉をかけてくれた。君の手は温かいね。それは……人を幸せにする手だよって」

それだけは、覚えている。

いや、思い出したのだ。氷室とつきあうようになってから。

「へんですね。他のことは何もかも忘れているのに、そのことだけは鮮明に覚えているなんて」

見上げた氷室は、無言で天井を見つめている。

ひどく空虚な横顔だった。

時間にすれば数秒のその不可解な間を、成美は息を詰めるよ  
うな思いで見守った。

もしかして重いと思った？

やっかいな女と関わり合いになったと、そう思われてしまっ  
たのだろうか。

「おかしくはないですよ」

が、不意に優しい口調になつて氷室は言った。

「君は無意識に、自分を守ったんだと思いますよ。まだ色んな  
現実を背負うには、7歳は幼すぎますからね」

「いい記憶だけ、故意に残してるってことですか」

「そんなところじゃないんですか」

「都合いいなあ」

成美は苦笑して、再び視線を天井に戻した。

「実は、だいたいのことは予想してるんです。私、きっと安治

谷駅で、お母さんとはぐれちやっただんですね」

私が逃げたのか。それとも、母が逃げたのか。

いずれにしても、そのどちらかに至る事情が起きて、1人きりで駅に泊まる羽目になった。つまりはそういうことだろう。

樋口という人は、その時の光景を目撃していたのだろうか。

少しでも、私と一緒にいたはずの母のことを記憶してくれて  
いるだろうか。

その謎は、年が明ければ全て判る。でも――

「本当のことを言うと、今頃になって、ちよつとばかり後悔し  
てるんです。こんなわかりきった結末を、わざわざ駅にまで確  
認しにいったって、一体、なんになるのかなって」

自分が傷つくかもしれないことをどうして知りたいの。と美  
和は言った。

その通りだと成美も思った。なのに結局は、紀里谷と一緒に  
家を出た。

多分自分はそこに、一縷の希望を見出したいのだ。

母に愛されていたという記憶を、それがわずかな希望であっても、思い出したいのだ。——どうしても。

「現実を知るのは、悪いことではないですよ」

黙っているのと、静かな声で、氷室は言った。

「君の年では、もう悪いことじゃない……。明日、僕と一緒に行くのは、迷惑でしたか」

成美は首を横に振り、氷室の腕に自分の手を絡めた。

「なんか言い訳っぽいですけど、そもそも氷室さんに自分の過去をきちんと言おうと思って、それで初恋の駅員さんを探して

みる気になったんです。私」

それには氷室は、しばらく言葉が出てこないようだった。

「……何故？」

その目は、少しばかり困惑しているようにも見える。

「僕は君の過去にも家族にも、特段の興味はありませんよ。たとえ身内にどんな人がいようと、それで君を判断することもない」

解ってます。それは、解ってるんですけど。

一息ついてから、成美は言った。

「私が氷室さんの過去を知りたいと思ったから——そのお返し、



みたいな感じだったんでしょ。でも私にも、ようやく氷室さんの気持ちが分かりました。好きだからこそ、隠しておきたいこともあるんだって」

「……………」

「昨日あたりから、このことが氷室さんの耳に入るのがすごく怖いというか…………嫌だな、と思う気持ちが強くなって。その理由を今日一日、ずっと考えてたんですけど」

「……………」

「私にとって、忘れたままにしておきたい…………というより、なかったことにしたい過去を、氷室さんに喋っちゃったら、もう

私、一生その過去から逃げられないじゃないですか。もしその過去がどうしようもなく嫌になったら、それ知ってる氷室さんという事自体が辛くなるんじゃないかって……そんな風に思ってたんです」

「……………」

「でも今は、なんだか結構平気な気がしています。別に嫌味で言ってるわけじゃないですけど、そもそも氷室さんが私の側に一生いる保証なんてないわけですし」

あ、やっぱり皮肉になっちゃったかな。

成美は氷室の動かない横顔を見上げ、ちろつと舌を出した。

「負の感情は、好きな人とだけは共有したくないって、結局はそういうことなんだと思います。昨日は私の中に、私を産んでくれた人への憤りや失望感みたいなものがいっぱいあって、：多分、そういう気持ちを、氷室さんとだけは共有したくないって思ったんじゃないかな。だってそんなの、ちつとも楽しくないじゃないですか」

氷室は黙って、成美の髪を撫で続けてくれている。

少し、眠くなってきた。

そう言えばこんなの、初めてかもしれない。同じお布団に寝ているのに、私たち、キスもしていない――

本当は、私から聞きたいことも沢山ある。

東京で、何をしていたんですか。

どうして私と紀里谷さんを追いかけてきたんですか。

国土交通省のえらい人が逮捕されちゃいましたけど、氷室さん、無関係ですよね……。

でも、そのどれも言葉にできないまま、成美は疲れたように目を閉じた。

そういった疑問を解決するのは明日にして、今夜は寝よう。

一番言いにくいことを最後に言っつて、後はぐっすり寝てしまおう。

もしかして最後になるかもしれない、彼の暖かな腕の中で。

「これで氷室さんが私とのおつきあいをどう思おうと、もう気にしないことに決めたので……その前置きで、いいます。母はいまも服役中なんです。薬物中毒……。一度悪い水につかると、なかなか抜けだせないものなんですわね」

それでも、おそろおそろ見上げた氷室の横顔が、かすかに笑むのが成美には判った。

「え、笑うところですか、そこ」

「いや、奇遇だなと思って」

「は？」

「僕の父も、服役していましたが。出所して数年足らずで死にましたが」

心臓を冷たい手でいきなり鷲掴みにされたような気分だった。

「……ご病気、ですか」

「自殺ですよ」

遠くを見るような目で、氷室は言った。

「母と一緒に列車に飛び込んだんです。もう15年も前の話ですけどね」

やっぱり納得出来ないわ。それで、うちの俊子が割を食うなんて。

——ああ……

これは夢？

そう、夢だ。だって、あんなに優しい叔母さんが、こんな、怖い声を出すわけない。

俊子は少し……他の子より遅れていて。

その分、学費も……家庭教師や塾のことも、考えてやらないと。

誰かと、電話で話している。

多分、相手は東京にいる叔父さんだ。

だって成美ちゃんは頭がいいでしょう？  
それじゃ、比べられる俊子があんまり可哀想じゃないですか。



私と、……俊ちゃん。

比べられるって、どういうこと？

受話器を握り締める人が、歯を食いしばって泣いているのか判った。

みじめなんです。辛いんです。あなたにはわからないわ。あれだけ私たちに迷惑をかけた陽子さんの子どもが俊子より優秀だなんて、ひどすぎるじゃないですか。

あなたがなんといおうと、成美は陽子さんに返します。育てられないなんて、ただの甘えよ。その結果成美がどうなろうと、うちには関係ないじゃありませんか！

思い出した。

私、全部思い出した――

「……………っ」

目を見開くと、暗い影が見下ろしていた。

成美は大きく息を吐き、反射的に目の前の影にしがみついた。自分の、心臓の音が大きい。

「どうしました」

——氷室さん……。

部屋は暗く陰っていた。障子の向こうに淡い月明かりが映っている。いつの間にか寝ていたのだ。電気は、氷室が切ったのだろう。

大きな手が、額の髪をそつと払ってくれる。自分がひどく汗をかいていることに成美ははじめて気がついた。

「夢を、みて」

「悪い夢？」

眉を寄せて頷いた。

「すごく、嫌な」

夢――

違う。

あれは、夢じゃない。

見開いたままの目が、不意に細かく震えだした。

――思い出した……。

「あ、たし」

思い出した。あの雪の日の前夜のことを。

7歳だった成美は、何故だか寝つかれずに、夜中にこつそり部屋を出た。多分、水でも飲むつもりだった。

美和の寝室から、薄い灯りと、そして囁くような声が漏れていた。

夢を見た。悪い夢。成美はそう思って再び部屋に戻って眠りについた。

その翌朝、まだ薄暗い内に、その美和に起こされた。手を引かれて家を出て、車で連れて行かれたのは、駅だった。

「あたし、……お母さん、じゃない。叔母さんと、駅に、いつ

たんです」

薄闇の中、氷室がそつと眉を寄せるのが判った。

成美ちゃん、いい子だからこの電車で、灰谷駅まで行ってね。

終点よ。ものすごく長く電車が止まって、みんなが一斉に降りる駅。その時に、成美ちゃんも一緒に電車から降りたらいいの。判るわね。

成美ちゃんのお母さんね。今度遠くにお引越しするんですつて。だから成美ちゃんを、どうしても連れていきたいんですつて。大丈夫。お母さん、私と約束したの。灰谷駅まで、必ず成

美ちゃんを迎えに行くつて。

いつもと変わらない美和の笑顔が、その朝は鬼のように見え  
た。

ただ怖くて、頷いた。一刻も早く、その鬼の側から逃げ出し  
たかった。

「電車が停まって、長く、停まって、みんなが降りて。あたし  
も、そこで降りたんです。お母さんはいなかった。待っても待

「つても、どれだけ待っても、きてくれなかった」

来るはずがない。

どういう勘違いをしたものか、そこは灰谷駅ではなく、安治谷駅だったのだから。

でも、その時の成美には判らなかつた。

ここが終点だと信じたまま、暗くなるまで、迎えがくるのを待ち続けた。かじかむ指に息をふきかけ、空を覆う吹雪を見ながら、ただ、待った。

寒くて、怖くて、心細くて。

寂しくて、悲しくて、ものすごく、心細くて。



不意に自分の顔が歪み、涙が溢れて頬と鼻を伝った。

「ご……めんな、さい」

その時に、知った。

もう自分に、帰る家なんてないことを。

「じ、自分の、居場所が」

しやくりあげた声がでた。

「もう、どこにもないような気がして」

そつと頭を引き寄せられる。

「もう、誰からも」

どつと涙が溢れ、あとはもう、まともな言葉にならなかつた。

「わ、私なんて、もう、もういらないうつて、い、い、言われてるような気がして」

食いしばった歯の隙間から、泣き声が漏れた。

一度声があると、もう感情の歯止めがきかず、成美は氷室の胸に顔を埋めて泣きじやくつた。

その間、氷室はずっと成美を抱きしめ、頭を撫で続けてくれていた。

まるで父親か兄のように、彼の手は優しく、暖かだった。

どれだけの間、そうやって泣いていたか分らない。

気づけば涙も激情も乾き、成美は子どもみたいに氷室に抱き

ついたまま、ただ鼻だけをすすりあげていた。

「……落ち着いた？」

小さく頷いたものの、すぐには顔があげられない。

多分ひどい顔になっているだろうし、少なからぬ恥ずかしさもある。

目茶苦茶、泣いた。

恥ずかしいほど、泣いた。

どん引きされてもおかしくないほど、子どもみたいに泣きじやくつた。

「ティッシュ……」

成美が鼻を押さえて呟くと、苦笑した氷室が半身を起こし、床の間にある漆のケースから、備え付けのティッシュを数枚引きぬいてくれた。

「……すみません」

色んな意味で。

ろくな説明もせず、いきなり醜態みせちやつて、ごめんなさい。

思い出しました。何もかも。

もちろんまだ解らない点は色々あるけど、大体のことは。

私が本当に思い出したくなかったのは――

「私、なんで安治谷駅で降りちやつたんですかね」

だいたいの事情は判つたのか、氷室の横顔は薄く笑んだだけだつた。

「灰谷駅までいったら、どうなつていたのかな。お母さん、迎えにきてくれてたのかもしれない……今となつては、もうわからないですけど」

成美はティッシュで、涙と鼻水を拭つた。はあつと息を吐く。涙で冷えた目が気持ちいい。

思い出したくなかつた。

できれば死ぬまで、忘れたままでいたかつた。

だから美和は、雪の日の思い出話になると、あれほど顔色を曇らせたのだ。

あえて、違う駅名を言ったのだ。

ふたりとも、胸の底に何もかも閉じ込めたまま、15年以上母子として生きてきたのだから。

「次の日の朝、叔母さんが——お母さんが迎えに来てくれたんです」

少し落ち着いた気持ちで、成美は言った。

美和は目を真っ赤に泣きはらし、成美を抱きしめたまま、わ

んわんと大声を上げて泣いた。

成美も負けないくらい大声で泣いた。そこから——どうやって家に帰ったのかは、あまりよく憶えていない。

その夜、成美は熱を出した。

夜遅くになって、東京にいたはずの叔父が血相を変えて帰ってきた。

その叔父に成美は言った。

「お母さんが、迎えにきた」

「陽子が？ この家に来たのか？」

うん、と成美は頷いた。

「一緒に行こうつていうから、ついていった。ごめんなさい」

陽子はどうした、と聞かれ、知らないとだけ答えた。

後のことは、思い出せない。

風邪から肺炎をこじらせた成美は、それからしばらく伏せたままであった。美和は、ずっと成美につきつきりで、献身的に介護してくれた。

すっかり元気を取り戻した時には、なにもかも——なかつたことになっていた。

いや、成美が自分でそうしたのだ。そして、実際、何もなかつたように振るまい、やがて本当に、何もかもを忘却の彼方に



置き去りにした。

「お母さんに、悪いことしちやつたな」

美和のことを指して、成美は言った。

「自分で嘘をついたくせに、今になって、ひっくり返そうとするなんて。……人の記憶って不思議ですね。氷室さんのいうように、私、自分にとって都合のいいことばかり憶えていたみたいです」

でも、今はもう、思い出してしまった。

それが少しだけ不安をかきたてる。

「明日、お母さんになんて言えばいいのかな。……安治谷駅に

いこうなんて、もう考えずに、忘れたふりのままにいるのが、一番いいことなんでしょうか」

「思い出したと、そういつてあげればいいと思いますよ」

氷室の口調は静かで、そして優しかった。

「たとえば、それがどれだけ愛している相手でも、時に、心ない言葉で傷つけてしまうことがある」

「……………」

「どこまでが本音でどこまでがそうでないかなんて、実は言っている本人にもわからない。…………人間なんて、そういうものだと思いますよ」

成美が黙っていると、優しい声で氷室は続けた。

「傷つけた当人が、実は君以上に傷ついていることもある」

「……………」

「どんな善人の心にも、一瞬の間というのがあるんです。君にも、僕にも、——君のお母さんにもね。それは人として、許されない間かもしれない。でも、君は許すことが出来る。違いますか？」

「……………」

「今の君をみれば、わかりますよ。君を育てた人は、とても心の優しい、愛情あふれる人だった。お母さんの愛情も弱さも、

君はもう、十分に知っているんじゃないですか」

成美は、唇を噛んだままで頷いた。

「……はい」

知っている。

あの雪の日の騒動の後、美和がいかに自分を責め続けていたか。

そして成美を愛そうと、どれだけ努力していたか。実際、どれだけ沢山の愛をくれたか。

全部——もう、全部知っている。

ぼん、と頭が叩かれ、その手がそつと離された。

「だからもう、いいんですよ。本当のことを言って、お母さんを楽にしてあげなさい」

こくん、と頷きながら、ああ……、と思った。

私、この人を好きになってよかった。

本当に、よかった。

神様、私を彼に会わせてくれてありがとう。

この冷たい手を持つ人の心は、本当は誰よりも暖かくて優しいんです。

そうして私はこの人の手を、もう二度と、できれば一生離したくないんです——

——それにしても。

すっかり平常心を取り戻した成美は、天井を見上げたままの氷室を見た。

ついに自分の底の底まで、この人には知られてしまった。

もう隠すようなことは何もない。まあ、強いて言えば雪村さんのことくらい……それだって、やましいことは何一つないんだけど。

「あと少しで、年明けですね」

「ん？」

「寝ないでくださいね。一緒に年を越したいから」

肩を抱かれ、そつと抱き寄せられる。

これだけ身体を寄り添わせているのに、氷室が何もしないのが不思議であり、幸福でもあった。

自分が最後まで抱えていた暗いものは、何もかも吐き出した。本当に隠しておきたかったのは、実の親のことでも、駅で何が起きたかでもない。その夜の――あまりに孤独で惨めだった、1人ぼっちの自分の記憶だ。

この世界でたった1人だという絶対の孤独。

その時感じた恐ろしさや不安を、二度と思い出したくなかつたし、誰とも共有したくなかつたのだ。

口にすれば、またあの夜の恐ろしかった感情に取り憑かれてしまうような気がしたから――

でも、もう大丈夫だ。

胸の底で凍りついた過去は、今、全部溶けて流れていった。

氷室さんが、受け入れてくれた。

大丈夫だと、心でそういい、伝えてくれた。それがよく判つたから……。

氷室をそつと見上げて、成美は言った。



「やっぱり氷室さん、普通の人じゃないみたい」

「え？」

「まだ何も言っていないのに、私の気持ちみたいなもの……絶  
対先読みしてますよね。まるで超能力でもあるみたい」

成美を見下ろし、氷室は微かな笑みを浮かべた。

「言っていないませんでしたか。僕は人の心が読めるんです」

「……え」

「嘘ですよ。真顔で驚かれると、こっちもリアクションがとれ  
なくなる——さて」

いきなり言葉を切ると、氷室は布団を払って起き上がった。

「なんだか目も冴えてきたので、紅白でも見ますか」

「はい？」

「まだ11時半だから、少しなら年末気分を味わえるんじゃないかな」

「ちよつ、……いいですけど、この空気で紅白ですか？」

いくらなんでもそれはないでしょ——と、成美は戸惑って氷室を見上げる。氷室はいたずらっぽい微笑を浮かべた。

「実は面白い賭けを思いついたんですよ。僕は白に賭けますから、白が勝ったら、かねてから希望していた例の」

「ちよつ、ちよちよつ、勝率高いのは俄然白じゃないですか。」

そんな危険な賭け、絶対にしませんよつ、私」

さすがに今までの会話の何もかもが吹っ飛び、成美は、眠気が吹き飛ぶ思いで跳ね起きた。

「別にいいでしょう。ただエプロンをつけてもらっただけなのに」  
「……………氷室さん、言っときますけど、それただの変態ですか  
ら」

全く――

今までの話の流れで、どうしてこんな展開になるのだろう。

「とにかく賭けは、なしつてことで。普通に紅白を楽しみましょう」

リモコンを取り上げると、氷室は不服そうに片膝で肘を支え、拳を頬のあたりに添えて成美を見た。

「僕は貞淑な賢妻より、おねだり淫乱妻のほうが好きなんですよ」

「はっ、はい?」

「君が間違はなく前者なだけに、残念で仕方ないですよね。実際のところ」

あの……、なんの話ですか、それ。

「赤が勝ったら、僕と結婚しましょうか」

——え……。

さらつと言った氷室は、もう視線をテレビの方に向けていた。「そういうことで、僕らの賭けは成立ですね。じゃあ、テレビをつけてもらえますか」

「え、あ、は、はいっ」

え、今なんていった？

赤が勝ったら結婚とか、え、え？

それまでの深刻さがなんだったんだ、と思えるほど心臓が身勝手に踊っている。

時計をみると、今年もあと15分。紅白もそろそろエンディングだ。

な、なにになに？　もしかしてテレビをつけた瞬間に婚約成立とかもありなわけ？

しかし、負けたら○エプロンで、勝ったら結婚とか、あまりにも落差がありすぎない？

成美はドキドキしながら、リモコンのスイッチに指をかけた。

23

翌朝——元旦は快晴だった。

カーナビに神社の文字が見えたので、成美は「おっ」と思っ

て運転している氷室を見上げた。

「ね、まだ時間があるし、この神社に寄ってみませんか？ ついでに初詣も済ませちゃいましょうよ」

「初詣、ねえ」

氷室は不服そうだった。

「行く意味がそもそも解らない。だいたい僕に、宗教的な習慣は一切ないのですが」

そう言いながらも、氷室は神社脇の空地に車をつけてくれる。

無人の社には、お神酒と菓子が並べられていた。成美は1人でお神酒を飲んで、氷室と一緒に本殿の前で手を合わせた。

「何、願いました?」

「何も。そもそも神社は願いを訴える場所なんですかね」

ああ、こういうところが年齢のギャップというか、ちよつと  
どうかかな、と思うところなんだよね。頭が固いというか融通が  
きかないというか、意固地というか。

「日本人なら、空気を呼んで、四季折々のイベントを楽しみま  
しょうよ」

「それなりに楽しんでますよ」

本当かなあとは思ったが、氷室の横顔は、確かに少しばかり  
楽しそうに見えた。



まあそれは、昨夜、彼の望みというか、思い通りの展開になったせいかもしれないが――

「コーヒーを買ってきますが、君は？」

「あ、はい、じゃあ」

成美は白い息を吐きながら、道路沿いの自販機に向かう氷室の背を見送った。

それにしても、昨夜は散々な目にあつた。

――テレビつけてものの1分だもんなあ。

やりました。今年も白組の勝利です！

氷室さん、事前に携帯か何かで勝敗の行方を予想していたん

じゃないだろうか。

もちろん、エプロンなどあるわけがない。いくら氷室でも魔法みたいになんかそれを取り出すのは無理だったようだ。

成美は約束の持ち越しを訴えたが、氷室は別のことを要求してきて……。

ごほん、と成美は咳払いをした。

その時の様子を思い出すだけで、今でも頬が熱くなる。

てゆっか、私たちってただの馬鹿ツプルじゃないだろうか。

もちろん誰にも見られないからこそ、あんなことやこんなこともできるんだらうけど。

昨夜はあの後、さすがに夢もみずに熟睡した。

不本意な展開とはいえ、一言でいえば、幸せだった。

身体の繋がりがだけじゃない。彼に過去を受け入れてもらった安堵感で、今は心ごと、何もかもが満たされている。

でも……。

（自殺ですよ）

（母と一緒に列車に飛び込んだんです。もう15年も前の話ですけどね）

残念なのは、1人で過去を背負う氷室に、今の自分が感じたのと同じ安堵感を与えてあげられないということだ。

はじめて家族の話をして口にした後、すぐに氷室は口をつぐみ、もうこの件には二度と触れないといった態度になった。

多分、彼は後悔したのだ。口にした直後に後悔した。

そういう意味で、彼はまた、成美を本当の意味で受け入れてくれてはいない。

それが氷室の問題なのか、自分が人として頼りないからなのか、——今の成美にはわからないけれど。

その氷室は、道路の向かい側にある自販機の前で、携帯で誰かと話しているようだった。

時折考えこむような目で、言葉を選んでいるのが判る。仕事

かなと、ふと思った。職場で見る氷室さんと同じ顔をしているからだ。

やがて携帯を切り、それをコートのポケットに滑らせた氷室は、顔をあげて成美の方を見た。

成美は微笑した。けれど氷室は笑わなかった。焦点を成美にあわせたまま、ひどくぼんやりとした目をしていった。

夢でも、見ているような眼差しだった。

——氷室、さん……？

しかし、すぐにその彼らしからぬ表情は、幻のように消えた。

目に生氣を取り戻した氷室は、成美の側まで戻ってきて、暖

かな缶コーヒーを差し出した。

「ありがとうございます——もしかして、少し疲れてます?」

「そうですね。昨夜はあまり眠れなかったから」

否定せずに氷室はそう答えたが、その答えにも、成美はわずかな違和感を覚えた。

氷室が寝ていないのはいつものことだ。それでも、彼が疲れた素振りを見せたことは一度もない。

「……もうちよつと休んでから行きましようか?」

「いえ、コーヒーを飲んだら行きましよう。ここからだと安治谷駅まで1時間はかかりますから」

ここがどこで、どの道を通つてどう行けば安治谷駅に着くのか——まるで理解していない成美は、ただ、感嘆して頷くしかない。

ほんと、すごいなあ、氷室さんつて。私なんて、このあたりが地元になるけど、さっぱりだもんね。

「さつき、すぐくぼんやりしているように見えたんですけど」  
神社の縁側に腰を下ろし、コーヒーのプルタブを切りながら成美は訊いた。

「僕がですか」

立ったままで、同じようにプルタブを切りながら氷室は独り

言のように呟いた。

「そうですね、ちよつと……夢を見たのかな」

「夢……？」

見上げた氷室は前を見て、座る成美からは顔の表情までは窺えない。

「以前、同じ場所に来たような……そこに、……君が、立っていたような……そんな不思議な、……夢なんでしょうね」

「ええ？ 私もそうですけど、氷室さんもここ、初めてですよ  
ね」

わざとはしやいで言いながら、成美は内心思っていた。



それは、夢というより既視感——デジャブだ。

以前何かの本に、デジャブは脳の疲れから起こる一種の錯覚だと書いてあったような記憶がある。

それを口にしようとした成美は、再度氷室の横顔を見上げてから、やめた。

もちろん氷室が、その程度の知識を知らないはずがない。

それだけでなく、氷室の横顔は——見間違いでなければ先ほどと同じで、ひどくぼんやりとして、物を言うのもおつくうそうに見えたからだ。

成美の知る限り、ここまで疲れを表情に出す氷室は初めてだ。

だから成美はまだ、氷室に訊けないでいた。

東京での出来事、そして国土交通省で起きていることについて。

「ああ、理由がわかりましたよ、今」

しかし氷室はあっさりと言って、缶を口につけた。

見上げた横顔には、すでに彼らしい薄い笑いが浮かんでいる。

「わかったって、何がですが」

「今感じた既視感の理由です。他愛もないことでした。以前、似たようなアングルの写真を見たことがあったんですよ」

なあんだ。

脳の錯覚だとは思ったけど、ちよつとがっかり。

そこに私がいたんなら、もうちよつとロマンチックな理由を  
言ってくれてもいいものなのに。

「じゃ、そろそろ行きます?」

「日高さん」

立ち上がりかけた成美の腕を、不意に氷室がそつと掴んだ。

「僕のことを、好きですか」

え?

なにそれ。どういう意味の質問。

「す、好きもなにも」

氷室が真顔なので、成美はみるみる耳まで熱くなった。

「な、なにいつてんですか。朝にする会話じゃないですよ。だいたい——」

しどろもどろになった成美は、昨夜の出来事を思い出した。

「に、似たようなセリフなら、昨日、散々言わされたじゃないですか。どうしちやっただんですか、朝っぱらから」

「……………言わされた？」

成美は反射的に息を引いていた。

「いつ、言いました、言いました。自分の意思で言いましたっ」  
ふつとたまりかねたように、氷室の冷ややかな目が笑み崩れ

る。

そして彼は、低い声を立てて笑い始めた。

「なにもそこまで青くならなくても」

「な、なりますよ。もうっ、なんなんですか、一体」

朝っぱらから、猫がネズミをいたぶるような真似だけはやめてほしい。

恋愛でも、仕事でも、人間としても、私は何をしたってあなたには敵わないんだから。

「さて……、そろそろ行きますか」

やがて笑いを唇から消した氷室が、呟いた。

ふと成美は眉をひそめている。

気のせいかもしれないが、それが、自分に無理に言い聞かせているように聞こえたからだ。

——氷室さん、やっぱり今日は疲れているのかな。

そういえば、この駅での用事が終わったら、氷室さんはどこに行くつもりだろう。

それは口にできないまま、成美は再び車の助手席に乗り込んだ。

「はじめまして。……と言っておきます。樋口です。今日は遠方からおつかれさまです」

優しい物腰と、耳障りのいい声。

再会——といっても初めて会ったも同然だが——再会した樋口直人の印象は、何から何まで感じのいい人、といつてよかったです。

「えーと……、日高さん？」

逆に成美は、緊張のあまりしばらく声のでてこなかった。

眉をひそめた樋口に顔をのぞきこまれ、成美は慌てて頭を下げる。

「すつ、すす、すみません。こちらこそはじめましてです。お休みの上にお正月にお呼びたてしてしまって……、本当に、失礼しましたっ」

「いいえ。いつがいかと聞かれたので、今日と答えたのは僕なんですから」

樋口は微笑して、視線を駅舎内に巡らせた。

「どうしましょう。ここじゃ寒いですから、よければ中に」

そう言つて視線を向けたのは、プラスチックの出札窓だ。そ



の向こうは駅員室で、制服姿の駅員が机に向かう姿が見える。

ああ、と成美は思った。

目の前の樋口に、その紺色の制服を着せれば、記憶のままの初恋の人だ。

今となつては、なんのために会いたかつたのか定かではないけれど——やつと、会えた。

「制服つて、昔のままですよね」

成美が言うと、樋口は少しだけ苦笑した。

「そう、昭和の古臭いデザインのままですよ。しかし、本当によく憶えていますね」

氷室にこの感想は告げる気もないが、若い頃は、かなりのイケメンだったに違いない。

身長も高く、体格も年の割にはすらつとしている。今、40前だろうが、それより随分若くみえるのは、黒目がちの童顔のせいだろう。

髪は短く、ハイネックのセーターにジーンズというござっぱりとした軽装も彼の好感度をあげている。今だって、かなりもてているに違いない。

「まあ、制服以外は何もかも変わっちゃいましたからね。ここも」

樋口は懐かしそうな目で駅構内を見回した。

広々とした案内所と、全面窓ガラスに覆われたモダンな待合室。昭和というより明治っぽいレトロな雰囲気駅の駅である。

確かに変わった。成美の思い出の中の駅とは全然違う代物である。同じなのは――窓から見える外の光景。商店街のある道路の形状だけだ。

「僕がここにいたのは当時から数えて2年くらいですよ。その後建て替えになったんです。まあ、駅舎に金をつぎこんでも、利用者が増えたわけではないのが悲しいところですが」

「樋口さんは、今はどちらに？」

樋口がすぐに口にしたのは、成美が聞いたこともない地名だった。

「なので、今日がむしろ都合がよかったですよ。たまたま地元に戻省していた時に、日高さんが訪ねてきてくださった。これもなにかのご縁でしょう」

「あの……よければここで話せませんか。そんなに長くはなりませんから」

そう言つて成美が土産の袋を差し出すと、樋口は恐縮しながらそれを受け取った。

「実は、私にとつても今日のことは突然で、泊まった旅館で急

「きよ買ったものなんですけど」

「まあ、確かに昨日の今日ですからね。僕も昨夜、いきなりお電話をいただいた時は驚きました。ええと……氷室さん、と仰られましたか」

「彼なら、外に」

成美は、思わず背後を振り返った。もちろん、氷室の姿はどこにもない。

「氷室さんなら、遠慮して外にいるんです。呼んできましょつか。同席するように言ったんですけど」

話を取り次いでくれたのだから、せめて挨拶くらいしてくれ

てもよさそうなものなのに、氷室はそれを硬くなに拒否した。

どうぞ思い出話に花を咲かせてきてください。なんかそれが、妙に厭味つぽく聞こえたのは気のせいだろうか。

「結構ですよ。挨拶なら、電話で存分にしていただきましたから」

「だったらいいんですけど」

それにしても、奇妙だと思う。

会ったこともない相手に、自分のことではない用件で電話して、いきなり会う約束をとりつけた。その不躰さも氷室らしくないし、そうまでした相手に、挨拶ひとつしないのも氷室らしく

くない。

「やあ、美味しそうだ。ここのお菓子は、妻の好物なんですよ」  
それでも樋口がにこつと笑ったので、成美は気を取り直して  
氷室のことを頭から追いやった。

25

「で、僕に聞きたいこととはなんでしよう」  
樋口は再度駅員室に誘ってくれたが、さすがにそれは固辞し  
て、2人は場所を待合室に移した。

ガラス扉で仕切られた待合は暖房もきいて暖かく、元日のせいか客は1人もいなかった。

まずは迷惑をかけた詫びと礼を言つて、成美は迷いながら口を開いた。

「いまさらの質問ですけど、私のこと、憶えていらしたんですか」

「まあ、名前や顔はともかく、……そういうことがあった、ということはね」

ちよつと歯切れ悪く、樋口は切り出した。

「駅で迷子なんて、大きな駅ならともかく、ここじゃあね。そ



れだけでも珍しい話なのに、その子を一晚泊めたとすれば、僕の駅員人生の中では、一、二を争う忘れられないエピソードですよ」

う、本当にすみません。

「……雪がひどかったんですよ」

前を見たまま、樋口は当時を思い出すように語りはじめた。

「本当に雪がひどくてね。このあたり、毎年の降雪量はさほどでもないんですけど、何年に一度か、とんでもないドカ雪に見舞われる年があるんです。丁度その日が……そうでした。夜になると電車も停まって、色んな所でスリップ事故。警察も、て

んやわんやだったんでしょね。迷子——というより、なんというか」

樋口が言葉を濁したので、成美は「駅に置き去りにされた子、ですか」と助け船を出した。

「まあ、そうです。そういう通報はしたんですけど、すぐには動いてもらえなかった。最も僕が、君に気がついたのはもう夜も更けた時刻でね。その頃、まだこの駅舎は古くて——言い訳じゃあないですが、至る所に死角みたいなものがあつたんですよ」

当時のことを思い出すように、樋口は眉をしかめる。

「丁度自動販売機と植え込みの影に、ちつちやなベンチがありまして、そこに、君は——まあ、当時の僕の視点でいうと、小学校低学年くらいの女の子が、1人で座って本を読んでいた。

多分、乗客の何人かは気づいたんだろうけど、まさか迷子とは思わなかったんじゃないかなあ。そのくらい、君は落ち着いていて、……なんていうのか」

「迷子らしくなかった」

「まあ、そうです。僕も声をかけるまで、まさかな、と思っただけですからね」

そこで樋口は立ち上がって、自販機の方に視線を向けた。

「何か飲みますか。昼飯くらいご馳走したいんですが、元旦はどこも休みで」

「い、いえいえ。お気遣いなく。それに、さつきコーヒを飲んだばかりですし」

成美が慌てて断ると、樋口はそれでも、自分の分のホットコーヒーと、成美には暖かなお茶を買ってくれた。

「……名前も言わない。親の名前も住所も言わない。どこに行くのかと聞いても何も答えない。泣きもしないかわりに、表情も一切ないんです。こりや、困ったな、と思いました。どこから来たのかも判らないし、何時からいたのかもはっきりしない。

どうもただの迷子じゃないらしい。当時の僕の印象は――」

樋口はそこで言葉を切った。

「まあ、この子なりに、親を庇っているんだろうな、でした」

その刹那、不意打ちのように成美の涙腺は潤みそうになってきた。

そうだったのだろうか――もう、そのあたりの感情はなにひとつ思い出せない。

「警察からは、朝になったらそつちに行つて事情を聞くので、それまで預かつておいてくれ、と言われましてね。まだ県内に、家出人の搜索願は出ていなかったんでしよう。警察の立場もわ

かりましたが、こっちはちよつと慌てましたよ。だって、……年端もいかない女の子の扱いなんて、僕にはさっぱり解らないでしょう」

樋口がおどけて肩をすくめてみせたので、成美もわずかに口元を緩ませた。樋口の思いやりは嬉しかったが、本当は少しも笑いたい気分ではなかった。

覚悟は決めてはいたものの、一体どんな事実が樋口の口から出てくるのか——そう思うと、どうしても警戒の気持ちが強くなる。

「まあ、とはいえ、駅にお客さんを泊めるのは前例がないわけ

じやありませんので、一応、帰宅困難者としてこの駅の仮眠室に泊めることにしたんですよ。僕もその日は本社に出す報告書やなにやらで、到底帰れるような状況じゃあなかつたんで、丁度よかつたな、という感じで」

「それって、私のことですか」

「え？」

「報告書や何かって」

ああ、と樋口は言葉に詰まったように口ごもった。

むしろ樋口に申し訳ないと思つてした質問だつたのに、彼がその刹那、少しばかり狼狽えてみえたのが、不思議だつた。

「いや、違うんです。ちよつと他の用事でね。まああの日は他にも色々あつたものですから」

樋口は困惑したように頭を搔いた。

「それで——電話があつたのが、夜になつてからかな」

電話？

成美の表情を読んだのか、樋口はゆつくりと頷いた。

「君の母親と名乗る人からです。ひどく動転しているようでしたから、何を言っているか判りにくいところもありましたし、こちらの質問にも、一切答えてもらえなかつた。けれど、迷子の女の子を探しているということだけは判りました。なので、



そのお嬢さんならうちでお預かりしていると言つと、じゃあ、すぐに迎えにいきますからと」

結局、雪で車が出せなかつたそうなんですが。

樋口はそう付け足して、コーヒーを一口飲んだ。

そして迎えは翌朝になった——それは成美も知っている。

が、電話は駅の人からあつたと美和は言った。

それが嘘だつたとしても——そもそも電話は、どちらの母親からかかつてきたものだつたのだろうか。

「最初の電話で」

気持ち落ちつかせながら、成美は聞いた。

「私の母親を名乗る人はどう言ったのですか」

「どう、とは？」

「いえ、私が名前も住所も名乗らなかつたんなら、どうやって樋口さんは私をその人の娘だと判断したのかな、と思つて」

「ああ」

質問の意味が判つたのか、樋口は安堵したように頬を緩ませた。

「そりゃあ、服装とか持ち物で。服の色とかバックについてたキーホルダーとかね。かなり詳しく説明されましたから」

——お母さんだ……。

間違いない。電話をしてきたのは陽子ではなく、美和である。

ようやく、これで何もかもが腑に落ちた。あえて嘘の駅名を教えられた意味も判った。

——お母さんは、私と樋口さんを会わせたくなくなかったんだ。

当時の事情を樋口さんが覚えていれば、嘘が簡単にはばれてしまっから。

その時の、美和の葛藤はどれほどのものだったのだろうか。

おそらくなんらかの形で、美和は成美が、灰谷駅に着いていないことを知ったのだ。あるいは成美の母の陽子から、その旨の連絡があつたのかもしれない。

理由はともあれ、美和は成美の行方を探してくれた。それだけ  
は間違いない。

許そう、と成美は思った。

氷室さんの言うとおり、何もかも母には話して、10年以上に  
及ぶ重責から解き放つてあげるべきだ。

それが、多分——私のためでもあるような気がする。

「ありがとうございます。樋口さん。それだけ伺えれば十分  
です」

成美は立ち上がって、深く頭を下げた。

狭い駅構内は、昔とまるで様変わりしていた。

建て替えたんだな、と所在なく周辺を見回しながら氷室は思った。

レトロなデザインが、いつては悪いが安っぽい。

歴史ある駅をイメージしたかったのだろうが、無駄な装飾が多すぎて、かえってなにもかもが急場しのぎの作り物に見えてしまう。

少し離れた待合では、成美が件の駅員と膝を突き合わせるよ

うに話し込んでいるところだった。

その様子を横目で見てから、氷室は苦い息を吐いて歩き出した。

これは——本当に偶然だろうか。

それとも、何かの因果だろうか。

もう二度と来ないと思っていた場所に、まるで運命のように引き寄せられた。

そこに一体なんの意味があるのか——それが知りたくてここまで来たくせに、考えることから無意識に逃避している自分がいる。

いや、何も考えなくていい。

氷室は眉をしかめながら首を横に振った。

日高成美を連れてここを出たら、町のこととも駅のこととも、何もかもを忘れるのだ。そして二度と振り返らない。

全ては性質の悪い偶然で、そこに意味など、見出そうと思っただ方がどうかしていたのだ。

郷愁に吸い寄せられるように駅構内に足を踏み入れてしまっただが、それすら間違いだったと氷室は思った。そしてきびすを返そうとした。その時だった。

——え……………？

絶対にこの場所にあつてはならないものが、いきなり氷室の眼前に現れた。

これは――

なんだ。

どういう意味だ？

待ってくれ。

俺は――頭がどうかしてしまつたのか？

目眩とも、パニックともつかないものに全身が支配されたようになつて、氷室は無自覚に出札口に向かつた。

頭の中で、何かが音をたてて渦巻いている。一体どうやって



窓口まで辿り着いたのか、それさえわからないほどだった。

「すみません」

指の甲でプラスチックの仕切りをノックしてから、絞りだすように氷室は言った。

「はいはい、どうしました」

初老の駅員が、田舎の駅員にありがちな、のんびりした態度で窓に近づいてくる。

「おうかがいしたいことが」

「はい？」

窓口の客の態度が普通ではないことに、呑気な駅員はようや

く気づいたようだった。

「あそこに——飾られている絵のことで」

氷室がそう言うと、何故か初老の駅員は、目を大きく見開いた。

「あれは、寄贈されたものだ——いや、間違いなく寄贈されているはずなのですが、誰が、いつ寄贈したものだか、調べることはできませんか」

「あなた……」

いきなり、駅員の口調がぞんざいになった。

そしてますます大きく目を見開き、信じられないものでも見

るように氷室をじつと見つめた。そして、言った。

「ほんとに、来たよ……」

ほんとに、来た？

「あ、いやいや、ちよつと待つてくださいいよ。えーと、えーと」  
男は眼鏡を額の方まで押上げ、胸ポケットの中から取り出した手帳を唾で濡らした指でめくった。

胸にかかったネームプレートには、遠藤という名前が刻まれている。

「あなた——ヒムロさん？　そうでしょう？」

氷室を見上げる、遠藤の目が輝いている。

咄嗟に言葉が出てこなかった。それが、遠藤には肯定と映ったようだった。

「ちよつと待つててくださいよ。実はね、あんたに渡したいものがあるんです。いやー、もう1年近く待ちましたよ。さすがに半信半疑になりかけてたんですがねえ」

なんの、話だ。

いったい、何が起きようとしている？

いや、もう判っている。

水南の書庫から消えた1枚の風景画。

あれを見た瞬間に、判っている。

ここはすでに、ゲーム板の上なのだ。

乗らなかつたはずのゲームの中に、自分はいつのまにか載せられていたのだ。

「はい、これ」

真っ白な封筒が、駅員室から出てきた遠藤から直に手渡された。

「もう1年も前に、こちらに来た女のお客さんから預かったお手紙です。あの絵の出处に関心を持つはずのヒムロさん。私が聞いたのはそれだけですが、あなたで間違いないですよね」

——手紙……。

死者からの、手紙。

頭の中で渦を巻く疑念が、ようやくひとつの形を現しつつあった。

お嬢様の本を探していただきたいのです。

年の瀬に、いきなりかかってきた不可解な電話。

それが水南の仕掛けた最後のゲームだと気づいた氷室は、日高成美の身边を――ゲームの駒である三条がどうやって調べていたのか、理解した。

紀里谷だ。

日高成美を含め、氷室自身の身边や心情を、ああも正確に言

い当てる相手は、紀里谷以外考えられない。

だから夜が明けて、すぐに紀里谷の行方を追ったのだ。姉の月華から情報を得て。

丁度月華の車を拝借していた紀里谷の居所は、取り付けてあった盗難防止用GPSで簡単に突き止めることができた。

それが、この駅からさほど遠く離れていない場所だと判った時、俺はいったいどう思った？

おかしいとは思わなかったのか？

偶然にしてはできすぎていると、どうしてそこで警戒するこ  
とができなかった？

（ほ、本当なんつすよ。確かに俺は、三条さんに頼まれて天さんの周辺を探ってみました。灰谷市で仕事を探してくれたのも三条さんだし、日高さんに嫌がらせをしたのも、あの人の指示です。で、でもなんつーか、そこまで天さんが怒るような内容じゃ……ひつ、ごめんなさいいつ、ごめんなさいいつ）

（三条さんのことは、いずれバレると思つてたし、そこはもう、誤魔化す気はないつすよ。でも、この駅に来たのは偶然なんですつ。それはマジつす。あの子が——人探しをしてるつーから。事情聞いて、ちよつと同情しちゃつたつていうか）

あれも、紀里谷の嘘だったのか。



それが見抜けないほど俺の目は腐ってしまったのか。

氷室は虚しい自問をしている自分に気がついた。

真偽がどうあれ、確実なことは、ひとつだ。

自分は今日、今日でなくてもいずれ、必ずこの場所に来るよ  
うに仕向けられていた。

誰に？

考えるまでもない。水南に、だ。

後藤の屋敷を出た時点で、終わりではなかった。

俺はずっと、あの女の手のひらの中で、彷徨っていただけだ  
つたのだ……。

気づけば手の中に、乾いた紙の感触があつた。

目の前では遠藤が、訝しげに氷室の様子を窺っている。

頭の中で、凄まじい警告音が鳴り響いている。この手紙を読んではいけない。読めば、二度と逃げられない。そして行き着く場所は三度目の地獄だ。そうなれば、もう自分を保っていられる自信はない。

その音はやがて光になって点滅し、氷室の網膜を真っ白に焼いた。

読めばもう——戻れない……

戻れない。

俺は、水南を――

現在より過去を、選んでしまう。

気づけば指は、震えながら封筒の封を切っていた。

中に入っていたのは、便箋が一枚きり。書かれているのはただ一行。

天、  
私を探して

——氷室さん、どこ行っちゃったのかな？

覗きこんだ車は、無人だった。車で待っていると云ってくれたのに、トイレにでも行ったのかしら。

成美は背を伸ばして、背後の樋口を振り返った。

「すみません。ちよつと……いないみたいです」

「そうですか」

樋口は屈託なく微笑んだ。

「少し待ってたら戻ってくると思いますけど、どうしましょ

う」

「そうですね。……最後に、ご挨拶をと思ったのですが」

駅前の駐車場。樋口もそこに車を停めているようだった。

しかし少し迷った後、樋口は「じゃあ帰ります」と言った。

「ご挨拶はまたの機会に——あればですが——しておきますよ。

氷室さんによろしくお伝え下さい」

「本当にすみません。今日はありがとうございました」

成美はぺこり、と頭を下げた。

本当に最後の最後までいい人だった。

大晦日にいきなり電話がかかってきて会いたいと言われるな

んで——かなり不躰な展開だったのに、である。

その電話を、無関係の第三者にかけさせてしまった自分も自分だが、その第三者である氷室さんに、わざわざ挨拶までしようとしてくれた樋口さんって——

いい人すぎる。

顔をあげて樋口を見送ろうとした成美は、肝心なことを言い忘れていたことに気がついた。

「あ、樋口さん」

「はい？」

「私の手のこと、褒めてくださったの、憶えていますか」

足をとめた樋口が、初めて不思議そうな顔になった。

「え？」

「あの、手が温かいって、言つて下さったんですけど」

「……そうだったかな」

首をかしげて手を頭にあてる。思い出そうとしているようだが、正直な人なのか、眉根はますます寄るばかりだ。

まあ、そういうものよね。

自分にとっては、人生を変えるほどの一言でも、それを言った人にとってはなんの気もない一言だった。

よくあることだ。



成美は多少感じた寂しさを押し殺して、笑ってみせた。

「憶えておられないなら、いいです。私には宝物みたいな言葉でした。ありがとうございます！」

ためらうように微笑した樋口は、静かに黙礼して、きびすを返した。

これできっぱり、けりがついた。

成美は清々しい気持ちで、よく晴れた新年の空を見上げた。

もう私に、怖いものは何もない。あとは——氷室さんに、振り落とさないようにくつついていただけよね。

——さて、その氷室さんを探さなきゃ。

成美は駅の方を振り返って、歩き出した。

「あの……」

驚かせないようにそつと声をかけたつもりだったが、頭が少しばかり薄い感じの駅員は、飛び上がるようにして振り返った。

「あ、ああ。すみません。なんの御用でしょう」

成美は戸惑いながら頭をさげた。

「すみません。ちよつと人を探しているんですが」

そして、つい、駅員が首をかしげながら見ていたものに目をやっていた。

——絵……。

駅舎中央の支柱に飾られている、かなり大きめの水彩画だ。

モノトーンの色使いで、描かれているのは洋風の屋敷のよう  
だ。

不思議と寂しい印象を受けるのは、背景に何もかかれていな  
いせいだろう。

色さえない。ただぼつんと、灰色の家だけがこの世界の全て  
のように佇んでいる。

正直、この駅舎には似つかわしくもないような絵に見えた。

せつかく明るい色彩で統一されているのに、絵の周辺だけ灰

色の世界に沈み込んでいるようだ。いや、そんなものではなく

「人、といますと?」

駅員に問われ、絵に気をとられていた成美はようやく我に返った。

そうそう、行方不明の氷室さん。

「あ、えと、その……黒のトレンチコートを着た、かなり背の高いイ……男の人なんです。駐車場にいたはずなんですけど、この辺りで見かけませんでした?」

イケメン風、という形容詞はかろうじて飲み込んだ。

元日のせいか、殆んど客のいない駅では、それだけ伝えれば判ってもらえるだろう。

が、何故か駅員は眼鏡を指で押上げ、妙にじろじろと成美を見た。

——え？

なんだろう。何か私、おかしなことでも言ったかな。

しかし初老の駅員は、すぐに自身の不躰な態度に気づいたのか、ひとつ咳払いをしてから微笑んだ。

「そのお客様なら、駅舎の裏手でお見かけしましたよ」

「本当ですか？」

「表口からでて右にいくと、細い並木道があるんです。ちよつとの距離ですが、そこを抜ければ裏庭です。旧駅舎の記念碑があるんですよ。昔はそこに、公衆便所があつたんですがね」  
「ありがとうございます」

親切な駅員に頭を下げ、成美は急ぎ足できびすを返した。

それにしても氷室さんたら、なんでそんな場所に。

携帯の電源も切ってるみたいだし、全くもって意味不明。まさか初恋の人との再会を、そこまで怒っているとは思えないけど。

——携帯、もう一度見てみるかな。

もしかしたら連絡が入っているかもしれない。足を止めた成美は、バックから携帯電話取り出そうとした。

視界の端に、先程の駅員の姿が映る。彼は最初と同じ場所で、あの灰色の絵を、やはり不思議そうな目で見上げていた。

——なんだろう。あの絵。

灰色の世界。いや違う。あの絵を囲むキャンパスがまるで、灰色の世界へ続く入り口のようにだ——

駅員に教えてもらった場所はすぐに判った。

そこはホームと駅舎に挟まれた猫の額ほどのスペースで、庭

と呼ぶにはあまりに殺風景な風情だった。小さな石碑と、冬枯れの木が幾つか立ちそびえているだけだ。

氷室は、いた。

ひととき大きな木の下に立ち、ぼんやりと空を見上げている。また、あの――疲れた目になっている。

「氷室さん」

一瞬戸惑った成美は、それでもほつとして、氷室の方に駆け寄った。

「ごめんなさい。お待たせしちゃって。樋口さんも、ご挨拶したいと仰られていたんですけど」



氷室がゆつくりと成美の方を見た。

——氷室さん………？

思わず、自分の背後を見てしまうところだった。

氷室さん、何を、見ているの？

が、その焦点は、徐々に成美に合わされる。

「そうですか」

氷室は優しく微笑した。

「きちんと、話はできましたか」

「はいっ」

よかった。いつもの氷室さんだ。

それでも先ほど見た、焦点の定まらない——いや、成美の背後の誰かを見ているような彼の表情が気になって、成美は氷室の手を取っていた。

ずっと戸外にいたせいかな、指は凍えるほど冷えている。

「……風邪ひきますよ、こんなに冷えたら」

「体温が冷たいと、案外寒さには強いんですよ」

それはないでしょ、と思っただけれど、氷室の横顔が妙に優しく見えたので、それ以上言葉が出てこなかった。

「どうしましょう。これから。私は実家に戻らないといけな  
んですけど」

「送りますよ」

穏やかな口調で氷室は言った。

「その後、僕も、東京に戻らなければならぬので」

——あ……。

そうなんだ。

落胆が、思わず顔に出そうになる。成美は懸命にそれを押しやっただ。

「そう、ですか。じゃあ、まだあちらにご用事が？」

「ええ、頼まれた仕事が終わりました」

そっか。

だったらなんで、こんな中途半端に戻ってきてくれたんだろ  
う。しかも灰谷市ではなく、私の実家の方に来るなんて――

「向こうで、探しものがあるんです」

「探しもの?」

「ええ」

氷室は淡々と頷いた。

「面倒ですが、どうやら僕が探すしかないようなので」

「……………」

なんだろう。それ。

「探しものなら、お得意なんじゃないですか」

ちよつと皮肉っぽい口調になっていた。成美はそんな自分に慌てたが、氷室の横顔は相変わらず優しげなままだった。

「そう、得意です。だから必ず見つけられると思います」

「……そうですか」

よく分からないけど、なんかへんな感じ。今日の氷室さん。

「ただそれは、僕より頭のいい人間が隠してしまったものなので」

え……？

「だからなかなか難しくね。君は、どうですか」

成美が疑問を挟むより先に、氷室がそう言つて成美を優しく

見下ろした。

「僕が隠してしまったものを、君は見つけることができますか」

「……………」

氷室さんが。

隠してしまったもの——？

「絶対、無理です」

即答で答え、成美はむしろ胸を張った。

そんなの天地がひっくりかえったって無理に決まってる。

「考える余地もなし、ですか」

「なしです。だからそんな意地悪、絶対にしないでくださいよ！」

氷室は楽しそうに微笑んだ。本当になんだらう、今日の氷室さん。なんだか今の笑い方もしやくに触るぞ。

だいたい、氷室さんより頭のいい人つて……。

「まあ、とにかく、その探しものを終えて、とつとと灰谷市に帰ってきてください」

何故だかそれが、彼の妻だった人のような気がして、成美は早口で言っていた。

いずれにしても、公務員に残された休みは今日をのぞいてあと4日だ。

仕事始めには、いくら嫌でも氷室は灰谷市に戻るしかない。

そうよ。その意味じゃ、私が勝ってるのよ。

氷室さんはどうしたって——どうしたって私のもとに帰ってくるようになったらから。

と、無意味な虚勢をはったところで、ポケットに入れておいた携帯が鳴った。

「すみません、うちの親かも」

ちよつと慌てた成美は、急いで携帯を取り出して息を引いた。  
げっ、雪村主査。

なんだって、元日に携帯に電話してくるわけ。

「いや、えっと、親ではなくて」



どうしよ。この場合、出ないで無視を決め込むべきか。それとも隠れてこっそり出るべきか。

なんにしても、履歴を確認されたら問答無用でおしまいである。氷室の尋問に、成美は耐えられる自信はない。

「し、仕事のことだと思えます。うちの係の雪村主査から」

「出て」

観念して白状した成美を、氷室はひどく穏やかに促した。

「え？ あ、はい……」

なんだろう。この優しさ。

これって、何か——強烈なおしおきのフラグだろうか。

「あ、雪村さん、あけまして」

「お前さ、4日大丈夫なわけ」

おめでどうも言わない内から、雪村の冷やややかな声が成美の耳に飛び込んできた。

「え、4日って……」

「コンサート。誘ったろ。年末に  
しまった。すっかり忘れてた。」

しかも「コンサート」とか「誘う」とか、危険なワードがてんこもりである。

成美は慌てて携帯を手で覆った。

「あ、ああ、例のあれですね。あの、うちの課長が主催の」

「は？」

すみませんっ、雪村さんっ。事情は年明けっことで。

「い、行きたかったんですけど、その日はまだ実家だと思います。すみませんっ、課長によろしくお伝え下さいっ」

電話を切った成美は、いかにもなんでもありませんでした、といった顔で氷室を見上げた。——が、無駄だった。

「尾崎課長が主催のコンサート、ですか」

う、相変わらずの地獄耳だよ……。

てゆっつか、携帯の相手の声がきこえるって、もう人として反

則の域に入っていないませんか。

「あ、あの、課長が……なんていいいますか、コンサートチケットが余つてるとかで」

嘘の上塗り。

レベルは違うが、改めて美和の積年の苦しさが思い知らされる成美である。

「行ったらいいと思いますよ」

しかし、あつさりと氷室は行つた。

「もしご実家の都合がつけば、行つたほうがいい……。前も言いました。人脈は、仕事をする上では何よりの財産です。君の

年ではもつと貪欲に、人脈を作る努力をすべきだ」

「……え、でも」

「僕なら、構わない。都合がつけば、ぜひ行つてご覧なさい」

あ、はい……。と、力なくうなずきながら、成美はわずかな不審をこめて氷室を見上げた。

これが逆の方向からのプレッシャーなら大したものだけど、なんだかそうでもない気がする。

どうしたんだらう。氷室さん。

なにか——あつたんだらうか。もしかして。

「行きましようか。雪が降ってきたようだ」

——雪……。

見上げた灰色の空からは、再び音もなく白いものが舞い降り始めていた。

触れれば消えてしまうほどの粉雪だが、それが先を行く氷室の背を不意に隠してしまうような不安に駆られた。

「あの、氷室さん？」

雪の中、氷室が足を止めて振り返る。

その微笑みを見た途端、成美は何も言えなくなっていた。

あの——帰ってきますよね。

東京から。

絶対に帰ってきますよね？

その言葉は何故だか喉に張り付いたようになって出てこない。

言えば、そのあり得ない不安が現実になりそうな気がして――

雪がこのまま、氷室をどこか遠くに、二度と戻れない場所に  
つれていってしまいそうな気がして……。

「沢村さん」

小さく声をかけると、腕組みしたまま目を閉じていた男は、  
我に返ったようにその目を開けた。

野性味を帯びた端正な顔が、ぎよつと狼狽えたように、崩れ  
る。

「……終わりました？　もしかして」

「ええ。少し前に」



照明の灯りはじめたホール。2人の周囲では立ち上がった観客が、出口に向かって移動を始めている。

額を手で押さええてうつむくと、沢村は低い声でぼそりと言った。

「……すみません。昨夜は、友達と朝まで飲んでいて」

それは言い訳で、単にクラシックが苦手だったのだろう。そう思ったが、明凜は特段の表情を見せずに立ち上がった。

「気にしないで。疲れもたまっていたんでしよう」

新年の4日。世界に名だたる交響楽団の演奏会は、盛況な客入りだった。

二千人収容の大ホールは、今も観客たちのざわざわという喧騒に包まれている。

明凜は手にしたコートを羽織って、腕を通した。

隣で、沢村も立ち上がる気配がする。

「今日は、……誘ってくださってありがとうございます」

「いいえ」

その沢村を振り仰いで、明凜はわずかに微笑した。途端に、男の目が狼狽えたように逸らされる。またか、と明凜は思った。今夜は、最初からずつとそうだ。

よほど、私と2人でいることに緊張を覚えているのだろうか。

とはいえ、そういった反応には慣れていて、どうも自分という人間は、昔から他人には居心地の悪い存在らしい。

が、道路管理課に所属する2歳年下の男がみせる反応は、それとは少し違う気がした。

「お礼のつもりだったけど、かえって迷惑だったのでは」

「……そんなことは、ないです」

「そう。だったらいいけれど」

さて、どうしよう。これから。

明凜は腕時計を見てから、肩を並べて歩く男を横目で見上げた。

どうやら今夜の主導権は、全て自分に委ねられているらしい。年も立場も下の男というのはこんなものかもしれないが、今夜の沢村の態度は、明凜には少し意外だった。

もう少し、気骨があるというか——悪い言い方をすれば、女性慣れしているように見えたのに。

和食がいいかな、それともフレンチか何か……。そう思いながら、明凜は訊いた。

「沢村さん。こんな時間だけど」

「送ります！ バスですか？ 電車ですか？」

「……………」

え、なに、そこだけ即答？

それまで、何を聞いても、はあ、とか、まあ、とか、曖昧な返事しかしてくれなかったのに。

目を丸くした明凜を見て、さすがに自分の反応のまずさに気づいたのか、沢村はぎよつとしたように視線を彷徨させた。

「……あ、いや……」

まあ、そんなに帰りたいたいなら無理に誘う気はないんだけど。

「食事でもと思ったんだけど」

「え、そ、そうなんですか」

「今夜はもう帰りましようか。私ならタクシーで帰るので、帰

りは心配してもらわなくても大丈夫です」

「は、はあ……」

いかにも失敗した、と言わんばかりの表情で頭をかく男を、明凜はしばし、珍しいものでも見るような気持ちで見つめていた。

おかしな人。

男性に敬遠されるのは慣れているが、ここまで露骨な態度に出られると、むしろその理由を問いただしてみたい衝動に駆られる。

いずれにしても、初めて会った頃の印象とはまるで別人だ。

不遜で、粗野で、不躰な目でじろじろ人の顔を見て……もう2年近くも前の話だが、あの頃感じた不快感は、長く明凜の中に残っていた。

少しでも気を許したら何をされるか判らない危険な空気が常に漂っていて、仕事柄接点は多かったが、できるだけ2人にならないよう気をつけていたような気がする。

彼の雰囲気が変わり始めたは、道路管理課長に氷室天が着任してからだ。

初めて自分より何もかも格上の男が上司として君臨したからだろうか——いつも冷めた目で、他人を馬鹿にしたような態度

をとる沢村が、何かにつけて氷室に振り回され、右往左往していたのが印象的で面白かった。

そう考えると、少し判らない。

いったい、本当の沢村はどちらなのだろう。

29

じゃあこれで、この夢みたいな時間も終わりつてことだな。

沢村烈士は、視線をさげたままでため息をついた。

正直あまりに緊張しすぎて、いい夢だったのか悪夢だったの



か判らないけど。

——先日のお礼、というのでもないのだけど

そんな電話が、目の前の女からかかってきたのは、仕事納めの日。正午のチャイムが鳴った直後だった。

（4日にクラシックのコンサートがあつて、……たまたまチケットを知人からもらったので、もしよければ）

手元で湯呑みの茶がひっくり返り、隣席の宮田が口をぱくぱくさせながらしきりに手でジェスチャーをしていた。

後で気づいたことだが、卓上には市長の公印文書がいくつか置かれており、それが全部駄目になった。いや、そんなことす

ら、その時の沢村にはどうでもよかった。

いや、俺のしたことなんて、そもそもお礼をしてもらえないよ  
うな行為じゃないし。

正直言えば、あの時一瞬、あんたのこと姦っちやおうかとか  
思ったし。胸とか結構エロい目で見ちやっつたし。

それに……。

そもそも俺に、そんな資格、ないし。

そんな言葉が、頭の中を高速で駆け巡っていた。

結局それは、一言も口からは出てこず、「いや……じゃあ、僕  
でよかったら」と、がっちがちに強張った声で、答えてしまっ

たような気がする。

さらに最低なのは、その日の5時過ぎ、エレベーターホールで顔を合わせてしまった時だ。

お気に入りの玩具（日高成美）をからかつて遊んでいたら、いきなり隣のフロアから柏原明凜が現れた。

その瞬間、自分の心臓がどこかにふっ飛び、全身が石みたい  
に固まった——といったら、目の前のこの人はどう思うだろう  
か。

まあ、ただの馬鹿だと思っただろうな。

「あの、今夜は本当に、ありがとうございました」

ホールの玄関を出ると、マフラーを締め直し、沢村は丁寧に一礼した。

「実はクラシックなんて初めてで。……ちよつと寝てしまった部分はあるんですが……いい経験になりました。CD、買って聞いてみますんで」

「こちらこそ」

明凜は、あるかなきかの微笑を浮かべ、やはり丁寧に一礼した。

「去年は、危ないところを助けてもらってありがとう。……こんなことで、お礼になったかどうか」

「あ、いや、すごく楽しかったです」

慌てて沢村が言い添えると、少しだけ女の口元が優しくなつた。

「楽しかった」

う、その反復は間違いなく厭味だぞ。

「た、楽しいとは少し……。なんていうか、リラックスした気分になりました。はい」

「そう」

意外にも、ますます優しく唇をほころばせた女は、少し考えるように首をかしげてから、言った。

「私は、沢村さんのことを何も知らないから……。いまさらだけど、氷室さんにでもリサーチしてから、誘えばよかったのかもしれないわね」

「は、はは……」

引きつりそうな笑いを懸命に押し隠しながら、沢村は氷室に對する皮肉を口の中で押し留めた。

氷室さんにリサーチだつて？ そんな真似されたら、何を言われるかしたもんじやない。あのドSな冷血課長は、俺をネズミみたいに追い詰めて遊ぶのが好きなんだ。絶対に、あることないこと、面白おかしく捏造するに違いない。

「補佐は、氷室課長とは親しいんですか」

「親しいというのとは違うけれど」

考えるように眉を寄せて、明凜は続けた。

「尊敬している、とでも言えばいいのかな。……立場が似ていることもあって、話があうのかもしれない。ただ、相容れないとは、お互いに思っているような気がする」

沢村は少し眉をあげていた。「相容れない、ですか」

「私は気障な男が生理的にまるで駄目で、課長は、私のような女が本来とても苦手なのだと思う。……まあ、それだけの話だけど」

「……………」

いや、それだけってあんた。

今、顔色ひとつ変えずに、かなり辛辣なこと言ったような気がするんですけど。

「なんにしても、苦手なものに誘ってしまったのなら、申し訳なかった。よく考えれば立场上、断りにくかったようにも思うし」

「いや……本当に寝不足だったただけですから」  
楽しかったです。

正確には楽しさ1、緊張9くらいの割合ではあったんですけど



ど。

こんなことは、もう俺の人生で二度とないような気がするから。

「CD、買いますよ。聴きます……悪くはなかった。正直、眠くはなりますけど」

そのまま、しばらく黙って歩き続けた。

ホール下の階段を降りたら、そこはもう県道で、タクシー乗り場には乗客待ちのタクシーが列をなしている。

そこまでいけば、この夢みたいな時間は本当に終わりだ。

……クラシック、好きになったら、また一緒に行ってくれ

ますか。

それは絶対にないだろうし、口にだすつもりもないけれど。ふと、暗い影が胸に落ちる。

——今夜のこと、紫凜（しおり）が知ったら怒るだろうな。怒るなんてものではないだろう。ある意味、狡猾さでは姉以上の賢しさを持つおそろしい女だ。いったいどんな手で報復にでてくるか判らない。

ますます面倒なことになると判っているのに、どうして俺は、今夜の誘いを断らずに、こうして出向いてしまったのだろうか。

もし、紫凜が、過去に起きた俺との何もかもを目の前の女に

話したら——口を聞いてもらえないことはおろか、生涯軽蔑され、憎まれてしまうと判っているのに。

その意味では、俺は、この人の顔をみる資格さえもないのだ。

「そんなに離れて歩くのは何故？」

「……え？」

ぼんりしていた沢村は、言葉の意味が判らずに瞬きをした。

気づけばタクシー乗り場の列は目の前だった。隣の明凜の目は道路の方を見ている。

「今夜の楽団のCDなら、私が全部持っているから、本当に興味があるなら、わざわざ買わなくてもいいと思う」

「あ……、はい」

クラシック、好きなんだよな。

元吹奏楽部だから。

正直、音楽のことはさっぱり分からないけど、タクトを持つ

あんたは本当に綺麗だった。

いつまでも、時間を忘れて見ていたいと思うくらい。

「どうして、……聞かないの」

「はい？」

思わず傍らの女を見下ろすと、その視線を避けるように、明凛はわずかに顎を引いた。

「あれからどうなったのか、どうして何も聞かないのかと思つて」

あれから――

それはもしかして、あの夜の顛末のことだろうか。

この人の同伴者を、半殺しにしてしまったあの夜の。

「……ああ」

数秒の後、ようやく隣の男は、明凜の問いかけの意味を理解したようだった。

「どうなったんですか、あれから」

まるで覇気のない、他人事のような口調に、明凜は小さく眉を寄せる。

この男が、灰谷市でも有名なセレブ、大明拓哉に全治2ヶ月に及ぶ重症を負わせたのはつい先月のことである。

前歯を2本失った上に、鼻骨と眼底の陥没骨折。幸い、整形手術が成功したそうだが、警察沙汰にでもなれば、間違いなく沢村は懲戒免職だったろう。

懲戒免職。公務員のそれは、この不景気に退職金も失業手当でもなしに職を失うということだ。

気にしない方が、どうかしている。

「……大明さんには、直接会ってはいないのだけど」

明凜は、曖昧に切り出した。

入院先に見舞いにいったところ、本人が会いたくないと言っている、との理由で拒否された。

「弁護士さんを通じて、話があったわ。当夜のことは、警察沙汰にはしたくないので、大明さんの将来のために承知してもらえないかと」

「ああ、じゃあ、気づいてないんすか」

それだけで、沢村は全てを飲み込んだらしかった。

「俺が補佐の知り合いだって、向こう、全然気づいてないんで

すね」

「むしろその後——大明さんが逃げた後だけど、私が被害にあったと思っただけだ」

沢村の横顔が、冷めた苦笑を浮かべるのが判った。

「それで黙ってるなんてどこまでも勝手だな。——で？」

「で、とは？」

「言わなかったんですか。俺のこと」

「……………」

言えるわけがない。

向こうは沢村を、行きずりのアベック強盗か何かだと誤認し



ているのだ。

それが明凜の知り合いで、しかも市役所の職員だと知ってしまえば、対応はまるで違ったものになっていただろう。

気づけばタクシー乗り場は通りすぎて、2人は繁華街から離れた官庁街に向かう道を歩いていた。沢村がどこに向かっているか明凜は知らないし、明凜もまた、どこに向かうあてもなく歩いている。

「別に、よかったのに」

やがて、嗤うような口調で沢村は言った。

「よかったとは？」

「そんな嘘ついて、バレたら後が面倒でしょ。バイクの車種とかメットとか、俺、体格が目立つから、結構バレやすいと思うけど」

「……………」

別に、嘘をついたわけじゃない。

知り合いなのかと、相手に聞かれはしなかった。

ただ積極的に本当のことを言わなかった。いわば無作為の罪くらいは、犯したのかもしれないが。

「落ち着いているのね」

前を見たまま、明凜は言った。

やはり、この人は私には謎だ。

掴みどころはいくらでもありそうなのに、いざ手を伸ばすと、すつと影のようにすり抜けていく。

「下手すれば、懲戒免になつていたかもしれないのよ」

「別にいいつすよ。なつたらなつたで」

さばさばした口調には、強がりも誇張も感じられなかった。

「特に今の仕事に未練ないし、公務員は制約も多くて窮屈だし。

……正直、もつと好きに生きたいって気持もあります」

確かにそれは、沢村という男の本質を言い当てている。彼には公務員という型にはまつた仕事は似つかわしくない。

ではそんな男が、何故市役所職員を志望したのだろうか。

「どうして、役所に？」

「別に、人に言うような理由もないです」

それ以上の質問を拒むように、あっさりと沢村は答えて視線を道路に巡らせた。

「このあたり、タクシー殆ど通ってないっすけど、元の道にもどりますか」

明凜は黙って、影になっている沢村の横顔を見あげた。

目が合うとうろたえていた時とはまるで違う。完全に明凜を遮断し、自分の中に閉じこもってしまった横顔だ。

出会って間もない頃の、沢村の印象そのものだ。

思いつめたような視線をぶつけてくるくせに、こちらが注意を払うと、さっと自分の周りに見えない幕を引いてしまう。

「……補佐？」

私は何故、今夜、この人を誘ったのだろう。

唐突に明凛は思っていた。

多分、知りたかったのだ。幕を降ろし、影になってしまった後のこの人の底に、いったい何が潜んでいるのか。

「どうして、私を？」

「え？」

「本当に、偶然……?」

「……………」

2人の前を一台の車が通過して、それきり静寂が訪れた。

黙っていた沢村が目をすがめ、それがゆつくりと影に隠れる。

「やっぱ、そこは、スルーしてもらえないっすか」

暗い、笑いを帯びた声だった。

「あんたのこと、つけてたんです、俺。あの日だけじゃない。

ずっと前から、あんたに興味があったから」

「……………」

不思議なくらい、驚きはなかった。

明凜は黙って男を見つめた。

「あの日もそうだったけど、弱みでも握って誘惑して、一発やれたらいいくらいに考えてました。今までいろんなタイプの女と遊んだけど、あんたみたいなの初めてだったから」

言葉を切った沢村は、ポケットに両手を突っ込んで肩をすくめる。

明凜は黙って、そんな沢村を見つめ続けた。

「そんなわけで、お礼言われる筋合いもなければ、嘘までついて庇ってもらう理由もないんです。大明には、早めに本当のこ」と話してください。なんか後で、目茶苦茶面倒なことになりそ

うな予感がするんで」

「……嫌じゃ、なかった」

ぽつり、と明凜は呟いていた。そして自分の右手を左手でぎゅつと握った。

沢村が訝しげに眉を寄せる。

「……理由はよく判らないけど……どうしてだか、男の人に手を触れられるのが、昔から私は駄目で……。あんな風に……」  
大きな手で、自分の手を包むように握られて。

「……どうして、嫌じゃなかったんだろうって、それがずっと、  
気になってた」



沢村の目の底で、初めて何か揺らぐのが見えた。

しかしその揺らぎは、すぐに冷めた笑いで上着きさされる。

「そりや、……異常な状況だったからでしょ」

明凜が何か返す前に、男は唇を笑いでゆがめて視線を下げた。

「なるほど。それで今夜は、俺を試したってわけですか。かえって面倒かけたのに、お礼に誘われるなんておかしいと思いましたがよ」

試したわけではない。

でも、そうだともいえる。

「で、もっかい手でも握ればいいんですか。それともキスでも

しましようか。それ以上のことでもいいんですけど」

そんなつもりじゃない。

でも――

不意に目の前に影が動いた。

手首を握られた時、少しだけ身体を固くした。それを有無を言わさず引き寄せられる。反射的に顔を上げると、沢村の目が見下ろしていた。

星も宿らない、暗い双眸。吸い込まれるように動けなくなる。

「逃げないんですか」

「……………」

「それじゃまるで、俺のこと好きって、言ってるみたいすけど」

「……………」

気のせいだろうか。

怒ったようにそう言う沢村の方が、今の自分より緊張しているような気がする。

押されるままに後退り、とん、と背中が壁に触れた。

影が覆いかぶさるように深みを増す。

目を閉じる暇もなかった。厚い唇が、そつと唇におしあてられる。

その瞬間、頭が真っ白になっていた。

心臓が、驚くくらい大きく聞こえる。身体全部が脈打っているようだ。

嫌じゃない——明凜は動揺したまま、数度瞬きして、目を閉じた。

こんな状況で、いつも感じる嫌悪感がない。その代わり、怖さからくるのか、膝がわずかに震えている。その怖さの意味も、明凜にはよく判らなかつた。

男性に迫られて——先日の大明のようなやり方は論外だが——恐怖を覚えたことは、今までない。ただ激しい嫌悪と自分が

自分でなくなるような底なしの虚しさで、半ば無反応になってしまふのだ。

そしてその度に思い知らされる。私はもう、誰に対しても恋を感じることができないのだと。

永遠のように長く感じたが、多分時間にすれば数秒のキスだった。

触れた時と同じように、沢村はそつと、明凜の感覚でいえば驚くほど優しく唇を離した。

「……………」

「……………」

熱、あるのかしら。

よく判らない。頭の芯がぼうつとしてる。

沢村は明凜を見下ろしている。額が触れ合うほど近い距離から、強い、熱のような視線を感じる。

怖いのに、何故か不思議に心地よくてその視線から逃げられない。

沢村の指が、ぎこちなく明凜の頬に触れて、そつと撫でた。

明凜は抵抗しなかった。でも乾いた指先が顎を滑ってうなじに触れた時、自分がひどく——初めてと喋っていいほどうろたえたのを感じた。

触れられている部分が、燃えるように熱い。

「俺……………」

明凜は何か、言いたいと思った。喉までそれがこみあげている。でもそれは、多分永遠に言葉にできない。

たまりかねたように唇が近づいてくる。明凜は息を吸い込むようにして目を閉じた。

その時だった。

いきなり、ハンドバックの中の携帯が勢い良く震えた。

「……………」

「……………！」

それが何かの合図だったかのように、2人は同時に身体を離していた。

浮かされていた熱からいきなり覚めて、現実に引き戻されてしまったようだ。

現実——ようやく明凜の中に、麻痺していた感覚が蘇ってくる。

馬鹿じゃない？ 私。自分の立場を忘れたの？ 今は間違っても、こんなことをしている場合じゃないというのに！

「ちよつと……電話が」

「……あ、はい」



おかしなことに、身体が離れると、互いの目も見られない。

沢村も沢村で、ひどくうろたえているのが、判る。

というより、このとんでもない気まずさはなんだろう。顔どころか耳までみるみる熱くなる。なににより、落ち着きの欠片もなく、バックの携帯がなかなか見つからない私つて……。

しかし、携帯の表示を見た途端、明凜の意識は水のように研ぎ澄まされていた。

## 「失礼」

沢村に聞こえないように気をつけながら、明凜は携帯を耳にあてて、急いでその場を離れた。

「悪いな、柏原君。休み中に」

「いえ、何かありましたか」

藤家（ふじいえ）総務局長――。

明凜の所属する部署のトップである。

公私のけじめに厳しい局長から、休日に直接電話がかかってきたのは初めてだ。それは、間違いなく緊急の対応を要する事態が生じたことを意味している。

「驚かずに聞き給え」

そう言う藤家の声が、少なからず冷静さを欠いているように思える。

「内々示だ。1月6日付で、君にはうちの部局を離れてもらうことになった」

「……………」

咄嗟に言葉が出てこなかったのは、時間にすれば2秒足らずで、すぐに明凜は、「わかりました」と答えていた。

異動だ。

年度中途の異動は、明凜のような霞ヶ関の人間にはよくあることだ。

しかし、今日が4日で、異動が6日とは、少なからず異例ではある。

人事異動は急遽決まることも多々あるが、大抵は、もう少し猶予をもつて告げられるからだ。

「移動先は、道路局道路管理課」

重々しい声で、藤家は続けた。

「同日付で退職予定の、氷室課長の後任、という形になる」

——え……。

何かの聞き間違いだろうか。氷室課長が、退職？

「君も知つての通り、道路局は来年度大規模な組織変更を敢行する。その中心になってプロジェクトを進めていたのが氷室君だ。墨田道路局長とも協議した結果、その後をつつがなく引き

継げるのは、柏原君しかいないだろうという結論になった」

まってください。そんなことより、氷室さんが——退職？

「これも周知のとおり、道路局には、開局以来、女性課長が存在したことがない。しかも君は、課長級では最年少の27歳だ。

周囲の反発は、相当のものだと覚悟した方がいい」

背筋に、鉄の板を差し込まれたようだった。

明凜は息を引き、そして吐いた。そのとおりだ。

今は辞めてしまった人を詮索している場合ではない。2日後には、大変な激震が待ち構えている。

「大変な重責だと思うが、ぜひ、やり遂げてくれ給え」

「わかりました」

きつぱりと答え、明凜は携帯電話を切った。

少し離れた場所では、沢村が不審そうな表情でこちらを見ている。

もちろん、今は何一つ打ち明けられない。しかし、これだけは分かっていた。

2日後には、この男は自分の直属の部下になる。

男の身分を自分の責任で守ってやれるかわりに、今夜のような真似は、二度と、間違つてもしてはならない。

眉を寄せたまま、明凜は暗い夜を見つめた。

どうやら、大変な新年の幕開けになりそうだった。

(終)